
私のリリカル・まじカオスな転生記

KUMAZAKURA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私のリリカル・まじカオスな転生記

【Zコード】

N6126U

【作者名】

KUMAZAKURA

【あらすじ】

物心が付いたころに前世の記憶を思い出したミッド出身で才能そこそこな主人公がリリカルな世界で頑張つて生きていく物語です（現在、Striker'sの時間軸、でもオリ展開中）目指せ勝ち組ライフ！のハズなのだが…

この小説は一人称のコメディちつな話を目指しています。
基本的にメインがリリカルですが、テイルズネタ（+その他）もたくさんあります。

お読みになる場合はぜひこのページを理解してお願いします。

序章1～ふるるーぐ

爽やかな日差しが差し込む早朝。

あまり人通りもない並木道を一人の子供が走っている。

「はつ……はつ……はつ……」

見た目、まだ5～6歳程度といったところの少年。といつより幼児の方がしつくづくる。

息はあまり乱れておらず、そのまま並木道は駆け抜ける。

そしてその先にある公園で走るのをやめ、歩く速度で中に向う。

そして大きな木の木陰にて停止し、息を整える。

「はあ、はあ、はあ……」

ようやく息が整ってきたところでポーチからスポーツドリンクを取り出しあげる。

「「クッ、「クッ……ふはあつーー！」

そしてそのまま幹に背を預け座り込む。

「あ～疲れたあ……でも体力は資本だから……」

若干幼児らしくないセリフを言いつつ休憩し

「よし！ 朝食前に戻るとしましょうか」

と立ち上がり、帰路につく。今度はゆっくり歩きながら……

ビハモ。

といつあえず自己紹介をしておいたと思します。

私の名前は『アペリス・ウラノ』 愛称は『リース

だが言つておくー 私は男であるー 一人称『私』 だが男であるー

重要だから2回言いました。 でも漢ではないのであしからず……

突然だが私には前世の記憶がある。

俗に言つ『転生者（笑）』だ。

ちなみに神様やトライックなどではなかつた。

物心が着いた時には前世の記憶があつたのだ。

出産直後ではなく、羞恥プレイがなくて心底安心したものだ……

正直な話、前世ではしがないサラリーマン人生を詰らなく生きていたため

転生キタ

(。 。)

！…だつた。

『私 t u e e e e e e e e e e e !』とか『私 s u g e e e e e e e !』には左程興味はなかつたが、絶対に勝ち組ライフを過ごしてやると思ひ情報収集したのだが……

「まさかのリリカルですか…ないですか…（^ _ ^）／」

そう！　この世界はリリカルに登場するニシドチルダだったのだ。

個人の資質がモノをいつあの世界である。

就労年齢がおかしいあの世界である。

三権分立？　なにそれおいしいの？な世　（ry

この世界は勝ち組と負け組がハッキリしており、下手すると人生開始時点で負け組な可能性があるので。

あせつた。メッシュチャ汗つた。冷たい汗が出まくつてた。

がそれも杞憂で、どうやら両親とも魔導師であり先天的にAランク以上はあるそうだ。

ちなみに両親は父が聖王教会所属の騎士で、母は元管理局員（現在は専業主婦）だ。

父のランクは陸戦AAA+、母は総合Aらしい。中々の高ランク魔導師な両親なのだ。

なので自分も先天的に高い魔力値を持つている。

なの破産（何故か二つ変換された）には到底及ばないが悪くはないのだ。

だがこの世界は死亡フラグが蔓延している……

弱いと何も守れない。

この世界を生きるには、暴力にしろ、権力にしろ、力が必要なのだ。

そのため、幼い身でありながら、できる限りの力を付けている。

現在も早朝ランニングを終えたところである。

「はあ……勝ち組ライフは未だ遠く…………ですか」

そう言つて朝なのに黄昏。

見た目は幼児だが黄昏。

「ん~とつあえず早く帰つて朝食としますか」

そう言つて帰路を急ぐことある。

「はあ…………これから先どうなる?」とのじょいつか……

正直、前途多難である……

序章2～決意する幼児

前世の記憶を思い出して一番初めにしたのは現状確認だ。

その結果わかつたのが、現在は新暦65年だといふこと、このがニシドチルダ極北地区のベルカ自治領だといふこと。

家族構成は聖王教会所属で教会騎士団の騎士をしている父と、今は引退しているが元管理局員の母の3人暮らしだ。

両親を名前で呼ぶことはなさそうなのでここでは翻訳することとする。

決して両親を軽んじてはいるわけではないが、普通自分の両親を名前で呼ぶ人はそうそういないだろう。

さて、ここで重要なのが現在の新暦である。

そう、新暦65年は『リリカルなのは』の始まりである『無印』が始まる年である。

「まあ、かかわるつもりはないからーんですけど……」

年齢：2歳。

魔力：あるかどうかわからない。

場所：ミッド（ここ重要）

どう考へても、2歳のガキが行けるわけありません！

てか行つて何ができると……

超テンプレのじ都合主義な展開があつても、口メンだ。

とゆーより、基本的に危ないことはイヤだ。

暴力なんて絶対ダメ！ とは言わなが、現代人感覚的にあまり
好ましくない。

「どーしましょーか……」

そこそこ考へた結果

とりあえず将来に向け、広い範囲の知識・技術を身に付けること
にした。

スペシャリストではなく、ジェネラリストを目指す。

RPGでは確実に2軍落ちの選択だがな！

明確に将来設計が決まってから選択肢を絞つても悪くはないだろ
う。

若いちは選択肢が多いのだ（・・・）キリ

それからまずは魔力制御の練習をすることにした。

2歳児が筋トレしてたら恐ろしいじゃん。

ほら、魔法ってなんだかんだ言つたつてあこがれるじゃないですか！

『EFB』とか『30歳過ぎてなる魔法使い』はマジゴメンだが

……

とりあえずスフィアをイメージしたヒューリー玉サイズの魔力球
ができた。

理論はまったくわからんができた。

自分はロジカルではないかもしれない。

前世ではプログラムの授業とか嫌いだつたし……

次は宙に浮くイメージをしてみた。

3mくらい浮いた気がする。

余談だが某タヌキロボットも足が3mほど浮いているため靴い
らずで現代を過ぐしているらしい。

ここまでわかったのは、才能は並以上あるらしい。

あまり訓練をせずに空を飛べるのは先天的にAランク以上であつ
たハズなので、少なくともAランク以上の魔力資質はあるようだ。
理論はまったくわからんが。

とりあえず5歳くらいまで魔力制御と知識習得を集中的にやっておくことにした。

幼いころから身体を鍛えるのはあまりよくないから、基本は体力作りのランニングだ。

両親は父も母も若くして就労していたからあまり息子の行動を不思議に思わないらしい。

ありがたいが現代人の感覚では若干問題ある両親な気もする……

てゆーかお母様、男なのに愛称が『リース』ってなんですか？

それスカートだよ！？（基本的に）女の子が穿くものだよ！？

何？かわいいは正義？

かわいければオールオッケー？

気持ちはわかるが本人にしたらたまたまつたものではない！！

父親譲りの金髪とアメジストの瞳に母親似の顔立ち……

でも男の子なの！！男の娘ではないの！！まあ漢でもないけど……

閑話休題

本日のランニングを終え、帰宅しシャワーを浴びる。

その後、家族3人で朝食をとる。

いつもの風景だ。

少し濡れた髪が鬱陶しい。

腰まである金髪。切りたいといつたらお母様に猛反対された。

そこまで娘が欲しかったのですかお母様……

まあDQNネームでなかつたのは不幸中（？）の幸いだ。

名前は出せないがアレりょうつけ相当まじだら（？）……

なんだか父さんが空氣だが、コレがウラノ家の日常だ。

序章3～龍に出会いう幼稚

突然だが家族旅行に行くことになった。

なんでも新婚旅行すらしてない両親だつたらしい。

あんまり世間一般的の常識は通用しない両親なのかもしれない。

それはともかく旅行だ。

行き先はとある管理世界の自然が豊かなところらしい。

きれいな風景を見ても何も感じないが……私は枯れていのうか？

正直な話、魔法世界の遊園地の方が万倍興味あつたがそこは自重する。

横でお母様が「旅行なんて初めてだわ～」と浮れているところを見ると言えない。

言えるわけがない。

てゆーかお母様、旅行行つたことなかつたのか。

閑話休題

やつて参りましたとある世界の観光地！

自然が豊か！ といふか自然しかない気がするよー。

ホテルはないが予約しておいたペンションがあるらしい。

とりあえず荷物を置いてから行動とのことで、転送ポートのあるステーションから大きな湖の畔にあるペンションへ向かう。

歩きで……

いやさ、大自然の中を車といつのはアレだからわかるけど徒歩はないでしょ……

もちろんランニングで体力を鍛えているため問題はないのだが、荷物背負つた6歳児に10kmも歩かせるか普通……

とりあえずトレーニングと思つしかない……うん、これはトレーニング

一ソングなのだ！

……両親の常識が本当に心配になってきた。

と、途中休憩や寄り道をしながら3時間かけてペンションに到着した。

いくら荷物を置いてからでも来た道を戻つて観光はしんどいよね、寄り道だ。

まあ及第点はあげてもいいかな、といふくらいは楽しめた。滝とかキレイだったし。

ペンションに到着して少し休もうとしたところ両親が釣り道具を準備していた。

釣りをするのか、と訊ねてみると

「夕食の材料を釣りに行くのよ～」

どうやら自給自足らしい……

旅行じゃなくてサバイバル訓練の間違いじゃないのだろうか？

またひとつ両親の常識が心配になつた。

お母様から釣り竿を受け取り湖の畔に行く。

父さんはひと狩り行くそうだ。Tシャツとハーフパンツスタイルで。

そんな装備で大丈夫か？と聞きたくなつたがござとなつたらバリアジャケットなり騎士甲冑なり出すだろ？。

一応は聖王教会所属の騎士なのだから。

草の上に座り、糸と水面の境界面を眺める。

お母様曰く

「これは『すいこつづざお』なのよー！
らしこ。

でっかい角生えた赤い金魚とか青い竜王とか釣れたらマジでドンビキだが、どうやらそいつ方面の釣り竿ではないらしい。

てゆーかその場合は生命の危機だ。

何も持たず草むらに入るのが大変危険なのがよくわかる。

少し離れたところではお母様が

「ーフフイッシッショーー ふつ、釣り须くしてしまつてもモーマンタイね！」

アングラーになつていきました。

てゆーかそれは大問題です。

環境破壊です。

まあそこまで釣れはしないだろ？から大丈♂「18 & amp; 1

9 同時フイツツツツツシユツ！」

大丈夫だろうか？

両親の常識もそうだが、湖の生態系も心配になってきた。

そんなことを考えていると自分の釣り竿にも何か引っかかったようだ。

一瞬引っ張られたが、その後の抵抗はなかつたのでゴミか何かと思ひ、ゆっくりリールを巻いていく。

以外と重かつたが問題なく引き上げていく。

骨とかだつたらやだなあ、などと思いつつ糸の先にあるものを確認する。

「これはないです…」

タマゴだった。

針が引っかかるところなどなかつたが、糸と針が上手く絡まり引っかかつたようだ。

変な模様があり、人間の頭蓋骨以上の大きさはある。

明らかにヤヴァイだろーエイリアンとか生まれてくるんじゃないの！？

怖いので見なかつたことにして、そのまま湖に投げようとしたところタマゴから音が！！

慌ててタマゴを落としてしまつたが割れなかつた…ビツサラ丈夫らしき。

いや不思議なご都合主義に守られているのかも知れない。

それもつかの間、タマゴが揺れている。鱈が入ってきた。

ヤヴァイ ヤヴァア 「31・32・33・34・35！ 5連フイツ
ツツツシユー」

生態系も現在進行形でヤヴァイかもしれない。

とゆ一より5匹もビニに引っかけているのさ？

そんなことを考えているうちに鱈は全体に広がつてしまわ……

「ああ、うーーーー。」

光とともに氣の抜けた鳴き声が聞こえた。

恐る恐る見てみるとそこには

つぶらな瞳

青くて長い胴体？

Hラのような耳かぞり？羽？いやHラか？

口なのか鼻なのかわからん白くて橢円の……口？鼻？

……これなんで//—ココウ？

その日、幼児はドリームに迷合つた。

序章4～龍を託された幼児

「お持ち帰ついいいい……！」

3桁を超える魚を陸へと誘つたお母様がミニリュウ（仮）を見てのたまた。

かわいいは正義らしー。

そんなお母様を見てミニリュウ（仮）は私の後ろに隠れてしまつた……ヒューか足に巻きついた？

とつあえず持ち上げてみる。

ぬるりとするかと思つたがそつでもないらしー。

胴体が長くて全部は持ちあげられなく、体長は1・2㍍くらいあります。

「きゅう～

と鳴きながら頬ずりしてみよつた！

もしかしたら親もしくはマスターへと認識されたのかもしねりない。

ヤヴァアくない？タマゴから生まれた以上は親がいるはず…

ハクリューが出てきて『はかいせひせひ』してみたら……テッド
ハンドじゅねえ？

……セツヒノコロウ（仮）を湖に帰す。

「 もも「フー・もも「フー・もも～…………」

振り返るな！ 振り返っちゃダメだ！ 行け！ 行くんだ！！！コロウ（仮）！

某アライグマの最後を彷彿させるやつとりだつたが無事帰すことができた。

ただ沈んでいつただけかもしれないが……

お母様は感涙していた。

「 ひづの子供が立派になつて…」

……お持ち帰り宣言した人のセリフではないな。

それもつかの間、急に天気が変わつて曇り空になる。

なんか『ゴーハーハーッ』と効果音が聞こえてきそうな空だ。

選択肢を誤つたかもしねり。

さすがのお母様も……って既に臨戦態勢だった！

『すゞこつづき』を構えている！

ちょい待て、何を釣るつもりだ……

「IJの急激な天気変化は湖の主が現れる前兆なのよ……」

ネッ一か？ ツシーなのか！？

そのまま現れたのは……

「キュウウウウウウウ！」

先ほど湖に帰したミニコロウ（仮）を頭に乗せたハクリュー（推定4m）だった。

初代ではチート王ワタルの2番手、3番手。
金銀では1匹リストラ。

ポケスペでは『はかいじうせん』で街破壊。よくハクリュウと誤記されるアレである。

よくもひの子を……

『はかいじうせん』『めのまえが まつしゆに なつた』のデラシドエンドかと思つたがハクリュー（推定43）が近づいてきた。

「泥棒猫……」

『たたきつける』『めのまえが まつかに なつた』

のデラシドエンドかもしれない。

などと思つていたらこきなつ//ココウ（仮）を私の腕の中に押しつけてきた。

わけもわからず突つ立つたまま//ココウ（仮）を受け取つてしまつた。

ついでに首の水晶も渡してきた。

とれるのかよ！
飾りなのかよ！

そもそもこれなによ！
この//ココウ（仮）を貰へしらと！

複数の同時思考がハクリュー（推定4歳）の行動に対してシッコミを入れていた。

「さあうへ」さてマルチタスクを習得したらじー。

だがこいつの混乱などお構いなしにハクリュー（推定4歳）は湖の中に去つてこぐ。

去り際の背中は『後は託したぞ』と語つてこるよひだった。

とお母様が言つていた。

結局は育児放棄やん。

そう思つた私はおかしいのだろうか？

てゆーかマジドリーココウなのか？

仮に正式答が違つても最終的にはあわじまでも痛つことがわかったのだ。

「さあうへ」

.....エリザベスがおこなったのを聞かれたよしだ。

ペロコーンー

【かわだしトレーナー】の称号を得ました！

ペロコーンー

【謎の水晶（母の愛）】を手に入れました！

ペロコーンー

【マルチタスク（4分割超高速通達）】を習得しました！

序章5～運命に出会いの幼児

【かけだしトレーナー】

説明：トレーナーとして第一歩を踏み出した者の称号
条件：初めて自分のポケモンを手に入れたとき

効果：向上心 好奇心 一般常識

備考：俺たちの冒険はこれからだ！！

ピロコーン！

向上心が上がったような気がします！

好奇心旺盛になりました！

おきのどくですが一般常識がなくなってしまった！

……こらんわ！

結局、ミニリュウ（仮）を連れて帰ることになった。

親公認のマスターになってしまったようだ。

そんなこんなで早めに旅行を切り上げることになり、ミニアドに向つことになった。

まあ帰つも大変だつた、と嘆いておひる。

「の両親に一般常識を求めるのはやめないとこよし……

セシル//ココロ（仮）せじつやはら魔法生物に該当する//。

施設行きかと思つたがやうつでもなく、種によつては申請して講習を受ければ飼つことができるやうだ。

あまり魔法生物を飼つてゐる例は少な//がゼロではない。

原作でのキヤロヒフコードみたいなものだらけ。

教会で登録ができるよつなので父さんが早速手続きをしてくれた。

それでお母様と共に聖王教会本部に行き、取付にて必要書類を書いていたのだが……

「名前ですか……」

正直考えていなかつた。

ポケモンはニックネーム否定派であった。

だがこつまでも//ココロ（仮）ではかわいそつだ。

進化しても//ココロ（仮）ではなくや虐待の域だらけ。

……進化キャンセルつてどうやるんだらけ。

不穏なことを考えてくるとお母様が思いついたらしく……

「よしー。『Jの子の名前はブルーアイ』『Jの子の名前は『ハク』にしてよいと思います!』ホワイト……」

あぶなかつた、社長嫁はマズイだらう。

お母様はやら不満げだが無視する。

「わちつきやう~」

///リコウ(仮)改めハクも嬉しそうだ。

無事登録が済み簡単な講習に入る。

まあ一般的な常識範疇の再確認である。

1時間ほどで無事に講習が終わった。

あとは帰るだけなのだが、せっかく教会にきたのだから見学していきたいとお母様に頼つと許可を貰えた。

お母様は友人とお茶をしてくるの」と。

6歳児に一人歩きを許可するのもアレだが都合が良いのでスルーする。

トレーニングを兼ねハクを抱きながら教会の周囲を歩く。
さすがに生き物抱えて聖堂内部に入るつもりはない。

ある程度の常識は弁えている……つもりだ。

聖堂の裏側に行くと屋外修練場らしきものがあった。

時間的に誰もいなかつ……いや、誰かいる。

小さい子供だ。

年は自分と同じくらいだひつ。

そんな子供が装飾剣のようなもので素振り……いや型らしきものをやっている。

「…………うわあ

ついつい声が漏れてしまつ。

到底子供とは思えないほどキレイな型だった。

中には少々ぎこちない動作も感じられるが、それを補つてなお魅せる何かを感じじる。

ヒヤッときの声でヒヤヒヤ震づいたよつて型を中断した。

そしてヒヤヒヤ振り向く「誰だお前は？」

「いや、あなたこの誰よ？」

そう返した私は悪くないと想い。

自分から名乗った上で尋ねるのが常識だと想います。

「ふんーなら別にいい。邪魔だからわざわざ立ち去れ」

「ここは公共の場……とまでは言わないけれど、あなたの許可をもひきよつの場所ではないでしょ？」

ちよつとからかってみたくなつたのをやがて返答すると……

「やうだな……」

ヒヤヒヤ……

「やうわつなんだよ……僕の田の前から……消えやー。」

斬りかかってきたやがった！

いや寸止めで脅しのつもりだらうが……

寸止めなら何もしない方がいい?
受けれる? それとも避ける?
てゆーか短気すぎだろ!?
今日の夕食はなんだろうか?

瞬時に思考がマルチタスクに切り替わる。

一部おかしいが気にしない。

寸止め? 本当に?

ハクを抱いているのに避けられるか?

誰かに似ているなこいつ…

昨日はシチュード(らしきもの)だつたなあ

左上方より首筋めがけて装飾剣が迫る!

無理! 受け止める!

左手を使って受けろ! ハクはそのまま右手で支える!
イメージしろ! この一撃を受けられるイメージを!
あつ今日は外食だつて言つてたつけ

この間わずか0・1秒。マルチタスクまじパネエ!

キイイイイイイイイン!!

「なつ! ?」

短気な子供の驚いた声が聞こえた。

向こうは止めするつもりだったが、不意打ちの一撃を受けられたのだ。

左手から展開した魔力刃によつて。

受け止めるイメージが盾じゃなく剣だつたためこうなつた。

止められてよかつたああああ！

攻撃は最大の防御おおおおおおおおおおおおおお！

とまでは言わないが、防御するくらいになら回避か攻撃の方が性にあつてゐる。

形状はあれだ。

薬味な断罪の剣。

もちろん相転移な力はない。

なんぢやつて断罪の剣だ。

イメージだけで再現できるとは……マジリリカル！

妄想乙
！

左手を振り払う。

「」

短気な子供がよろける。

私は魔力刃（なんぢゅうつて断罪の剣）を消しながら短気な子供に言つた。

内心は超ビクビクだけどね！

「手荒い！」挨拶痛み入ります。」

皮肉を込めて言い放つ。

「受け止めておいてよく言ひ……」

忌々しげに短気な子供が呟く。

「では自己紹介でもしましょうか？私はアペリス・ウラノ。」この子はハクと言います。さてあなたの名前はなんといつのですか？」

お前絶対に6歳児じゃねえだろ！

と外野からツツ「ミミ」がありそつだが無視して、丁寧に自分の紹介をしてから相手に尋ねる。

これが一般的に相手の名前を尋ねる態度なのだよー…わかつたか短気な子供よ！

「……失礼した。確かにそうだな」

反省したよつの自分の非を認めるセコフなのにどうとか高圧的に感じた。

そもそも睨んでるし！

「ふんっ。僕はHミリオ・G・カトレットだ。覚えたひやつやと田を済ませて立ち去れ」

なんですか？

黒髪だ……装飾剣も良くみるとアレに似ている。

おまけにシンテレ（現在テレなし）な感じがある。

ついつい凝視してくると……

「……まだ何かあるのか？」

そう言つてこちらに返してく【せつと坊ちやんの美貌に惚つてこるんですよー】

いきなり陽気な声が装飾剣から聞こえてきた。

「シャル！ お前、また……！」

【いやあ～でも中々やつますね！ 坊ちやんの一撃を受け止められるなんてスゴイですよー】

なんか褒められた。

でもはつかり言つて偶然でゆーか奇跡といつか……

【あつ僕は坊ちゃんの「バイスでシャルティエといいますー。】

「シャル！ お前の自己紹介などいらん！」

【ええ～ひどいですよ坊ちゃん！ 横暴ですー 出番下さることよー。】

一人（？）のやうとつは続いている。

言い方はあれだが仲は良さそうだが……

ハリコオにシャルティエ……

……！ れなんて『ステイニー』？

この日、幼児は運命に出会つた。

ちなみに今回の空氣はハクだった。

♪ロコーンー

【なにわやつて断罪の剣】を獲得しました！

♪ロコーンー

【ポーカーフェイス】を獲得しました！

序章6～心友に出会う幼児

「唔然として一人(?)のやうどりを眺める」と30秒ほど……

H//リオがよひやく気付いたよう

「なんてアホ面をしてる? 用がないならさっさと行け」

【坊ちゃん! ダメですよそんな言い方! お友達でもませんよ!】

「黙つてろシャル! そもそもそんなのはいらない!」

そうといつ懶くれた性格のようだ。

「えへっと、H//リオ君にシャルティH…… せん?」

「氣安く呼ぶな!」

【もつ坊ちゃんつたらー。あつ僕のことはシャルティHと呼び捨てで結構ですよ】

「シャル!」

なんとこゝの名前……

「えへあへやつきも言つたけど、私はアペリス。愛称はリー・ス。まあ好きに呼んでもらつて構わないけど、一応『男』だから……」

「……」

【.....】

「 もう 」

ハクが空氣を読んでくれた。

「 いつも勘違いしてやがつたな。」

「 一応聞いておくが、親の趣味です、 そつか」

「 ？ ハリオの剣呑な雰囲氣がなくなつた？」

なんか憐みとこゝか同情とこゝかそんな目をしている氣がある。

そんなハリオの心情を代弁するよつにシャルティエが

【いや～まさか坊ちゃんと同じ境遇の人に出会え.....】

それ以上は続かなかつた。

ハリオがシャルティエを投げ捨てたからだ。

【坊ちやあああああああん！】

宙を舞いながら叫ぶテバイス。

正直ウルサイ。

とりあえずハリオの態度とシャルティエのセリフから推測した

結果をH//ココに尋ねてみる。

「あの……あなたも「壁ひなー」……「ベッド」めん」

「 「 」 」

「 もも「つーへ」

相変わらず空氣を読む相棒だ。

が氣まずい空氣だ。

「あの……あなたはびひやつて……」

逃れたの？

氣まずこのでわう聞こてみると

「騎士になると、もつまつして聖王教会で騎士をしている叔父夫婦の家に」

「 もう、もうなの」

「 ああ.....」

また重い空氣が流れる。

「 もも「つーへ」 」

空氣を読んでくれる相棒も飽きて寝てしまつたらし。

「 「 」 」

そんな空氣を切り裂くよ'うに.....

【ひどいじゃないですか坊ちゃん！ いきなり投げるなんて！ セ
つかく... つてまたああああああ】

飛んで来て飛んで逝つた。

シャルノー！

「セツキのアレ..... お前は剣か格闘技でもやつているのか？ いや、
そんな動きではなかつたか...」

今度はHミリオが訪ねてきた。

いやあわかる人にはわかるもんなんだね。

「つづん、まだ特にやつてないんだ。毎日ランニングとか柔軟の基
礎はやつてるんだけど..... あつ魔力制御の練習もしてるんだけどね」
すなおにさう答える。

それを聞いてHミリオは驚いた表情をした後、下を向きぼそぼそ
と呟く。

「..... そんな素人に受け止められたのか」

お前はそんな素人に（寸止めとはいえ）切りかかつたんだよ。

と心の母でシシ「//」を入れておく。

「とよつやくH//リオが顔をあげて

「ふん……悪かったな。僕は平日の//の時間は大抵//で練習している。来るなら勝手にしろ」

「えつと、その……」

「来るのは良いが僕の邪魔はするなよー」

「テレ……た？」

「あつ、ありが……ヒツヘ」

「ふんつー」

アリスはH//リオは後ろを向いた。

そしてシャルティエの方に歩き出したながら//続けた。

「……話ぐりには聞こへやる」

なんかフラグがたつたらしい。

H//リオはそのままシャルティエを取りにいく。

そして……

シャルティエが星になつた。

ムチャしやがつて

まあそんなこんなで、どうやら私にも友人（とこの名の被害者盟友）ができたらしい。

ユミリオも行かてしまつたので私も戻ることにする

けつこう時間をくへたようだ。

お出でにならぬかと思ひたがひ

しかしエミリオの剣（注：シャルティエではない）は本当にキレイだった。

てゆーかエミリオ何歳よ?

良くも悪くも同世代の子供の対応じゃねえよ。

きっと相当苦労してきたのだろう。

苦勞は人を育てると言つし。

私も体力作りだけではなく、そろそろ本格的に格闘技でも始めようか。

ついでにハクも鍛えるか。

そんな事を考えながらお母様のところに向ひ。

「どうなしか軽やかな足取りで……

その日の夕食は「ハンバーグ弁当」だった。

わすがにペットが一緒にあ空氣と化してもいてもダメだった……

ピロニー！

【甲種準一級フラグ建築士】の称号を得ました！

序章7～修行を始める幼児

【甲種準一級フラグ 建築士】

説明：ツンデレをテレさせフラグを立てた者の称号

条件：初めてツンデレをテレさせた

効果：主人公補正 一般常識

備考：油断すると乙種（死亡フラグ）になるかも……

ピロリーン！

主人公補正が付きました！

おきのどくですが一般常識がなくなってしまいました！

これもか！

Hミリオに会うため、翌日にまた聖王教会本部に向づ。

教会までは定期便が出でおり、友達ができるので会つてみるとお母様に伝え、定期券と1人で行く許可を貰つた。

お母様も会つてみたいと言つていたが、Hミリオのトラウマを抉らないためにも連れていかない方がいいだらうと思い、もつと仲良

くなつてからと眞つておべ。

残念そつだつたがなんとか納得してもらえた。

H//リオの危機を未然に防ぐことができたようだ。

ハクを連れて教会裏手の屋外修練場に向かつとけよつじ休憩中のH//リオがいた。

「ここにちはH//リオ君、シャルティエ」

「ふんっ……H//リオで良い」

【こんなにちはリースさんー いやあ坊ちゃんにも……ってまだ何も言つてないじゃないですかあああああああああああああ】

シャルティエが空を舞つ。

「不用意な発言をしようとあるからだ」

いや早すぎるでしょう？

まあ昨日の言動を見るに嘘おつとじていたことは推測できるが……

「といひで昨日もこたが足元の生き物はなんだ？」

「いやハクが気になる様子。

「なんか見た田よくわからない生き物だもんね。」

「昨日もこったけどこの子はハクってこって、旅行先の管理世界で田舎つて飼うことになった……アーラン?」

「ああ、ハーハー。」

「自分で書つておこして疑問形で返すな……要はペシトとこハリとか」

「まあ概ねそんな感じだね」

「進化するヒペシトの範疇ではないこと思つが……」

「ハリオつてこいつなの?私は6歳なんだけビ……」

「僕もお前と同じだ」

「ハリオつてこいつは同じ年のみつだ。」

「絶対に態度とか言動とか6じゃないよ。」

「そんな怪訝そうな顔をしてくると……」

「必死に抗つて生きてきたからな……」

「『メン』……」

もう既に修羅の道を歩んできたようだ。

もうひとつ氣になつていたことを訊いてみる」とする。

「H//リオの型つて凄いキレイだよね。どんな人に習つてるの?」

そう、この年齢であれほどなのだ。

もちろんHミリオ本人の才能の割合も大きいだろうが……

「それは……【よくぞ訊いてくれました！ 坊ちゃんの師匠はこの僕！ ピエール・ド・シャルつてまたああああああああああ】……はあ」

良く飛ぶデバイスだ。

「デバイスが師匠なの？」

そう訊ねてみるとエミリオが教えてくれた。

シャルティエは古代ベルガ諸王時代に生きた騎士、ピエール・ド・シャルティエの記憶・人格を入れたインテリジェントデバイスらしい。

正確には当時はソーディアンと呼ばれる試作機だったらしい。

そもそも古代ベルガなのにインテリ型っておかしいしね……

うん、ですていにーだ。

休憩後エミリオはまた型の練習に入った。

邪魔するなと言われているので、少し離れたところで自分たちの修行を始めることにする。

この修練場は受付に言えば基本的に誰でも使用可能らしい。

平日のこの時間は業務のためか人はいないが……

「じゃあいいよハク！ちゃんと避けるんだよー。」

「 もううー。」

伝わったのだろうか？ 心なしか戦闘態勢に見えなくもないが：
まあいいか。

野球ボールサイズのスフィアを3つほど作成する。

「 Goー！」

そのスフィアをハクに向け撃つ！

「 キゅー！ もうーきゅー！」

そしてハクがそれをかわしつづける。

プチ弾幕じつこだー！

スフィアは誘導弾で制御の修練も兼ねている。

3つだけだと修行にはならないので徐々に数を増やしていく。

自己意思で完璧に操作できるのは7つまでなのでそれ以上は増やさない。

今度はスピードを上げていく。那次は動きを複雑にしていく。

またスフィアの一部はハクになるべく当てなによつても操作して

い。

やつやつてハクと自分の修行をしていく……

ボンッ！

「 わ わ わ わ ……」

あつピチコつた。

さすがにまだ生まれて数日だもんね……

ハクは一応覚えていた治癒魔法をかけて寝かしておく。

ハクが寝ている間は魔力刃の制御練習だ。

左手でなんぢやつて断罪の剣を発動する。

それを維持しながらHILLIオの型を真似て振るつてみる。

「 んつ、 気を抜くと消えそつになるかも……」

まだまだ修練が必要だ。

また、大きさや形状もイメージして変えてみる。

多少大きくなったり細くなったりする程度だった。

「どうやら基本形からはあまり変えられないみたいだ。」

「えへへ？」

さて、ハクが起きたよつなので第2ラウンドを開始する」とこし
よつ……

ピロニー

【初めての弾幕】の称号を得ました！

序章8～水晶の謎にせまる幼児

【初めての弾幕「じつこ】

説明：初めて弾幕「じつこ」をした者の称号

条件：初めて弾幕「じつこ」を実践した

効果：集中力 回避力 忍耐力 妄想力

備考：very easyです

一般常識

ピロワーン！

集中力、回避力、忍耐力が若干上がりました！

妄想力がぐいーんと上りました！

おきのどくですが一般常識がなくなつてしましました！

もうこいよ……

再びハクがピチュッたので今日はここまでにする。

また治癒魔法をかけて寝かしておく。

HIIリオも今日はもう終わりにするようで、型をやめてスポーツ

ドリンクを飲んで休んでいた。

一応帰りの挨拶をするため、寝ているハクを抱き抱えH//リオの方に向づ。

「お疲れ様エミリオ。私も今日はもう帰ることにするよ。また明日も良いかな?」

「ふんつ。勝手にしや。」これは公共の場なのだから「.

素直じゃないな~さすがシンтарレ剣士、口には出れないが……

「あつそうだ! ねえH//リオ! これってなんだかわかる?」

「」の間G/E/Tをせられた【謎の水晶（母の愛）】を見せてみる。ついの両親もこれがなんなのかわからなかつた。

無限書庫にでも行つて調べよつとも思つていたが、司書の資格がないこと使用手続きが面倒なので、それは最終手段にしておく。

まあ早いうちに資格は取つておく予定だが。

「なんだコレは? 見た感じは水晶のようだが……シャルわかるか?」

【ええ~なんですかあ? 営業時間は終わりましたよ~】

シャルティエはなんかやせぐれていた。

剣なのに飛んでばっかりだもんね。

「いいからどうなんだ？ 知つているのか？ それともお前は僕の話を理解すらできないポンコツキ ガイデバイスなのか？」

H//リオひでえ…

まあシャルティエは自業自得だが。

【……泣いてもいいですか？】

「泣けるならな、ただし音は出すなよ」

擬音表現すら許されなかつたようだ。

【・。・（つゝ）・。・】

器用な剣だな…

閑話休題

「えへっとコレなんですか？ シャルティエわかる？」

【ん~どれどれ……つてこれエレメンタルスフィアじゃないですか
!?】

「ほひ、知つているのかシャル?」

「シャルティエ、エレメンタルスフィアってなんなの?」

どうやらシャルティエは知つているようだ。

てかエレメンタルスフィアってなんぞよ?
【簡単に言つてしまえば魔力ブースト効果のある天然の水晶なん
ですが……】

えつ魔力ブースト?それだけ?

【このエレメンタルスフィアは魔力ブーストと魔力を自然エネルギーに変換する能力があるんです】

「自然エネルギーに変換できるつてことは、炎熱とか電気とか魔力
変換資質持ちと似たような」とができるつてこと?」

それなんてチート?

【理論上はそうですね。コレをデバイスのコアにするとあるいは..
..】

厨「まつしぐらやん!!

すると何やら考えていたエミリオが

「シャル、それほどのものならばロストロゴニア……とまではいかないが個人持ちは厳しいじゃないのか？」

そう！ 確かにそんなもん研究とか利用とかできれば戦略兵器で使えるんじゃないの？

と思つたのだが

【いえ、確かにすこく稀少なんですが、研究に成功した例がなく、あくまで理論上に過ぎないので、そこまで重要視されていないんですよ。一説では水晶自体が意思を持つていて持ち主を選ぶとか……】

どうやら持つていっても大丈夫のようだ。

【教会にもサンプルがありますしね】

「そつか。ちょっと残念だね。まあわかつただけでも良しとしますか」

まあわかつただけでも僕偉だ。

「んつ、ありがとうHIMIKO、シャルティエ」

【どういたしまして～】

「ふんつ、もしされでデバイスを作る気があるなら言え。僕の父は考古学者兼デバイスマスターをしている。まあ水晶をダメにする可能性の方が高いかもしけんがな」

「やつなの？デバイスは欲しいけどタダじゃないから親と相談する
ね」

やつぱりデバイスは欲しいもんね。

「うん、改めてありがとうございます、じゃまた明日ね！」

「ふんっ、勝手にしろ……」

はいはいシントレシントレ。

【いやあ～坊ちやんも……ってまだ何も言つてないじゃあない
でえすかあああ～】

シャルティ工は再び星に帰った。

君のやつかりスキルがダメなんだよ……

未だ寝ている空気^{ハク}を抱えて帰路につく。

うん、充実した一日だった。

帰つたらデバイスの話をすることにしておいた。

【謎の水晶（母の愛）】が**【エレメンタルスフィア】**に更新されました！

序章9～デバイスを作る幼児

家に帰つて早速お母様に「^{エレメンタルスフィア}水晶のこと」を話して、デバイスの件を伝える。

「一つ返事でOKがもらえた。

うん、もう少し悩んで欲しかった。

ませっかく許可が下りたのだから、デバイスを作つてもいい」と
にじよひ。

翌日も聖王協会本部に行き、エミリオに「デバイスの件を伝えた。

「ふんつ、まあいいだろ。明日紹介してやる

【もう坊ちゃんつたらー。頼りにこなれどうれい…つてまたあああ
あああー】

ほんとこちく飛ぶデバイスだ。

さて今日も昨日に引き続き修行をすることにする……

その翌日、HIIリオに会って行くと

「ふんつ、案内してやるからここにこ

練習をやめて案内してくれた。

シャルティエが言いかけたとおり頬りにされるのが嬉しいのだろうか？

てゆーか「ふんつ」から始まるのがクセなのか？

HIIリオが案内してくれたのは教会本部の一室だった。

どうやら来賓控え室のような場所らしい。

「HIIリオです。昨日お話ししました件について参りました」

きちんとノックして丁寧に目的を述べてから入室する。

実の父親に対する態度じゃないなあとは思つたが他人の家庭事情まで首はつこまない。

てゆーかH//リオお前が、田上にせめりこと対応でやるのね。

H//リオは最初斬りかかつてきたクセに……

H//リオの後について入室すると、学者風だがダンディーなおじ様がありました。

「やあ、君がアペリス君か。私はH//リオのメドヒコー門下につ。
よろしく頼むよ」

ルニー門下んキタ (。 。) - - -

わくがH//クリアンは……いなこよ。

「初めましてアペリスといいます。今日せわざわざお越しいただき
てありがとうございます」

挨拶はまきひとせねばな。

「早速で申し訳ないがHレメンタルスフィアを見せてもらえないだ
らつか?」

やはり学者として興味があるのだろうか?

とつあえず渡すこととする。

ルニー門下はしげりへそれを眺めながら何かを考えてこるよう
だ。

「その水晶でデバイス作りは可能なのでしょうか?」

「ミリオがヒューバーに尋ねてくれた。

これでできなかつたら無駄足だもんね。

「つむ。ブースト型デバイスとしては問題ないだろ?」

「おー! ヒューサウジデバイス作成は可能にして。

が、ヒューバーは「だが」と続ける。

「自然エネルギーの変換まではできるかわからない。あれにはまだ
まだ解明されていないことばかりだからな」

厨「は先送りのようだ。

「君たえよければ早速デバイス製作にとりかかるが、どうするかね
?」

「是非お願ひします」

迷う」とはないのでそつ答える。

「では製作にとつかるとじよつか。ふむ、時間は一週間といつた
といひか。できあがつたらミリオに伝えることにするから今日は
もうおひらきとしよつ」

何か嬉々としている感じがする。

根つから学者、研究者体质なのか?

まあ何はともあれ1週間後が楽しみだ。

さて完成までの1週間だが相変わらずの修行だ。

ハクの回避も上達している。

しかも反撃の『でんじは』らしきものを撃つてきた。

もしかししてレベルが上がったのだろうか？

ちなみにシャルティHは相変わらず空を飛んでいた。

そんなこんなで一週間、ついにデバイスが完成したらしい。

今回はヒュー『さんが修練場に来ててくれた。

試しに使用させながら説明するらしい。

「つむ、これが完成した君のデバイスだ」

そういう以前とあまり変化ない水晶を渡された。

いや紐というかチョーンといつかネックレス型にはなっているのだが……

「水晶自体は加工できないので形はそのままだが、きちんととしたデバイスになっているので安心したまえ」

と補足してくれた。

「名前とかは決まっているのですか?」

DOONネームだったらいくら高性能でも使いたくはないからな。

「いや、君が決めてくれたまえ」

「わかりました。ちなみにこのデバイスの特徴は……」

名前を決める上で重要なことだと思い訪ねてみると……

「つむ! よくぞ聞いてくれた! このデバイスは基本的にはブースト型デバイスで補助魔法に適しているが、それだけではないのだ!

なんと…なんと…なあああんと…一部ではあるが自然エネルギー変換の力を使用することができるのだああああああつゞほつゞほつ…！」

キャラ崩壊しました。

そつとHリオの方に見ると、目を逸らされた。

どうやら父親にも苦労しているらしい。

てゆーか自然エネルギー変換できるの？

厨一まつしぐら決定ですか。

とりあえず訪ねてみるとすると

「一部と言つても直接的魔力を炎や電気にできるわけではないのだ。エレメンタルスフィアはそれぞれ特徴があるようで、これの場合は大気中の『水分』と『温度』を操ることができるのでよ」

大気中の『水分』と『温度』？それって範囲を大きくすれば『天候』を操れるつてことじやないの？

確かハクリューの図鑑では天氣操るとか書いてあつたような…

「うむ！ 天候とまではいかないが凍結や電気の魔力変換に近いことができるだね！」

どうやら厨一デバイスを手に入れてしまつたらしい…

ピロニー！

【エレメンタルスフィア】が【厨二デバイス】に更新されました！

ピロニー！

【魔法使い始めました】の称号を得ました！

序章10～ショッキングな出会いをする幼児

【魔法使い始めました】

説明：初めてデバイスを手に入れた者の称号

条件：初めてデバイスを手に入れた

効果：全ステータス 一般常識

備考：魔法使いの第一歩！さああなたも一緒にレッツ・リリカル

ピロワーン！

全ステータスが少しだけ上がりました！

おきのびくですが一般常識がなくなってしましました！

あきらめよつ……

「さあ個体名称を登録して起動してみたまえ」

私の心情など知りずヒュー「さんは起動を急かす。

とりあえず起動してみるか……

「マスター認証『アペリス・ウラノ』『

手順に乗つ取つて起動していく。

「正式名称……『セイクリッド・スカイ』」

なぜかその名が頭に浮かんだのだから仕方ない。

略して『セカイ』：自分で言つておいて後悔した。

どつかでヤンデレフラグを立ててしまつたかもしれない……

【マスター『アペリス・ウラノ』デバイス名『セイクリッド・スカイ』登録完了しました】

登録されてしまつたようだ。

うん、強く生きよつ……

「セイクリッド・スカイ！ セット・アアアアップー！」

ヤケクソだ。

どうとでもなれ。

【セイクリッド・スカイ起動します。バリアジャケットのイメージをお願いします】

デバイスに冷静に返された。

……悲しくなんてないんだからね！

しかしバリアジャケットかあ……選択肢をノースルと終わりかも……

6歳児にはアレだが、無難に制服型にしておこうつか。

「よし！ 改めてセーツ・アーツフ……」

一瞬だが光に包まれる。

光が収まつた後に自分の姿を確認してみる。

「うん、イメージ通り？」

イメージしたのはとりあえず白い制服系統の格好だ。

髪は邪魔になるので後ろで括つている。

でもこれは……この姿は誰かに似ているような……

なんか僕つ子で男装ヒロインのような……髪も眼も……ぶつちやけシャル……

いや、気のせいだ。

気にしたら負けなんだ……

無事起動を終えたところでヒュー「さん」が試してほしい術式があるので早速試してみる。

「セイクリッド・スカイ！ 試験魔法1発動！」

多少長くても『セカイ』とは呼ぶものか！

【拝承。試験魔法1発動します。ターゲットを選択して下さい】

ん？ ターゲット選択？

疑問に思つてゐるとヒューイーさんがターゲットを指定。

サンドバッклしきものを狙う。

【試験魔法1発動】

うおつと、じつそり魔力を持つていかれた感じだ！

その一瞬だが目を逸らしてしまったため、改めてサンドバックを確認すると……

「……ソレなんてゼッタイれいど?」

サンドバック周辺が完璧に凍りついていた。

辛うじて碎けてはいなかつたからEFBではないだろう。

!

ヒュー・ゴさんがスゴイことになつてゐる。

ヒリオの顔を見る」事ができぬにない……

そして試験魔法1と2には、もあるわけで……

「……コレなんてインティグネイション……？」

魔力を使い果たしぐつたりしながらサンドバックの行く末を眺める。

一発で魔力を相当持つていかれた。

ちなみにサンドバックは跡形もなく消滅している。

「……ちやつてる」

さすがに雷の極光と轟音で人が集まつてしまつた。

だがみんな「なんだ、またヒューローさんか……」とか言って興味を無くして1人また1人と戻っていく。

「ハヤシルバー」さんの奇行は今に始まつたことではないらしい。

ちなみにエミリオは試験魔法2の発動前に避難しており、他人のフリを決め込んでやがる。

もう親子だと知られているだらうから遅いのに……

集まつてきた人が帰つていく中で1人だけ頭を抱えながら「あら
に向つてくる女性がいる。

纏つてゐる空氣が……表現できないくらい淀んでいる。

「……まだですか……またあなたなんですねジルクリスト博士……

逃げてほうが良いのだろうが魔力の枯渇からくる疲労感で動けや
うにない。

「НАНАНАНАНАНА……んつ？ グラシア嬢ではないよ……」

それ以上の言葉は発言すら許されなかつたようだ。

見事なスカイアッパーだつたとだけ言つておひづ。

「また修練場を破壊して……」

修練場の破壊も複数回やつてゐるらしい。

「あら？ あなたは？」

ヒロー「門さんを華麗に葬つた後、こちらに付いたらしく訪ねて
くる。

とりあえず事の顛末を話す。

話している内に纏つてゐる空氣がヤヴァくなつてきた。

- 1 -

美人の無言つてすごく怖い……

「えりと……お、お姉さん？」

「いいのよ。悪いのは全部このオッサンなんだから……ベルカが滅んだのもミシドに月がふたつあるのも管理局が黒いのも全部このオッサンのせいなんだからああああああああ！」

スケールでさえよ！

てゆーかメタな発言しないで！

「はあはあはあ…………取り乱してごめんなさいね」

一通り叫んで落ち着いたようだ。

「あの、あなたは？」

こちらの説明はしたが相手の話は聞いていなかつた。

やうにえはれりあらむ一門れんか

「ああ！ “ごめんなさい！ 自分の自己紹介を忘れていたわね。
は聖王教会 教会騎士団所属カリム・グラシアよ」

うつわああお！

あの年齢不詳で預言持ち、聖王教会と管理局を股にかけるお姉さ

まですよー。

「ここにきて初めて原作キャラと（物理的にショックングですが）出会いました……

ちなみにHミリオ、お前いつながることがわかつてただろ……

Hミリオには後で復讐する」とこいつよつ。

ピロニー

【厨】【デバイス】が【セイクリッド・スカイ】に更新されました！
ピロニー

【オリ主候補生】の称号を得ました！

ピロニー！

【なんちゅうつてぜつたいれいど】を習得しました！

ピロニー！

【なんちゅうつてインディグネイション】を習得しました！

序章11～えびるーぐ

【オリ主候補生】

説明：初めて原作キャラとの接点を持った者に「えられる称号

条件：初めて原作キャラに遭遇した

効果：全ステータス フラグ率

一般常識

備考：オリーシュとは別物です

ピロリーン！

全ステータスとフラグ率がやたらと上がりました！
一般常識？なにそれおいしいの？

＼（<○>）／

「ふふっ、お味はいかがかしら？」

「とてもおいしいですカリムさん」

「まあ悪くはないな……」

現在カリムさんの執務室でHミリオを含め3人でお茶しています。

ヒュー「『せんは田』覚めた後、再びスカイアッパーからの中のコンボで沈みました。

惚れ惚れしそうなコンボでした。

氣絶した（正確にはさせられた）ヒュー「『せんはシスター』に引きずられ運ばれていった。

その後、彼の行方を知る者は誰もいなかつた……

「冗談はさておき、カリムさんがお詫び（？）にお茶でもどうかと言つてきたのでハリオを連れ戻し、ハクを噴水に入れてからここにやってきて今に至る。

さすがに生き物を連れて聖堂内部には入らないよ？

まだ残っている（と思われる）常識的にね。

（注：ミッドでは自分の所有敷地外でのペットの放置は基本的にダメです）

ちなみにカリムさんとハリオは知り合ってない。

ヒュー「『せんは田』のせいで互いに苦労している感じだ。

「ふふ、ダンマイ。

ところでカリムさんは何歳なのだろう……？

思い切って訪ねてみようとするところ凄い寒気がした。

じつ尋ねても「テッドハンドしか見えてこない。

世の中には触れてはいけない法則おきてがあるようだ……

穏やかな雰囲気でお茶会をしてくるとカリムさんが切り出しつきた。

「Hミリオ君のことは（被害者盟友のため）知っているのだけど、君のことも聞いていいかな？」

まあ事の顛末くらいしか説明していないからな。

「あつはい！ 私はアペリス・ウラノと聞こます。年はHミリオを同じく6歳です」

「ウラノ？ もしかしてウラノ卿の「じ子息……は男の子」「私は男ですが」……そうなの！？ 「じめんなさいね。ちなみに、母の趣味ですか」……そつ、そうなの……」

カリムさんがそつと皿を逸らす。

「……あなたもH//リオ君と同様に苦労しているのね」

何が、とは言わないが伝わってきた。

悲しくなんてないんだから……

その後は他愛もない将来についてとかの話をした。

H//リオは騎士になると云つて家出していくので騎士を田指すとのこと。

ただし、魔法学院に通つつもりらしい。

すぐに騎士を田指し修行するものだと想っていたからビックリした。

なんでも学歴もあった方が今後のためだと言つていた。

まあ10歳から管理局勤めとかはアレだよね。

もし再就職とかする場合は、行先あるんだろ？

まあ中卒もどうかと思つたけどミシドの教育つて水準高いしね。

ちなみに私も来年からヒルテ魔法学院に通つ予定である。

ミリオにそのことを伝えると

「ふんっ、どうでもいいが僕の邪魔だけはするなよ」

はいはーシンテレシンター。

カリムさんはそれを微笑ましそうに見ている。

そして爆弾を落とす。

「よかつた～2人とも教会系列で。大変なことはみんなで頑張らないとねえ～」

「…………」「

どうやら逃げ道はないようだ……

さて、入学まであと半年ばかり。

それまでは修行と勉強に時間を費やすことにある。

平日は聖王教会本部の修練場で修行。

時折HIMIKOと試合もしている。

もちろんボロ負け。

素人が勝てるわけありません。

そんなわけで私もシャルティエに剣を教えてもらひ。

正直才能は微妙とのこと。

何をやっても『なんちゃって』になってしまひ。

できないのではない。できるけどやしないのだ。

相当器用貧乏らしい。

RPGなら最初から2軍確定だらう。

でもめげない！ だって男の子だもん！

それと並行してハクの修行も行つてゐる。

この修行だと努力値は体力と素早さだけだな……

ハクも成長しているらしく脱皮して一回り大きくなりやがつた。

皮は気持ち悪かったがな……

ついでに反撃の衝撃波『りゅうのいかり』も使ってくるようになつた。

いざれば『はかい』『せん』まで使えるのだろうか……？

ハクの将来が怖くなつた。

逆に休日は勉強三昧だ。

「ランニングと柔軟だけあとは体を休め勉強に励む。

田下の田的是『無限書庫司書』の資格取得。

あそこが自由に使用できればいろんな幅が広がるハズだ。

ちなみに『セイクリッド・スカイ』の調整はヒュー『せんが行つ
てくれている。

なんでもエレメンタルスフィアの自然エネルギー変換が実用でき
たのは初めてだったので、研究ついでだが調整してくれるとのこと。

そのため、開発費及び調整費はタダである。

が、いつも通り騒ぎを起しきり、カリムさんごく潔清されている。

うん、これもまた日常の1ページだ……

【K-Y（偽）】を獲得しました！

主人公設定（序章終了時点）（前書き）

一応書いておきました。

大きな章が終わつた時点でもまた上げていきます。

主人公設定（序章終了時点）

主人公設定（序章終了時点）

名前	：アペリス・ウラノ
性別	：男
生年月日	：新暦63年
出身地	：ベルカ自治領
容姿	：腰まで届く金髪、アメジストの瞳
家族構成	：父（父さん）と母（お母様）の3人暮らし
魔力資質	：先天的AAランク
才能	：器用貧乏
備考	：ハク（ミニリュウ）を拾いました
原作知識	：アニメ版Strikersまで、Vivid&Forceは知らない

称号（詳しい内容は各本編冒頭で）

- 【かけだしトレーナー】
- 【甲種準一級フラグ建築士】
- 【初めての弾幕ごっこ】
- 【魔法使い始めました】
- 【オリ主候補生】

スキル
技能

【なんちゃつて断罪の剣】

【マルチタスク（4分割超高速思考）】
・読んで字の如く並列超高速思考

・ぶつちやけただの魔力刃

【ポーカーフェイス】

・ただのハッタリ

【なんちゅうってぜつたいれいど】

・試験魔法1

【なんちゅうってインデイグネイション】

・試験魔法2

【K.Y（偽）】

・場の空気を読み、（死亡フラグを）危険予知できる……かもしけ
ない

デバイス

【セイクリッド・スカイ】

種類 …ブーストデバイス（AIは搭載していない）

待機形状 …レイハさんと一緒に

戦闘形状 …なし、バリアジャケットは白い制服系統をイメージ

所有能力 …大気中の『水分』と『温度』を操作できる（らしい）

使用魔法 …『試験魔法1』『試験魔法2』

学院編1～プロローグ

入学式

それは学び舎に通う者が最初に通る洗礼。

新しい生活に小さな不安と大きな希望を持つて臨む式典。

一般的にはね！

私たちにとっては入学式とは『親バカ』という人種にとって恰好の餉食だと言える。

始まりは入学式の1週間前に遡る……

今日も今日とて聖王教会本部の修練場で修行を終えたところ、『セイクリッド・スカイ』の調整でいつも通りハメを外したヒューロさんを華麗な空中コンボで沈めたカリムさんが、お茶でもどうかと誘ってくれたのだ。

とりあえずホイホイとカリムさんの後に続く。

ちなみにエミリオも一緒だ。

でも何故かエミリオの表情は暗い。

父親がアレだからかとも思つたが、正直ソレは今更だ。

エミリオからは「あと一週間……時間がない……」とか聞こえてくる。

ホントどうしたんだろう？

ちなみにハクは噴水に投げ込まっていた。

シャルティエも一緒に投げ込まれていた。

今日のエミリオにシャルティエの軽口は通じなかつたようだ…

シャルリー

カリムさんの部屋につき、お茶をいただく。

うん、今日もでいいだ。

そしてカリムさんがお茶を一口飲んでカップを置き……

「それでは一週間後に迫ったSht・ヒルデ魔法学院入学式における

ジルクリスト博士（+）対策会議に入ります「

カリムさんは某ネフの司令のよう腕を組み真剣の表情でそつ
言つた。

なんですか？

そんな表情でカリムさんを見返すと

「あのジルクリスト博士が息子の入学式といつ大イベント（といつ
名の餌）に喰いつかないハズがありません！…」

いやつまあ……うん。

正直あの人は絶対何かやらかすだろ？

対策が必要なのはわかるが私を巻きこまないでほしい。

「あの～私は「ああ！アペリス君に渡すものがあるのよ…ちよ
つと待つてね！」関係な……」

先手必勝、喋らせて貰えなかつた。

するとカリムさんがどつかから段ボールを持つてきた。

「さあ開けてみてね」

有無を言わせない迫力を感じました。

とりあえず開けてみた

中身を見ると、シセ・ヒルデ魔法学院初等科の制服（男用）だった。

なんで？ 制服は既にお母様が注文しているハズなのに……

そこまで考へていると

「あなたは制服の試着はしたかしら？」

「…………えつ？」

「お母様が全部準備してくれたんじやないかな？」

「…………」

「ちゃんと半ズボン、ネクタイ……だったのかな？」

「何でも協力をせいただきますカリムお姉さま……」

「はい、素直でよろしい」

マジで関係ないから勝手にやつてくれとか思つたりして申し訳ありませんでした！

ちなみにエミリオの横顔を覗き込んでみると……

『『やまあー』つて感じの笑みを浮かべていた。

「いつー デバイスの件でヒュー『さん紹介したのは絶対ワザと

だ！

HILLIオを非難した田で見てやる。

「なんだ？ スカートで入学式に出たかったのか？」

言い返せない自分が悔しい。

大きな借りを作つてしまつた以上、断ることはできない……

「異論はないようですね。それでは第1回入学式対策会議を開催します」

ないのではなく、言えないだけだが。

第1回親バカ対策会議が始まった。

そもそも（物理的に）出席させなきゃいいんじゃね？

開始1分で終了しました。

学院編2「少年は出でてやるやうだ

新暦69年春 St・ヒルデ魔法学院に無事入学することができた。

お母様が用意していた制服は案の定だつたと言つておいで。

当日に渡されたが、カリムさんに入学祝いにもひつた（ことひつた）制服で無事に入学式に出席できた。

半ズボンの制服を見てお母様は「なん……だと！？」と驚いていた。

そして、スカートじゃなくともこの破壊力だと！？ これが男の娘か！？ と続けた。

更にスカウターがビリトかも言つていた。

うちのお母様はもうダメだ……

ヒロー、アさん？

教会の一室で見事な氷像になつています。

第1回会議で不穏分子は予防しておくことに限ると結論が出たからである。

さすがに息子さんの（ある意味）一生に一度の晴れ舞台を見られないのは可哀そなので、入学式の様子は録画しておいて後で見せてあげる予定だ。

エリオはそれすらも拒否していたがな……

入学式も無事に終わったので各教室で簡単なホームルームがあるらしい。

保護者は別室で懇談会中。

ちなみにクラスはエリオと一緒にだ。

「都合主義」という名のカリムさんの権力けんりょくだ。

戦力分散の愚は犯さないとのこと。

何に対してとは言わないが……

「ふんつ、僕に迷惑はかけるなよ」

主に迷惑をかけてるのは君の父親なんだけどね

でも口に出せない。

「うん、まあこれがいいもんなじへこっか」

「……ふん」

はいはいシントレッシン（ryu

おや？ 担任がきたようだ。

「うむ、みな入学おめでとう。私は1年間このクラスの担当をするヴァン・グランツだ。主に担当する教科は初等科では音楽、中等科では古代ベルカ史だ。とりあえずは1年だがよろしく頼むぞ」

担任は先生じゃなく師匠せんせいだった。

その渋いヴォイスと老け顔の原因であるヒゲが音楽なんてトラウマもんだろ。

でもなんでだらつ……このとこでも世界も慣れてきた。

「では軽くみんなの自己紹介をしてもらおうか」

こきなつきました自己紹介。

でも何を言えばこの人的に満足するのだろうか？

「ヴァン師匠！ 質問です。どんなことを言えば良いのでしょうか？」

ちやんと拳手してから発言する。

「ふむ、師匠か……良い響きだ。なに、自分の名前と一緒に呟つておきたいことで良い。なんなら将来の夢などでも良いだら。私も幼いころは……」

勝手に回想入りました。

「こじで『若ころは』で始めたのは、老け顔なりの意地なのかもしれない。

そこまでもまだ若いと主張したいならヒゲ剃ればいいの……

師匠の回想も終わり前から順に自己紹介が始まる。

「ふん、1年生だとみんなかわいいね。

執務官とか艦長とか夢がいつぱいだ。

そんな空氣に呑ませ自分も無難なあいさつに努める。

H//リオはとこ'うと

「ふんっ、僕はH//リオ・カトレットだ。将来の田標は聖王教会騎士団に入る」とだ。よろしく……」

それだけ言つて座つた。

GはビーヴしたGは?

そんなに名乗るのが嫌になつたか?

順調に自己紹介が進み現在最後から2番目である自分の隣の子の紹介が……

「あたしはリタ・モルティオ。興味があるのはデバイスと魔導学だけだから、必要時以外は話しかけるんじゃないわよ。以上」

はい、関わらない」とします

だつて厄介そうだもん。

H///リオと同じツンデレ臭がブンブンするのだ。

ちなみにそんな紹介のせいで最後の子がかわいそつだった。

「つむ、みな中々に夢を持つていいではないか。夢に向け精進する
ように。では連絡事項の書いたプリントを配るので前から……」

自戸紹介を終えたので師匠せんせいが事務連絡をする。

リタの件はスルーしてやがる。

大人つて汚いな……

そんなことを考えながら連絡を軽く聞き流し、明日からの学院生
活に思いを馳せる。

窓の外は晴れ空が続いている。

「明日からも良い日々が続きますように

うん、これくらいバチあたらないだろう。

「あんた、それエレメンタルスフィア？ 珍しいもの持ってるわね
？しかもこれってデバイス！？ ちょっと見せなさいよ！」

ソッコーでバチがあたりました……

学院編～おせかのH&ローグ

「なにこのムダな設計？ 全体出力の7割は損してるじゃない！？ ありえないでしょ！？ てめーがコレ作ったやつバカでしょ！？」

「ひっや、ひっや、わんばバカラシ。」

「ありえない！ ジんな希少なモノをムダ使いするなんて…！ ありえない…！」

「ひっや、ひっや、わんばありえない。」

大事なことなので2回言つたようだ。

「うん、やじは同意します。」

「ここの見てられないわ！ 今すぐ最適化してやるわよ！」

「じゃあ見るなよ、つこでにそんなこと頼んでこませんが。」

そのまま風のよひに立ち去ってしまった。

……普通に窃盗じゃねえ？

明日には会えるだろ？が」のまま帰るわけにもいかないのでリタを追わねばならない。

が既に視界の範囲にはいない。

とりあえず師匠せんせいにリタについて尋ねてみる。

「ヴァン師匠せんせい」、リタさんが私のデバイスに興味を持ったみたいでその……持つてちやつたんですけど……」

要は窃盗だ……

「ふむ、モルティオが……おそらく研究室に向つたのだろう

「研究室……ですか？」

「うむ、モルティオは優秀でな。5歳で博士号を取つてているのだ。それ故に研究室が与えられている」

まじパネエな！！

「す」いのですね。でもそれなら何で学院の初等科から……？

まあ高等科でも物足りないだろ？がな。

「うむ、まあこれ以上は言えぬが強制ではない……一応は本人の意思だ」

一応ね……まあいいけど。

とりあえず研究室を教えるやうに。

「 」ですか……」

学院の外れにある研究室棟。

そこの一角にリタの研究室があるらしい。

研究室棟に入りボードを確認。

どうやら一番奥らしいので向つてみる。

「 ……あつた。 」か

扉には『無礼者は洗濯』と書いてある。

意味はわからないがとりあえず怖いのでノックしてからにする。

予想はしていたが返事はない。

セーディするか……

こねはずなのにノックしても無反応…普通ならドアで開けてみるとこりんだが『洗濯』という言葉が怖い。

1分ほど悩んでいたが、ドア立ち止まつてもしじうがないので勇気を振り絞る。

こぢゆく「これが完全版よ… 天光満る処に我は在り……」

ありつたけの魔力を足に込め逃げました。

まさに疾風迅雷。

腕を顔の前でクロスし窓を突き破る。

2重の自動ドアでは間に合わないのだ。

だが窓は割れなかつた。

実は強化ガラス仕様だったらしい。

「そんな…………そんなバカな……………！」

絶望に打ちひしがれる。

自分でいのヤツツをいつとは思わなかつた……

そして世界は極光に包まれた。

【全治一年】

またか入学式当日に学院生活が終わるとは思わなかつたわ……

ちなみにジーバイス出力の7割はリミッターだつた模様。

後日ヒローさんがあマジレスしてくれた。

それを聞いたリタは

「ふ、ふん！ そんなのわかつたわよ……そこに境界線が見えたら踏み越えるのが科学者でしょうが……」

それはただの鬼畜マジドだ。

殴つてやるつても腕が動かない。

全身ミイラ状態だ。

ちなみにリタも同じ状態だ。

「うん……アホでしょあなた」

口に出してしまったが反省も後悔もしない。

「うちは完全に被害者だ。

「ぐぐぐ……」

唸つてこるが完全にお前が加害者だからな。

しばらくは何もできそうにならぬようだ。

この際だ、入院中は読書魔法でも使いながら本を読み漁るか……

入院中は資格取得を目指して勉学に励むことにした。

動けるようになつたらひりすりリハビリ。

時々ヒミツオも見舞いにきてリハビリに付き合ってくれた。

リタも罪悪感からか色々と魔導学について教えてくれた。

まあ同じ部屋のため仲良くなれたとゆづ。

出でにはマジ最悪だったが……いや、絶対にいつまで経っても良い悪い出でにならないだろ?。

カリムさんも良く見舞いに来ててくれたのだが基本的に愚痴ばっかり。

対ヒューゴ戦線が一人脱落したためストレスがマッハのようだ。

予言で『自分の頭皮が……』という声が出てきたら、絶対にヒューゴさん消すねこの人。

んつ? む母様はビビったかつて?

毎日口説してもらひつていますよ。ナイトの……ね。

嫌々やられるのもアレだが嬉々としてやらないで欲しい。

ハク?

HIIリオに任せ修行を付けてもらっています。

もうでもなことおれ去られて、野生化とこうかの空氣になつてしまつからね。

なんでも最近は『リハビリ』を覚えたとか。

もうすぐ進化するのだろうか？

結局進化キャンセルっていつやるんだい？……

謎だ。Bボタンってスゴイな……

ピロニー！

【時を駆ける男（笑）】の称号を得ました！

ピロニー！

【なんちゅうてインティグネイション】が【インティグネイション】

に更新されました！

ピロニー

【基礎魔法一式】を習得しました！

リハビリ編1～少年は原作事件に巻き込まれるようですか（前書き）

ビーハーでもなーれー

リハビリ編1～少年は原作事件に巻き込まれるようですが

【時を駆ける男（笑）】

説明：あのセリフでインテイグされた者に「えられる称号

効果：全ステータス
一齐ミングセシ

備考：未来（明日）に向つて戦略的撤退――

ピローリーン！

全ステータスがやたらと上がりました！

おきのとくで、かねミニハクゼンスが豊富はなりました！
また、ご都合主義により時間経過を省けるようになりました！

* - ' ' . * o

第七章

な
れ

A decorative border consisting of a repeating pattern of mathematical symbols. The symbols include asterisks (*), plus signs (+), minus signs (-), and parentheses (()). The border is composed of these symbols arranged in a grid-like fashion, creating a decorative frame.

あのインデイグ（ry から8か月がたつた。

現在は退院しており自宅療養中だ。

とは言つても相変わらず教会本部に行つてカリムさんの愚痴を聞いたり、Hミリオトリハビリがてらの稽古をしていたりする。

ちなみに入院中は勉強しかすることがなかつたため、退院後すぐに『無限書庫司書』の資格も無事取得することができた。

無限書庫を初めてみた感想はまじカオス。

いやこれでも大分片付いたとのこと。

そこら辺は有能な司書長におまかせしておこう。

さぶつ。

とりあえず無限書庫に来たのだから調べものをする。

これと言つて今すぐに欲しい情報はなかつたため、適当にソーディアンについて調べてみるとした。

シャルティ工以外にもあるのかと気になつたのだ。

探索、探索つと……

その結果、これといった情報はなかった。

思いつきだつたため、検索方法が悪かつたのだろう。

次回以降にやることにする。

しかし、中には興味深い古代ベルカの資料もあった。

その中でも真正古代ベルカホンシヨウコクジベルカという術式についての本があったのだが……ありえんだろうの一言。

弾幕は投げ返すとか、バインドもシールドも意味をなさないとか

……

砲撃魔法も理論上は返せるらしい。

それなんて羨落とし？

超人テニヌの連中並みだな。

真正古代ベルカホンシヨウコクジベルカまじパネル。

まあ今度じつへり読んでみよう。

そして今日はリタの魔導学講座の時間。

退院後も定期的にリタは魔導学について教えてくれている。

本人曰く

「あたしのせいで授業に遅れてるんだから、その分の面倒みてあげてるのよ。」

とのこと。

ちなみに私とリタはリハビリで未だ休学中だ。

復学は2年になつてからの予定なのだが、そもそも初等科の1年でこんな内容習わないだろう。

まあ厚意(?)は受けとつておこうと思つ。

HILIOも興味があるらしく一緒にリタの授業を受けている。

同じシンデレラ士で反発力を起してしまつのはと危惧したが、今のところ特に問題はない。

せいぜいおやつのプロンで揉めるくらいだ。

うん、今日も平和だな。

リタの魔導学の授業を終え、エミリオと別れ、帰宅する途中だったが、新しい本屋が目に入りつい寄ってしまった。

お金がなかつたため見てているだけだったが、そこそこ時間を使つてしまつたようだ。

立ち読みした内容を思考にて反芻しながら歩いつづくと後ろから急に腕を掴まれた。

そして首に腕をまわされホールドされる。

いきなりのことだったので唖然としていると……

「それ以上近づくんじゃねえ！――」のガキの命がどうなつてもシラネエゾオオオ――！」

典型的な犯罪者の人質にされたようだ。

そのまま連れ去られ工事中のマンションへ……

そこには共犯者と思われるもう一人と、人質と思われる女の子がいた。

「さつさと要求通りにしやがれ！！ ガキ共の命がどうなつてもいいのかああ！！」

誰だ今日も平和なんて言つたやつは！！

思いつくり厄日じゃないか！！

犯人の要求は典型的なものだったため割愛する。

薬とかやってんじやないの？

そして人質の女の子にナイフを向けながらベランダに出て行つた。
私？

何もできないと思われて いるようでナイフを向けられているだけ
である。

人質の女の子がいなければ犯人はすぐに氷像なのだが……
アイススタチュー

地上本部の管理局員と思われる人が犯人を説得といふ名の時間稼
ぎ中だが、あまり効果は見られない。

むしろ、犯人煽つてどうする？

そんなやつに現場任せんなよ……

女の子も今まででは我慢していたが、とうとう泣き出しちゃった。

「ぐすり……おこいちゃん……うえええん、おこいちゃんあああん!」

やつやつやバイだわい!……

犯人側も限界かもしねない。

見せしめに人質を……やりかねないかもしねない。

「ひつぐり……ヴァイスおこいちゃん……」

女の子がお兄さんの名前を呼ぶ。

はじ、ヴァイスとな……ん?

……なんだと?

もしやこの子はラグナ……そんな名前だつたつけ?

これって……ヴァイスの誤射事件!?

じつせり原作に関わる重要な場面に出でてしまったよつた……

リハビリ編1～少年は原作事件に巻き込まれるようですか（後書き）

ビートでもなつたあ

リハビリ編2～少年は無事（？）に事件を乗り切るようになります

ヴァイスの誤射事件^{ミスショット}。

ヴァイス^{ラグナ}が武装隊に所属していた頃、立てこもり犯を狙撃する任務で、人質の左目を潰すといつもミスショットをした事件だ。

その後、それがトラウマとなり武装隊を辞職し、妹とのギクシャクした関係にならしく。

確かに自分のミスで妹の片目を失明させたのはトラウマもんだよね。

正直トラウマなんて簡単な言葉で言えるよつなどではないと思うが……

この事件が原作通りなら……まあ人質^{ラグナ}は死ぬことは……ない。

私といつもギュラーがいる分アレだが、多分なんとかなるのだ

だから……何もしなくていい。

だから…何もしないほうがいい。

だけど！

救えるかもしれないのなら……それを簡単に見捨てられるほど人間できていない！！

高速思考展開！

どうする？ 犯人一人だけだったら一瞬の隙があればなんとかなるが……

その場合は人質の安全が……

むしろ最初から1人に絞るか
新世向けな氷像に^{アイススタチュー}してやんよ！

相変わらず変な思考があるがスルーする。

自分に刃物を向けてる奴を無視して……
人質ラグナを引き離して犯人から距離を取る
むしろ飛び降りるか?
芸術的な氷像アイススタチューにしてやんよ!

方向性は決まつた……のか?

自分側の犯人が一瞬目を離した隙に人質ラグナを犯人から引き離す。
そして距離を取り氷像アイススタチューにしてやる。

もしくは武装隊突入まで耐えるか……だ。

とりあえず人質ラグナを犯人から引き離してしまえば……なんとでもなる!

そう決意しポーチに入れていたデバイスを……

アレ?

デバイスが……ない?

代わりに紙が入つていて……

『試してみたことがあるから、デバイスを借りるわ。リタより』

ファッキン!!!

こんなオチか!?

決意だけではどうにもならない現実がここにあった……

おやらくもう時間がないだろうつ……

田の前で起じる（かもしれない）ことがわかるのに……何もできないジレンマ。

途方に暮れていると……

おいつ！ 聞こえているか！ 後40秒で人質抱えて飛び降りろ
！

突然エミリオの声が聞こえた気がした。

もしかして念話？

えつ……なんで……てか後40秒で飛び降りろって……

わかつたら早くしろ！ 特大のがいくぞ！ また入院したいのか
！！

いっちの回答なんてお構いなしにそう続ける。

特大……また入院……つてまさか！？

後25秒！！ サッサとしろ！！ 飛び降りた後はこっちでフォ
ローしてやる！！

いっちの話も聞けよな！

ああもうヤケクソだ！！

「アストラルベルト……」

某花の名の少女のパクリ技。

前方に突進しながら左右両手に発生させた魔力刃（なんちやつて
断罪の剣）で犯人を切りつける。

大したダメージなどいらない。

一瞬だけ人質から手が離れればいい。
ラグナ

「ぐあつ」のガキイイイイー！・！」

1人目を吹き飛ばし、2人目が激昂し人質ラグナから手を離した瞬間、そのまま人質ラグナを抱えベランダから……飛び降りた！！

既に準備万端だつたようだ。

少女の悲鳴が耳元で鳴る。 ラグナ

くつ！ デバイスがなければ、この速度と高さを無事に降りられるほどの技術はない！

エミリオの言葉を信じるしかない……だから！

「エミリオオオオオーーーー！」

そう叫んだ瞬間、何か柔らかいものの上に落ちた。

それと同時にあたりが極光に満ち、マンションに神雷が落ちた。

おれるおれる田を開けて見ると未だ上空にてるようだった。

「さりネットか何かの上に落ちたと思つたのだが……

「ふんっ、よつやく気が付いたか。またたく世話をかかるやつだ」

「H……//コオ?……リリサ……なんで……」

未だ上空にいるのか?

H//リオはこつも通り「ふんっ」と言つてから答える。

「こつに感謝するんだな。主人のピンチに文字通り空を飛んで駆け付けたんだ」

「えつ……」

主人のピンチって……まさか…

「キコウウウウー。」

青と白の長い胴体と頭の羽根のような飾り……そして首元についている水晶……

「ハクリュー！？ もしかしてこの子ハクなの！？」

えええ！ 進化したの！？ 決定的瞬間を見逃したあー！！！

「そうだ。なぜか急に光だしてこの姿になつた。そしてお前のピンチに駆け付けたんだ」

そのおかげで助かつたけど……けど！

「それで助かつたんだ。感謝はすれど文句を言える立場ではないだろ？」「

ヒリオは容赦なく言い放つ。

悔しくなんか……ぐすつ

ちなみに少女は^{ラグナ}極光と轟音、飛び降りで絶賛氣絶中。

マンションは……ただの瓦礫の山だ。

犯人大丈夫だろ？

てゆーか相手が犯罪者でも、こじままでしかしてお咎めなしつは
いかない気がするだリタよ……

特に「マンションなどは仮にも建築中だったのだから。

後が怖いが事情聴取を受けねば……落ち込みながら地上に降りてい
く。

私の明日はどうだらう……

気が重い……

ピロニー！

【ハクリゴー】が【ハクリゴー】に進化しました！

ピロニー！

【オリ主属性】の称号を得ました！

ピロニー！

【なんちゃってアストラルベルト】を獲得しました！

リハビリ編3～少年は…一応被害者だよね？

【オリ主属性】

説明：初めて原作事件に遭遇した者に与えられる称号

条件：初めて原作事件に遭遇した

効果：全ステータス フラグ率
の他諸々 ご都合主義

備考：目指せ真のオリ主！

ピロツーン！

全ステータスとフラグ率が劇的に上がりました！

ご都合主義？どんとこい！

何か大切なものが無くなつた気がします！

失くしたもの……それは平穏。

結論、怒られたがなんとかなつた。

そ

地上に降りて第一声は罵声だった。

「何を勝手な真似を…」とか「どうしてくれる…」とか。

先に人質の安否を確認しろよ……

まあマンション崩壊はやつすきだとは思うが、説得といつ名の挑発で犯人を煽つた指揮官にだけは言われたくない。

あんたのせいで選択肢（時間）が無くなったのに……

そう思つてみるとヒロコオガ

「ふんっ、キサマの無能をフォローしてやつたんだ。感謝はされど非難される覚えはない」

いや、少なくともマンションの件は非難されるだろう?

「マンションも建築途中で会社が倒産し、そのまま解体もままならない状態だつたんだ。むしろ解体費がかからなくて済んだじやないか

やうなの? でもそーゆー問題ではないと思つんだよ……

現に……

「そういう問題ではない！！ 子供が出しゃばって現場を荒らすなど言語道断！！ 公務執行妨害で……」

無能さん^{ナンセンス}が逆ギレしてヤバイこと口走つていると…

「ふむ、マンションの件はともかく、あの時の状況では犯人が人質に手をあげる可能性が高かつた。犯人も複数いたのだから、あの状況での判断はそう悪いものではないだろ？」

そう言いながらヴァン師匠^{せんせい}が現れた！

「ヴァン師匠^{せんせい}！？ なんでここに！？」

久し振りに見たなこのヒゲ。

「なに、弟子^{せいと}の安否^{あんぽう}が気になつたのだよ。無事で何よりだ」

なんか変な響きだつたが気にしないことにする。

「なんだお前は！！ ここはまだ一般人が入つていい場所ではない！…」

突然の乱入者に無能さん^{ナンセンス}が激怒。

だからこそこなやつに現場やらせるなよ……

ヴァン師匠^{せんせい}にはそんなのどこ吹く風みたいで……

「私は」の子たちの師匠だ。弟子を保護しききた」

担任の責任つて以外と重たそつなのね……

てか私は休学中なんだが……

「」の子たちの教師か。ふん！ 生徒が生徒なら教師も教師だな！ まったく管理局をなんだ？……」

「血口紹介がまだだつたな。私はヴァン・グラント。聖王教会・教会騎士団・団長と時空管理局理事官を兼務させてもらつている」

「思つて……えつ？」

えええええ！？

ヴァン師匠^{せんせい}つてそんな偉かつたの！？

そりやあヒゲでもないと貫禄ないよね。

てゆーか何で教師やつてんの？

しかも音楽……

「貴公の言い分と現場の状況はわかつた……次の査定を楽しみにしているがいい」

「わつ！」

無能さん^{ナンセンス}が超絶に責ざめてるよ！

権力つてすごいな……

「まったく、4月の研究棟消滅事件に続いて……よく事件に巻き込まれるものだな」

いや、ほんとこね。

そして現場から離れたところでリタと合流した。

てゆーかこいつがデバイスを勝手に押借したせいじやねえ？

まあ結果オーライだから今回はアレだが、次やったら絶対泣かしてやる。

「あら、よかつたじゃない。結局無事だつたんだから

ぜつて一泣かす！！

やう心に誓つた。

「あのう……」^{リリカ}「わたし……」

んつ？少女^{ラグナ}が目覚めたようだ。

……忘れてたわけじゃないよ？

「ふむ、目が覚めたか。安心していい。もう大丈夫だ」

「えつ？あ、はい……？」

混乱しているようだ。

「ラグナつー！」

そこへイケメンの管理局員と思われる青年が少女の名を呼びながら駆けつけてきた。

「おにーちゃん！！」

そう言って少女も青年を呼び、抱き合った。

「うん、素晴らしい兄妹愛だ。

過程は正直褒められたものではなかったが、結果として兄妹の絆を壊さないで済んだのだから良しとしよう。

……私は勝手に暴れ、少女抱えてベランダから飛び降りたという

暴挙しかしてないけどね！

「失礼しました！ 自分は武装隊所属のヴァイス・グラントセック
と言います！ 妹を救出して下さつてありがとうございます！」

うん、よくできた青年だ。

HILLIOにも見習つて欲しいものだ。

そーなつたら正直キモイがな！

「なに、貴公の妹が無事であつて幸いだ。それと今回の件について
私は特に手を出していくない。」の子たちの判断だ」

そういうヒヴァン師匠せんせいは私たち三人を見る。

「ふんつ、多少の無茶はしたが無理はしていない……だが、あんな
手段になつて悪かつたな。妹さんを危険な目に合せた……」

「あたしも怖がらせて悪かつたわ……」

「こつらもずいぶんと殊勝な態度だな……一応は反省してくるら
し」。

てゆーか私に謝罪はないのかお前ら。

「いや……ありがとよ。俺は今回の狙撃手を担当していたんだが……正直ブルつてた。狙撃の腕には自信があつたが、いざ自分の身内が人質になると……かつこ悪いが手が震えて照準が合わせられなかつた。多分あのまま撃つたら妹ラグナを傷つけていたかもしぬなかつた……だからよ、妹ラグナを助けてくれてありがとなボーズ共」

うん、中々に好青年だ。

「ほらつラグナ……」

「うん、少し怖かつたけど……助けてくれてありがと」

ライス青年に続き、少女ラグナからも礼を言われる。

Hミリオは「ふんつ」と、リタは「そつ」とそれぞれ素気なく返しそっぽを向いたが耳が赤かつた。

まつたくこのシンデレ共め。

それを見た兄妹も苦笑している。

「キュウウウ

おつと空ハク氣を忘れていた。

つたぐー！ 勝手に進化しょつて！

おや? ハクのようすが……とか聞いてみたかったのに!

ついでに進化キャンセルの秘密を知りたかったのに……

「あのっ! この子はわたしたちを乗つけてくれたんだよね?」

少女^{ラグナ}がハクについて尋ねてきた。

「うん、私の……ペット? のハクっていつの。たぶんドリゴンか何かだと想つ」

ポケモン図鑑でもあればいいのだが……

「ドリゴン! すいのこの子! ……ハクちゃん、わたしたちを助けてくれてありがとうね!」

そういってハクの頭を少女^{ラグナ}が撫でる。

「キュウウウウ

ハクも嬉しそうだ。

私が撫でた時より嬉しそうだな……では かお前!

いづれは番いでも見つけてやうねばならぬのだろうか……

そして……

「ふむ、ではそろそろ説教の時間に移ろうと思つたが」

そんな空氣を引き裂くかのよつなヴァン師匠せんせいの口撃こ一げきがきた。

不意打ちであつたため、まともにくらつてしまつた！

騎士のくせに不意打ちなんて！

まあ何のお咎めなしにいくわけないとは思つていたが……

兄妹は「礼はまた後日改めて！」といつて退散しやがつた。

今回の件について私は『前門の犯人、後門のインディグ（リタ）』で、どちらかといふと被害者なのだ……

「問答無用、連帶責任だ」

だそうです。

説教と反省文です。

結果的に良ごとにしたのに……非常に締まらない終わり方だ
」と……

リハビリ編3～少年は…一応被害者だよね？（後書き）

しばらく書く時間が取れそうにないです。

多分次は土曜日になると思います。

復学編1～少年は様々な経験を重ねたりたが（前書き）

なんか更新できました。

復学編1～少年は様々な経験をする♪♪♪です

あの誤射事件(ミスジヨウジ)になるハズだった『T（立てこもり犯）・M（マンショング）』と解体（じげたい）事件から数か月が経ち、私とリタも無事に復学した。

ラグナはミッドの私立学校に通つており、現在はメル友だ。

まともな友人が初めてできたのだつた。

また、ヴァイスさんに付き添つてもうつて遊園地なども行つたりした。

エミリオは乗り物酔いでダウン、リタはアトラクションのダメダメシ。

お前ら何しに来たの？

魔法世界の遊園地まじパネエのに……

ちなみに私たちの学院の方だが

ヴァン師匠(せんせい)が引き続き私たちの担任となつた。

ちなみに、ヴァン師匠は時空管理局理事官を後任のカロムさんに任せたりしい。

未だ聖王教会騎士団長ではあるのだが教師を続けている。

理由も、そしてなぜ兼任できるかも不明だ……

本人曰く、

「未来ある若者たちに多くの可能性を教えてやりたいのだ」とのこと。

そして

「迷う事無く、未来は私達が生み出していかなくてはならんものなのだから……」

そう続けた。

渋いね……だから年齢以上に老けて見えるんだ。

……でもなんで音楽なの？

結局、謎は謎のままだった……

授業の方だが、基礎は前世を含め勉強してきているし、魔導学も授業よりもかなり進んだ応用をリタに教わっているため、特に問題はなかった。

とゆーより退屈だ。

リタなんぞ授業を聞かずに別の作業をしている。

H//リオも聞いているだけで板書すらしていない。

イメージトレーニング
妄想でもしているのだろうか？

教師涙目だよ……？

私？ もちろん聞いているフリをして別の勉強をしている。

もちろん教師にはバレないようじ。

時間は効率的に使わないとな！

放課後は、研究室でリタの研究の手伝い（モルモット）をしたり、エミリオと稽古したり、聖王教会本部に行ってカリムさんの愚痴聞いたりと……

ラグナからの普通のメールが一番癒される……そんな毎日だ。

休日などは無限書庫に行き、ランダム検索でよくわからない本を見つけて読んだりするのが趣味になっている。

そのおかげで雑学や用途が微妙だったり、実践で使用するのが難しい魔法や技術ばかり習得してしまった。

まあ戦闘ばかりに重点を置くつもりはないのでいいだろう。

田指すはジエネラリスト！

万能で選択肢いっぱいの未来……なのだが

「あまりお金が……」

そう、お金がないのだ！

様々な資格を取得するにはお金かかる。

例えば免許関連だつたら、その対象も欲しいだろ？

その他にもこの世界は未知なものに溢れているため、興味があるものばかりだ。

つまりお金がやたらとかかる。

でもこの年の子供が自ら稼ぐには、管理局入りとかしなくてはならないだろう。

それでは本末転倒なのだ。

なんとか今のうちはからお金を稼ぐ手段を確保しておきたいが……

「デバイスマイスターとか……無理だよね……」

独学では無理あるし、周りはマジックだ。

そもそも相手が好きでもないとい、この年齢で取得はまず無理だ。

しかもプログラム関係は前世からの苦手分野もある……

「はあ、ビニカにお金になる話はないかなあ……」

前途多難だ……

そんな話をカリムさんにしたところ

「じゃあ、ひとつアルバイトをお願いしようかしぃ」

「アルバイトですか？」

教会なのにアルバイトって……

いいのそれ？

聖王教会がどう成り立っているかは不明だが……

とりあえず金になる話なので聞くけどある。

なんでも教会が保管している（ビードモニコレベルの）ロストロギアの目録を作つて欲しいとのこと。

また、ロストロギアの細かい資料も無限書庫で調べて添付して欲しい。

うん、やりたがる人はいないだらうな……

やつても「できました！」「そこおいで」というで終わるそな
んだもん。

まあお金は欲しいし、ロストロギアにも多少興味はあるのでもく
してしまった。

その場所に案内されて絶望した。

ビードモニハウスだよ！

しかもつこでに部屋の上づかもよひしへど。

泣いてもよいですか……

期限は一年ほどを平安に、それ以上かけると更に増える可能性があること。

みつけ雑用じやん……

道は険しく先が見えない……

……やるけどねー！

だつてお金は欲しいもん！

前金もポケットマネーから頂いてしまった。

意外と高い金額だった。

まあ勉強にもなるし頑張りや！……

悔しくなって……

それから平日は聖王教会本部、休日は無限書庫、夜にラグナから

の普通のメールで癒される日々が続いた。

まあ、リタのモルモットにされていないだけまだマシか……

カリムさんは作業中でも愚痴つてくる。

仕事わせぬ気あるんだろうか？

そして半年かけ、ようやく7割程度が終わった。

ホントにくだらないものばかりだった。

なんでこんなものがロストロギアなの？ ってモノばかりだ。

ポケギアとロストロギアはギアしか合っていないよ？

期限までに余裕ができたため、ストレス発散も兼ね、ヴァイスさんに射撃場に連れて行ってもらつた。

感想……、ヴァイスさんまじパネル。

百発百中やん。

長距離も一発、シミュレーターのヘリで飛びながら射撃も満点。

正直舐めてたわ。

ヴァイスさんに撃ち方を習い私もチャレンジしたが難しい。
何度か修正していくうちに的に的にも当たるよくなりました。
ターゲット

ビハやら射撃の腕はセレーネもんなんだ。

まあ弾幕^{（）}いやつてるもんね。

「おお、中々に筋は良いんじゃないかな?」

ヴァイスさんも少し褒めてくれた。

『なんちゃって』以上の才能有りは初めてかもしねない。

将来的な一つの選択肢に入れてもいい。

これからも定期的に射撃場に来ることこいつか……

はあ、気は重いが残りの作業も頑張りますか
……

復学編1～少年は様々な経験を重ねるが、（後書き）

次回はあの原作事件に進みたい。
それを書くとなると早くて土曜日になるかと…

復学編②少年は弟子入りするよひやく

「なんとか終わった……ホント長かった……」

あのロストロゴニアの日録作り（といつねの倉庫整理）がようやく
終わったのだ。

期限の一年より早い9か月で終えた。
タイドロゴニア

カリムさんに報告したら舌打ちされた。

どうやら最初から一年で終わる量ではなかったようだ。

定期的な愚痴相手の確保が目的か……

1年かければ増えるので、その分を期間延長をせるつもりだった
らしい。

そもそも原因をなんとかした方が良いのではないだらうか？
エラーペー

「それができれば苦労はしていません」

「まあ、そうですね」

「」もつともだ。

無事終えることができたので、かなり高額なアルバイト代をゲットできた。

子供に払つて良い金額ではないと思つが……

また、今回のロストロギア情報を調べるに当たつて、古代ベルカ語について相当知識を深めた。

そのせいでカリムさんの預言解読を手伝わされたが……（別料金）

今度、語学検定でも受けてみようか？

理数より文系の方が向いている気がするし……

しばらくはそっち方面の勉強をしてみよつと思つ。

うん、中々広い分野で知識を深めていくてる。

順風満帆だな。

入学式初日で入院したり、犯罪に巻き込まれたり……

……考えていて切なくなつた。

初等科2年も終わりの3月、学年末試験を問題なく終了した日のことだ。

私とエミリオ、リタの3人はヴァン師匠せんせいに呼び出された。

進路指導室に。

「ふむ、奥へ来たな。まあ、座りなさい」

自分で呼び出しておこり、その間に草はざみつかと思いつがスルーする。

進路指導室はイメージと異なり、まるで応接室みたいだ。

なんでソファーなんだろう?

そんな無駄なことを考へてみると…

「早く要件言つてちょうだい。こつちは試験期間が終わつてよつとか研究に戻れるんだから」

「ふんつ、同感だ。わざわざ済ませてくれ」

血口中極まりない連中だな。

「なに、こりは進路指導室だ。なれば内容は血あくと見えてこりつ

いいからさうひとと言えヒゲ。

「ふむ、モルティオ、ジルク」「カトレットだー」…カトレット、
ウラハ、お前たちの進路についてだ

じょりゅう
進路?

まだ8歳なんですけど私たち…

「ふんひ、今更だな。僕は騎士になると誓つて家を出てきた。^出その言葉を曲げるつもりはない」

「あたしは自由に研究されできればいいわ」

「こつらは……

「ふむ、お前はどつなのだウラハよ?」

私?

私は……

「あたしの実験台^{モルヒシ}でしょ?」

ブッキルゼリタ?

「私はまだこれといった進路はありません。今は自分に何が合っているかを探してみてる途中……です」

といあえずそつ答えておく。

「ふむ、お前たちの考えはわかつた…………その上で問おう」

ひと呼吸おいて……

「私の弟子になるつもつはないか？」

と、のたもうた。

なんだと？

「じりゅう風の吹きまわし？…………あたしたちを確實に教会側に引き込んでおきたいの？」

リタがど真ん中ストレートの直球で尋ねる。

いやもひと探し入れよつよへ

もつ思つたのだが

「ふむ、その通りだ」

ヒゲはそのまま打ち返してきやがつた！

お前ももつとオブラー^トトに包めよー。

「ふむ、私が騎士団長である間に次代への継承をしたいのだ。なに、お前たちこといつても悪い条件ではないだろ？」

そう言ってメリットを説明していく。

騎士を田指すH//リオは言わざとだが、リタこといつても聖王教は禁忌や制約が少なく緩いため、研究はしやすいだらうとのこと。

また、管理局では望まぬ研究を強いられるかもしけないだらうと続けた。

私にとつては権力のコネができるだらうとのこと。

将来的に考えれば悪いことはない。

「僕は騎士を田指す以上、その選択肢は悪くない……むしろ破格だ
わい」

「何かに属するのは好きじゃないんだけど……後ろ盾はあった方がいいか……」

H//リオ、リタ共に肯定的のようだ。

私としても父は聖王教会所属だし問題はないだろう。

結局3人とも是と答える。

「でもさ、一教師が生徒を弟子にするつてのは羨妬つて見られるんじゃないの？ そこんとこどうなのよ？」

そうなのだ。

「」のヒゲは騎士団長でありながら教師などやってくるのだ。

モヒンとニホントビーなのさ？

「ふむ、私は今年度を最後に教職から引退する予定だ。元々一般的の教師ではお前たちを持て余すだろうと判断したため、私が師匠になつたのだ」

明かされる真実。

どうやら入学前から特別視されていたらしく。

「お前たちの可能性を大人という立場だけで潰したくはなかつたのだ」

らしい。

まあ私はともかく、リタやHミリオは一応子供だから、周囲の環境に影響される可能性があるもんね。

「ふうん……まあわかつたわ。こいつとしても悪い条件じやないしそういの件、呑むことにするわ」

「…………僕もだ。騎士を目指すには……悪くない」

「私も賛成です……よろしくお願ひしますヴァン師匠」

3人とも弟子入りを承認した。

「ふむ、じゅうじゅう頼むぞ、リタ、ミリオ、アペリスよ」

「……して私たちはヴァン師匠せんせいの弟子でしになりました。」

……そーいえば具体的に何やるのさ？

聞く前にア承してしまった……

そして……

「ああー、これで身内価格利用できるわね！」

……カリムさんの罵が待っていた。

ピロニー！

【元ラスボスの弟子】の称号を得ました！

原作序章編一～あのねかじ出でゆつむつや（一）（前書き）

メンタルをやられ、しばらく執筆できませんでした。

監修とも意図しては氣を付けていたわ。

原作序章編1～あの方に出合つよつです（1）

【元ラスボスの弟子】

説明：ヤヴァイ人に師事した者に与えられる称号

条件：かつてラスボスを担当した者に師事した

効果：成長率

備考：アビス仕様ではなくレディアント仕様ですので安心を

ピロリーン！

成長率がヤヴァイくらい上昇しました！

あれつ？ まともだ…

ヴァン師匠^{せんせい}に弟子入りして最初にやつたのは実力を確かめるための模擬戦だ。

とりあえず3人まとめてかかつてこいとのこと。

Hミリオとリタはそれを聞いて普ッチン（プリンじゃないよ？）

ブツチキル氣満々だ。

とりあえずこの2人が連携なんてまず無理だ。

巻き込まれないように援護（と解説）に徹しますか……

「魔神剣！！」

牽制の意味も兼ね、Hミリオがシリーズお馴染みの剣技をヴァン師匠^{せんせい}に向け放つ。

剣圧なんて飛ばせたら人としてどうなんだろう？

まあ実際は魔力を伴った衝撃派なのだが。

それと同時に別方向からヴァン師匠^{せんせい}に向けリタもシューターを放つ……って多つ！？

正面の魔神剣以外の範囲を全部覆っている。

よくもまあ簡易なストレージデバイスでそこまでできるもんだ。

私も時間差を付けて誘導弾でも放とうとも思つたが、とりあえず様子見することにする。

さてヴァン師匠^{せんせい}はどう出るのか……

「閃空剣」

自分の周囲に剣のひと振りで衝撃波を発生させ、迫りくる全てをかき消しました。

まさか防ぐでも避けるでもなく、衝撃でかき消すとは……

「どうした?」この程度か?」

再び2人がプツチンした。

沸点低すぎるだろ……

とりあえず2人の援護頑張りますか……

結論、一撃も『えられませんでした。

まつ連携のレの字もないもんね。

エミリオの剣技や魔法、リタの鬼のようなシьюーターも一切通じなかつた。

ちなみに私は基本フルバックで2人のブーストやエミリオが魔法

を使う時だけ前衛になり、なんちゃって技で応戦した。

相手にならなかつたがな！

ヴァン師匠^{せんせい}の感想はと言ひとい、

「ふむ、Hミリオはもう少し全体を見るのだな。剣と魔法で多彩な手段があるのでから周囲に合わせ行動するよう」。まああとは実践で経験していくのだな」

もつとほつきり協調性皆無野郎…と言ひてくれれば良いの……

「リタはデバイスのせいか戦術の幅が限定されているな。まあ狙いは悪くないが……それだけだ。今度お前専用のデバイスを作ることにしよう」

まあシユーターしか撃つてないからね。

「アペリス、お前は援護に徹した方が良いな。近接戦闘の才能はないだろう」

「つっせ、わかつてらー！

「まあ護身程度ではわるくないだろうが……それよりは援護か後方指揮の方が向いているだろう。実際にブーストは及第点をやれるし、周囲を良く見れていた。または折角ドラゴンを飼っているのだから、それを使つてはどつだ？」

近接は頑張れば1流までいけるかもしないが、超1流には届かないの、あくまで補助や護身程度にしておくべきのこと。

それにハクか……竜騎士にでもなれと?

様々な課題はあるが、とりあえず最初の実力確認の模擬戦は終了した。

それからは生活サイクルにヴァン師匠との稽古が加わり、休日が皆無になってきた。

有意義ではあるんだが……正直なんとかならんかねえ。

リタはデバイス開発にのめり込んでいるし、エミコもヴァン師匠修行三昧の日々だ……

もつと気楽にいこうよね。

相変わらず癒しはラグナの普通なメールだけだ……

そして時折だがヴァン師匠の出張にも一緒に連行される。

ヴァン師匠曰く、良い経験になるだろうとのこと。

まあそつなんだが…別にお前の秘書でも小姓でもないんだぞ？
単位でもよこせ。

今回連れてこられたのが第6管理世界。

なんでもロストロギアの調査とか。

ちなみにリタは研究、ヒミリオは別件で不在のため、今回のお供
は私一人だ。

そもそも騎士団長自ら行く任務ではないのでは？

そんなニュアンスで尋ねて見ると

「ふむ、イスに座つて偉そつとしているのが仕事ではないからな」

どうしち構えているのも上司の仕事だとま思つが……

そして移動すること1時間、目的地の遺跡に到着。

管理世界なのに未だ謎めいた遺跡がある方が不思議な気もするのだが。

既に調査隊は中に入っているので悠々と行くことに……

と思つてたら悲鳴が中から聞こえてきた！

なぜだ！ 今日は特にフラグを立てていないぞ！？

中から調査隊と……民間人？ いやなんか賊っぽい連中が飛び出
してきて……

「……マジですか？」

「ふむ、中々に壮大だな」

遺跡を内部から突き破るように巨大な竜が飛び出してきました。

手の部分が翼となつてゐるワイバーンのような白糸の色をしたドラゴンだ。

「唖然としていると……」口に向つてファイアプレスぶつ放してきた！？

「守護氷槍陣！！」

ヴァン師匠せんせいが氷柱結界を張つて防ぐ。

それ以外の範囲は火の海だが。

ヴァン師匠せんせいが周囲を隔離結界で覆い剣を竜に向け構える。

確かにこの人なら竜の一匹二匹は簡単にやりそうだ。

すると遺跡内部から人影が出てきて……

「もうやめてええフリードオオ！！ もう大丈夫だからああ！！」

と、ピンクの髪の女の子が泣き叫びながら竜に叫んで出ってきた。

……フリード？

ピンクの髪の女の子と竜のフリード……って！？

「もう戻つてええ！ わたしは大丈夫だからああ！ フリードオオ！」

もしかしてキャロ！？ とフリードリヒ？

「ふむ、何やら事情がありそうだな。とりあえず竜は気絶させるこ

ヒカル「…………

絶対強者なセリフですね。

とりあえずは賛成だが。

殺してなんてしまつたら……、ヴォルテールとか出でてもうだ。

ヒンドロールが見えた氣がしたよ。

氣絶か、氣絶させるならば……

「ふむ、アペリス……可能か？」

普通ならやられんな！ と黙つといひながら氣絶せらるだくなれば

……

「まかせて下せ。」まあ飛竜よ、覚悟はいいですか？」

シャルティ工直伝の奥義……

「尽く臥せよ！ 不殺の鉄鎧

」

決めます！

「ペーパンー！」

……自分で言つておいて凹んだ。

効果的なのはわかるが……コレはちょっとね。

どうから召喚された物質なんだか。

「 わゆ るべりう うひう ……」

とつあえず氣絶させるのは成功した。

するとじみるみる姿が小さくなつていき、原作サイズまで小さくなつた。

「 フリードー！」

キャラ（仮）が竜の元に向づ。

「ふむ、どうしたものか」

ホントね、遺跡なんていつ崩れるかわからないし。

そして周りは既に鎮火されているが焼け跡が目立つ。

原作キャラに会えたのは良い……わけでもないが、どうしたもののか……

「前途多難ですね。いつものことながら」

「まあそれこそが人生そのものだ。苦もない人生に価値など見出せんよ」

できれば楽に生きたいものです。

はじめて一休どひなることやう……

ペロニーノ。

【ハニソン】を発見しました！

原作序章編～おのれ方で出でゆつむつ（2）（前書き）

今回は前回の続きをのお話。

書きたいことはあるのに何うまでも中々持つていけないんです。

いつも一気に数年分を飛ばしてしまいますか…

原作序章編2～おのれ方に出来つけりや（2）

どうやら調査隊と一緒に遺跡から飛び出してきたのは賊だつたらしい。

キャロは部族を追放され当てもなく彷徨い、遺跡内部で雨宿りしていたところの賊に遭遇したようだ。

そして賊は一重の意味で犯罪者だつたようで、キャロ暴走に繋がつたらしい。

ナニをしようとしたかは想像にお任せするが……

そのキャロだが、過剰防衛ではあつたが被害者であり、部族を追放され、行く当てがなかつたため、とりあえずヴァン師匠せんせいが……とゆ一より聖王教会で保護した。

そして今回の件を受け調査は中止になつ、ミッドに戻ることになつた。

で現在、聖王教会本部のいつもの訓練場にキャロと共にいるのだ

が……

「わたしなんていらない子なんだ……いちやいけないんだ……」

暗い！ CRY！ クラスギル！

対ヒュー^ゴさん時のカリムさんより纏つている空氣^{ムカシ}がヤヴァアイ。
そして田のハイライトが……

確かにわずか6歳で部族を追放され、各地を転々と彷徨い、賊に
出会い、暴走して……

うん、よく考えるとスッ^ゴク悲惨な人生歩んでるよねこの子。

正直かける言葉がありません。

「わたしなんてわたしなんてわたしなんてワタシナント……」

なんかこっち方が楽に生きててマジ^イめんなさいな気分になつた
きた。

ああ生きてて「め「なにをアホ面してこる」なさい？

振り返ると救世主^{ヒヨコ}がおりました。

じゅうやうH//ミコオは、ヴァン師匠との稽古にきたようだが、忙しかったよつので、いつものここの自主練をしにきたようだ。

とりあえづ事の顛末を説明する。

【今いじ時代で里を追放とかあるんですね～まあ僕のオリジナルの時代では珍しい話ではないんですけど】

なんか久し振りにシャルティエの声を聞いた気がする。

「ふんつ、くだらないな」

「つてつもー！　いきなりかよー？」

H//リオのくだらない発言を聞いてキャロも反応を示した。

「……なにがですか

怒つてこるよつな……縋つてこむよつな、色んな感情が入り混じつた声色でキャロがH//ミコオに問う。

「ふんつ、全部だ。かつてのことは過去はどつあつても変えられない。だが未来これからのときなんてまだ決まっていない……自分で創つていくものだ」

それは正論だろつし真理かもしない……でも所詮キレイゴトだ。

世界中の誰がそこまで割り切つていられたら世界はもつと……

「少なくとも僕はそりやつて生きてきたし、これからもそりだ。お前達にそれを強制するつもりなんて更々ないが、いつまでも引き摺つて周囲を不快にさせる真似だけはやめろ」

「…………あなたは」

感情が読み取れない声色でキャロがエミリオに尋ねる。

「この世界が……今の生活が好きですか?」

ん? 何かどつかで似たようなフレーズを……

「わたしはかつての生活がとつてもとつても好き……でした」

あれ?

「でも……みんな変わってしまった。楽しかったこと、うれしかったこと全部……全部変わってしまいました」

「これは……

「それでも……」

「ふんっ、見つければいいだろ!」

「まさか! ?

「次の樂しこ」と、うれしことを。ただそれだけの話だ

長い坂道を登り始めるやりとりですか！？

中の人違うだろ！？「ホンッ取り乱してしまいました。

「ふんっ、どうするかはお前の自由だ。僕は僕自身の選択に一片の後悔もない」

そう言つてエリコオは去つていった。

お前自主練に来たんじゃなかつたのか？

その後、ヴァン師匠せんせから念話で呼ばれたので、教会の応接室へキヤロを連れていった。

きちんと扉をノックして……

「アペリスです。キヤロ・ル・ルシエさんを連れてきました」

「うむ、入りなさい」

扉を開けるとヴァン師匠せんせ、そして……

「初めまして。時空管理局本局執務官のフロイト・テスター・ハラオウンです」

まさかの2浪でホームランな執務官だった。

キャラロに会つたから、もしかしたら会うんじゃないかなと思つていたが……

なんでもフロイトさんは冒頭の一重の意味での犯罪者を追つていたらしい。

それで聖王教会に来ていたといふキャラロの件を耳に挟み今に至る

と。

「ねえキャラロ？ 私と一緒に行かない？」

「ぐぐぐぐ~、心中でシシ『//』を入れておく。

結論のところキャラロはフロイトさんが保護するに至った。

フロイト
運命は変わらぬ……

いや、違う運命に出会ったのだから、未来なんてわからない。

もしかしたら原作なんてとっくにブレイクしているのかもしれない。

い。

「わたしは……何をしたら……どうにこなばいいんですか？」

「それは君がどこに行きたくて、何がしたいかによるよ。キャロは
どこに行つて何がしたい？」

中々に難しい質問だと思つがな。

「わたしは……」

助け舟を出してもさますか。

決して今回口クに話してないからじゃないよ？ 出番がなかつた
からじゃないよ？

「キャロ…… わん。わいきHIMIKOの言つていたことをよく考えて
みて。過ぎ去つたものは…… 辛いことも幸せだったことも変えられ
ないから。だから楽しいこと嬉しことは…… また見つけていくし
かないんだよ」

ホント、世界はこんなハズじゃなかつた、そんなのばかりだ。

さすがにこれは口に出れないが。

「……色々と考えてみると元気です」

やう言つてフロイトさんに手を引かれ退出していった。

「ふむ、過去と記憶、未来と予言……世界は常に流動している。結局は自分が何をしたいか、何をすべきか……こや止めておいたり

ヴァン師匠も何か思つていろがあつたようだ。

それせめておき、この邂逅がどんな未来を紡ぐのか……

まあ、いつも通りの前途多難な日々だひつ。

窓の外は憎らしげほど晴れ渡つている。

「アレルヤ

そんな気分な一時でしたつと。

あッヤベ！ 学院の宿題忘れてた！？
レポート

結局いつも通りの締まらない終わりだった……

ピロリーン！

【もしかして脇役？】の称号を得ました！

原作序章編2へおの方に出来つけられました。（2）（後書き）

フラグを立てちゃったのはヒロオさんでした。

そして主人公が脇役道に：

原作序章編～おのれ方で出でゆつてや（三）（前書き）

とつあえず切りがいこ話まで上げぬじておしました。

原作序章編～おのれ方に出番つづりですか（3）

【もしかして脇役？】

説明：主人公の座が危なくなつた者に与えられる称号

条件：イベントシーンを他人にとられた

効果：出番

備考：いつかきっと良いことあるよ……

ピロニー！

おきのじくですが出番が減つたよつな気がします！
頑張つてオリ主に帰り咲いて下さー！

をぬ！

どちらも「運命」と訳す言葉だが、ユアンスは異なっている。

変えられない、避けられない宿命か

自ら行動し切り開いていく未来か

何が言いたいかといつと……

「この度St・ヒルデ魔法学院の初等科に編入することになったキャロ・ル・ルシエです……これからよろしくお願ひします先輩方」

キャロの運命は変わってしまったようだ。

今日もヴァン師匠^{せんせい}の稽古で3人揃つて聖王教会本部に来ていた。

今回は空氣^{ハク}も連れてきている。

3人揃つてでのリベンジマッチなのだ。

リタは試作デバイスのテストを兼ねて、ヴァン師匠せんせいに挑むと意気込んでいる。

ミリオは……まあいつも通りだ。

そして訓練場に行つたら、ヒューイーさん何か怪しい装置を弄りながら笑っていた。

ミリオに視線を向けると逸らされた。

うん、絶対碌なことじやないな。

そもそもなんでこの場所で実験（？）しているんだりつつ、

いつもカリムさんに沈められているのに……ドMなのか？

【多分ですが坊ちゃんに会いたくて、毎回同じやりかしているんでしょうね】

シャルティエが絶望的な回答をくれた。

息子と仲良くなつたら、更生しろよ……

一応ヒューイーさんは聖王教会の運営に多大な貢献を……しているらしい。

それである程度は田を瞑つてもひつてみると。

カリムさんお疲れ様です。

【まつたく……ベルセ…オ…に手…して…まつ…ひ…】

シャルティエが何か呟いていたが聞き取れなかつた。

まあシャルティエもH=リオ同様に苦勞しているようだ。

カロムさんが来る前に止つけてしましますか。

ヒュー『さんをいつも通りの氷像にしてからしづらいくるヒゲト
ン師匠せんせい』アイススタチューがやつてきた。

「ふむ、よく来たな。では早速だが稽古に取り掛かるつか」

ヒュー『』ヒューわたしはスルーですか。

「ええ、覚悟しないわけ。今日をあなたの【ヒゲ剃り^{記念日}】にしてあげる」

「ふんっ、覚悟はできたか？ 敗北の言い訳でも考えておくんだな」

なんで君たちそんなに傲岸不遜なの？

前回まつたく歯が立たなかつたでしょ？

「ふむ、まずはその鼻つ柱を折るところだ！」

そう言つてヴァン師匠は最初から〇∨状態になつてしまいまして！

おかげで私の心情は〇Ｔ－状態だよ！

なんで格上の相手を煽るかなこの2人？

そんなんで隙ができるような相手じゃないのに……

そして絶望的なリベンジマッチが始まった。

結論、ヴァン師匠せんせいまじパネエ。

本人の前でヒゲ呼ばわりは禁句けんくらし。

あまりに一方的過ぎたので描写（解説）はしないでおく。

「ふむ、リタは……医務室で寝かしておくか。エミコオ、アペリスは動けるな？」

「……ふん」

なんかエミリオも返事に霸氣がないな。

まあ大見え切つてアレだもんね。

「ふむ、リタは私が医務室に運んでおく。2人は汗を拭いたら応接室にいきなさい」

反省会……といつわけではなさそつだが。

とりあえず汗を拭き、空氣ハクに治癒魔法をかけてからエミコオと応接室に向づ。

そこにいたのは……

「ひんにちば、君に会つのは2度目で、もう一人の君は初めてまして

だね。改めて自己紹介するけれど私はフェイト・テスター・ラオウ。時空管理局本局執務官です。そして……」

「先日はどうも……キャロ・ル・ルシエです」

フェイトさんとキャロでした。

今日は先日の礼と、これから挨拶に訪れたらしい。

そしてこれから挨拶というのが冒頭のキャロのセリフに戻る……

どうやらキャロは魔法学院に通うことにしたらしい。

でもこれって確実に原作ブレイクだよね？

確かに魔法学院なら魔法制御についても学べるし、常駐といつわけではないけれど聖王教会の騎士も数人いる。

それに今のキャラは原作と違つて、暴走による管理局の部隊タラ
イ回しもないから心情的には……まあどうなんだかね？

「まだ……やりたい」とわかつませんけど、これから探していくた
いと思つています」「

「ふん、それがお前の選択なら僕は何も言わない。好きにすればい
い」

「」のヒーロー属性野郎め。

「何はどうあれ、」^{ジルクリスト}よろしくキャラ…さん？

「キャラでいいです。よろしくお願ひします……えっと

「ああ、私はアペリス・ウラノ。St・ヒルデ魔法学院初等科3年
生だよ。気軽にリースって呼んでもらつていいくから。そしてこっち
が……」

「ふんっ、同じく初等科3年のエミリオ・カトレットだ。好きに呼
べ」

「だからGはどうした？ そんなに嫌いになつたか？」

「あつ……はい。えつとリースさんエミリオさん。これからよ
しくお願いします」

学年が違えばあまり遭わない気もするが……

「うん、よかつた。ふたりとも学年は違うけど仲良くしてあげてね」

フロイトさんにも念押しされました。

「それと今日ここには来られなかつたんだけど、私が保護責任者を
している子でもう一人編入する予定なの。エリオっていう子なんだ
けど、その子とも仲良くしてあげてほしいの」

エリオもか！？

2人とも学院に編入！？

完全に原作ブレイク……六課フラグばつぱき？

まあキャロだけ学校行かせてエリオだけずっと保護施設というの
も変だし……

フロイトさんは原作で2人が管理局の魔導師になつたのを快く思
つてなかつたようだ、JS事件後は2人に学校へ通わないか持ちか
けていたからな。

だけどこれでJS事件がどうなるか予想がつかなくなつた。

関わらなくとも大丈夫かとタカをくくつていたが……

カリムさんの預言解説（アスキル）に協力して事前になんとかするしかないか

誰かの幸せは、きっと誰かの苦労なんだろう。

そんな気がした邂逅でした。

原作序章編～おのの方に出会ひつつあります（三）（後書き）

2人の六課フラグばつきばきです。

とりあえず前書きに書いたように切りがいい話まで。

これからは相変わらず不定期になります。

原作序章編4～おのれ方に出来たつづり（4）（前書き）

よつやく原作一話のあの事件…

とりあえず書けたといひまで

原作序章編4～おのれ方に出来つけりゆ（4）

先日、正式にキャラとエリオがヒルデ魔法学院に編入してきた。

エリオは素直で良い子だ。

ついのシンデレラ人にツメの垢を飲ませてやりたい。

キャラも出会った当初よりは明るく前向きな印象だった。

そしてフハイトさん……教室ドアの隙間から覗き見はやめましょう。

見つかってもソーックムーブで逃走しないで下さい。

あなた執務官でしょ？

証拠がなければOK？ 動機も目撃証言もあるんだが……

執務官相手に法で勝ち目はないのでスルーするしかない。

管理局の闇の一目を垣間見た気がした……

閑話休題

キャロとエリオだが順調に学院生活に馴染んでいるようだ。

しかもエリオは騎士を目指してこよりまで、よくエリオと稽古をしている。

ちなみにキャロの授業以外による魔法制御の訓練は私とリタで見ている。

竜といい補助系といいなんかキャラが被っているからね！

……もう少し頑張りうか。

決して出番が少なくなるのを恐れてではないよ？

ゴホンッ。

そのエリオとキャロだが連休を利用して、現在ミッドチルダに来ているフェイドさんの元に遊びに行っている。

その際にフリードは連れていけないので私が預かる」とことなった。

そして珍しく何の予定もない休日をテレビを見ながら過ごしていくと……

「……ヒューリック・チルダ臨海第8空港です…… 現在原因不明の火災が……」

あつ……そーいえばそんな事件あつたよね。

確かに死者は奇跡的に0だつたハズ……

ここからは遠過ぎるし、そもそも出張るつもりはない。

自分の力量は弁えているつもりだ。

?気?にテレビを見ていると……

「ん? これは魔法陣……!?

足元に魔法陣が!? これは確か召喚魔法!?

「キュルクウ~!?

えええええ……

そして……

「フリードーとリースさん！？」

周りは火の海、目の前にはキャロとエリオがありました。

「……キャロ、エリオ？ ジジは……？」

大方予想がつくが……

「あのっ！ ジジは臨海第8空港で！ 火が、爆発が……あのっその……」

うん、おもいつきり巻き込まれたようだ……

おお神よ、聖王をまよ……私が嫌いなのですか？

最近はこんなんぱつかりだ……

じゅうじゅう人はフロイトさんの元に行く途中で巻き込まれたようだ。

そしてフリードによつて壁をぶち抜き脱出しようと考えており、フリードを召喚したところ近くにいた私も巻き込んでしまった……らしい。

「『』みんなセ『』…」

いや、この状況でキャロが悪いわけではないので

「こや、 しうがなこよ。 とつあえず冷静にならうか。 ……周囲も含めてね」

「こは暑いのだ。 空氣もアレだが。

なので……

「セイクリッド・スカイ行くよ?」

なんか久し振りに名前を呼んだ気がする。
ヤカイ

まあそれは置いといて……

「 無慈悲なる白銀の抱擁」

あれから【なんちゃってぜつたいれいじ】の術式を見直し作り上げた新魔法……

「 アブソリュート・ゼロ……」

まあ意味は同じだが。

周囲の全てを凍らせ、フロア全体の鎮火と周囲の温度を一気に下げてしまつ。

が威力は予想以上で……

「 「寒いです……」」

ごめん、やりすぎた。

凍死の危険性が出てきた……火災なのに凍死は勘弁して欲しい。

結局、周囲に結界を張り、温度を一定に保ちながら救助を待つことにした。

下手にフリードが暴走すると更なる災害になるかもしれないからね。

とりあえず家族と知人に巻き込まれた姫の連絡をする。

セイクリッド・スカイの通信機能はヒュー「さん」の魔改造でキチガイレベルなのだ！

だから災害現場だろうと平然と使用できる。

ケース？ 両親

「よく巻き込まれるわねえ～無事に帰ってくるのよ？ あつハクはこいつでおさえておくからね」

ややこしかったため、比較的問題はないと伝えておいた。

また前回のT・M事件時のようにハクがくると後始末が面倒だし。

ケース？ ヴアン師匠せんせい

「ふむ……救助が来るまでは動かないことだ。ただし近くに救助が必要な者がいた場合はお前の判断にまかせる……健闘を祈る」

珍しく心配していたが、若干呆れていたようだ。

また巻き込まれたのかと……

「ひつちだつて好き好んで巻き込まれているわけじゃないんだよ！」

ケース？ ハミロオ（+ シャルティエ）

「ふん、2人を無事に連れてくるんだぞ？」

【混乱に乗じて盗みを働いたらダメですよ?】

私の心配は？

ケース？ リタ

「研究の邪魔！」

あれ？ 目から汗が……

ケース……後は事後報告でいいか。

気分も だし……

通信を終え凹んではいるが話しかけてきた。

「あのつ！ フェイトさんにも連絡をとりたいんですけど……」

「ああ、2人の保護者に連絡するのを忘れてた。

確かに救助に当たっているハズだよね。

一応連絡をとってみますか。

通常の連絡端末じゃなく緊急時のデバイスを通じた連絡先がある
ようなので、そちらに連絡をしてみる。

「……アペリス・ウラノと申します。フェイトさん応答お願
いします」

「……こちらフェイト・テスター・ハラオウン。……アペリス
？ ビジして私の緊急連絡先を？」

「……先はエリオに任せることに」

「 フロイトさん！ ぼくです、エリオです！ ぼくたちは今、火災の起きている空港の中にいるんですが……」

エリオがフロイトさんに現状を伝え……

「 中にー？ 今どこのエリオ！？ もしかしてキャロも一緒！？」

フロイトさん冷静に……

「えっとあのー！」

エリオも一気に聞かれたら……もう仕方ない。

「 こちらアペリス。現在地はエントランス奥の待合ロビーと思われるフロアでキャロも一緒に。現在は周囲を完全に鎮火し結界を張つて救助待ちの状態です。怪我もありません」

周囲は比較的安全で、ある程度余裕を持ってるので冷静に答える。

「 そつか……エントランスの方なら、なのはの方が近いから向つてもうひとつ……無事でよかつた」

魔王さま待ちか……

あの天井抜きをリアルで挙むことになるのか。

ん？ 天井抜きとエントランス？

……もしかして近くにスバルいる？

そして、もしなのはさんがあなたに来たる。………… 女神さまのボディプレス？

「…………」

「おおおおおおお……！」

それはなんか色々まずいよ……

「キャロ、エリオ！ 私は救助が来るまで近くに人がいないか確認していく！ 対物の結界を強化・追加しておくから、ここで救助がくるまでおとなしくしてるんだよ」

既に救助されていれば良いが……

「あッハイ！ わかりました！ 気を付けて下せー！」

「うわ、うれしい！」

「キュルク～！」

2人（+1匹）に見送られエントランス方面に向かつ。

「 間に合へ……！」

ペロコーン！

【なんぢゅうせつたいれこど】が【アブソリュート・ゼロ】に更
新されました！

原作序章編4～おのれ方に出来ぬつひりや（4）（後書き）

続きをは近づいてあげたいとは思つてこます

原作序章編5～おのれ方に出来ぬつゝや（5）（前書き）

すぐ上げるつもりだったのに…

中々上手くいかないです

原作序章編5へおの方に出来つけます（5）

チートは努力で越えられない壁なんだと思つ……

いや、別に超えるつもりはないんだけどね。

進んで苦労する将来を歩むつもりはないし。

……ホントだよ？

スバルを探してエントランスホールの方へ駆け抜けていく。

もし、なの破産（何故かこう変換された）が先にキャロとエリオの救助に行つたら、スバルは高確率で女神のボディプレスだからだ。

もう救助されていればいいが……砲撃による破壊音（聞こえるか怪しいが）や魔力を感知していないため可能性は低い。

探査魔法等は一通り習得しているので、サーチャーを用い人影を探しているが見つからない。

……ここではない……？

エントランスはここだけではないのか？

さすがに空港の詳しいマップは持っていないのでわからないが……

案内表示でも探すか…… つん?

前方のサーチャーに人影が写った!

確認のためサーチャーを近づける。

「ピングー!」

スバルと思われる少女だ!

いつもに向って泣きながらようよると歩いてくる。

ん? いつもに向って……?

一瞬何かが頭をよぎったが無視して叫ぶ。

「そこのあなた!! 大丈夫ですか!?」

「……えつ?」

「じちらに気が付いたようだ。

そして足を止めじちらを確認する。

「今そちらに行きます！」

そう言つてスバルの元に駆けつけようとして……

「 グアツ！」

いきなり側面から爆風がきて吹き飛ばされた。

「えつ……き、きみ！ 大丈夫！？」

一応助けにきたのに心配させる始末、いつものことながら……

なんとか受身はとれたため致命的なダメージはない。

「いたたた……あのっ！ 私は大丈夫で……」

そう言いかけて、ふと目に入ったのは女神像。

位置的に私の後ろにある……なんかビビが入つてますよ？

……えええええ！？

私が原作のスバルの位置い！？

まづいセイクリッド・スカイ……あれっ！？ ない！？

もしかしてセツモ吹き飛ばされた！？

そして女神さまが無慈悲なるボディプレスをかましてきた。

「きやああああーー！」

スバルの悲鳴が聞こえる……リアルにヤヴァアイ！！

こんな時こそ高速思考展開！！

乙

……人生終了のアナウンスのみでした。

我が思考ながら役に立たたねえええ！？

迫り来る女神が……よく見るとオッサンに見えるかも。

これが辞世の句かと思つと激しく後悔した。

ヤヴァイ死ねない。

こんな辞世の句を残してたまるかああ！！

現実は厳しいが物語は続くよつで……

「……あれ？」

生きてる？

女神像が空中でバインド系魔法により拘束されている。

「 よかつた……間に合つた

そんな声が聞こえてきた。

そして……

「 助けにきたよ！」

白い戦装束^{バリアジャケット}に黄金の戦槍^{レイジング}を持った女神^{ハート}さまでした。^{なのは}

なのはせんマジ魔王！ とか思つてスニマセンでしたー。

てゆーか、まさか私がこの役を演じてしまつとは……

「よく頑張つたね……偉いよ」

「めんなさい。

ただ暴走しただけで今回も……何もしていません。

「もう大丈夫だからね……安全な場所まで一直線だからー。」

おっと、キヤロとエリオのことを忘れないで。

「あの！ 奥の待合ロビーにまだ2人が……キヤロとエリオって子がいるんですね！」

「もしかして……君がフュイトちゃんの言つてた……うん、わかつたよ！ すぐ近くに反応があるね……今2人を連れてくるから君たちはここで待つていて！」

そう言つて私たちの周囲に結界を張り2人の救助に向かつた。

「あの……」

どうやらセイクリッド・スカイはスバルの方に転がつていた模様。

「あつ、拾つてくれてありがとうございます……お怪我はありませんでした？」

吹き飛んだのはこっちだけだね。

「うん……大丈夫」

そして会話が途切れる。

スバルは泣きそうな……何かを耐えるような、悔しそうな、色々な感情が入り混じったような表情をしている。

何か話しかけようとしたが、なほはさんがキャロとエリオ（とフリード）を連れて戻ってきたのでやめた。

ここからの脱出が最優先だ。

「一撃で地上まで抜くよ……デイバイイイン……」

ピンク色の超高密度な魔力がデバイスの先端に収束する。

そして……

「バスタアアアアー！」

ピンク色の魔力の奔流が天井を抜き、夜空を駆け抜ける。

うん、まじパネエ。

直径数十メートルはありそうな大穴を開けて下さいました。

将来、これ以上の砲撃を味わうことになりそうなメガネさんに会唱。

「みんな私につかまつてね。一気に……」

さすがに厳しいだろ？。

でもいくら結界を張つてもここに残すのは……それ故の判断だろう。

なので

「あの！ 私は自分で飛べます！ それとキャロカエリオ一人くらいなら抱えて飛べます！」

なるべく負担はかけない方がいいだろ？。

今回もまともな活躍をしてないからじゃないよ……？

「……うん、わかったよ。一応私が下を飛んでフォローするからお願いね」

なのはさんも了承したのでキャロを抱えて大穴から外へと脱出する。

なぜキャロかといふとキャロの方が軽いためだ。

邪な理由はないのですよ？

「　　ヒドイ……空港が……」

キャロが夜空から災害現場を眺め咳いた。

最終的には都市ひとつが廃棄されるくらいだもんな。

いつたいどれだけの被害損額なんだか。

なのはさんが通信本部と連絡している間にこちらもフロイトさん
に脱出した血を連絡しておく。

「　　こちらアペリス。局の魔導師の救助によりみんな無事脱出で
きました」

「　　よかつた……私も救助活動をしているからまたあとでね……
2人をありがとうございました」

そして私たちは西側の救護隊に引き渡され、なのはさんは救助活
動に戻つていった。

その飛んでいく後ろ姿は……見えそつで見えないな。

何がとはいわないが。

ゴホンッ！

さて今回の件を省みてみると……

巻き込まれる 吹き飛ばされる 潰されそつになる 助けられる
なんていうか……いつも通りだな。

いい加減慣れたものだ。

しかし今回の件でよくわかった。

おとなしくしていても巻き込まれるのだ。

チートオリ主ではないのに……どのみちオリ主なのか？

「修行にも……もう少し力を入れていきますかね」

未だ燃えている空港を眺めながらうつづく。

チートが無いなら無いなりに頑張つていいくしかない。

そんな決意をした序章はじまりでした。

ピロニー！

【略してオリヰ】の称号を得ました！

原作序章編5～おの方に出来つけりや（5）（後書き）

とつあえず原作事件は終了。

次回この件のエピローグ的な話を予定。

原作序章編6～あの方に出合つたのです（6）（前書き）

今回で原作序章編の空港火災事件終了です。

原作序章編6～あの方にお会いつけます（6）

【略してオリ主】

説明：新たなる決意をした者に与えられる称号

条件：大きなイベントでこれからについて覚悟を決めた

効果：全ステータス

成長率

フラグ率

備考：主人公補正が付きます

ピロリーン！

ようやく主人公補正がかかりました！

なんでだろう……あまり嬉しくない。

てゆーか今までなんだつたんだ？

空港火災の事件は原作通り、負傷者は多数だったが死者は0だつた。

現在は鎮火しており原因調査中のこと。

まあ原因はレリックだと思われる。

公にはされないだろ？ 知る権利はないだろ？

やつぱつ二権集中は歪んでると思つ……

閑話休題

田立つた外傷はなかつたが念のため病院に行き検査を受けることになつた。

いつもの聖王医療院ではなかつたが担当医は一緒だつた。

今回の件で応援に来ていたようだ。

そして呆れられた。

「医者としていつこいつとは言いたくないが……呪われているのではないかね？」

ほつとけ！

自分が一番実感してるわ！

検査も問題がなかつたためすぐに終了した。

健康な人にかけている時間はないもんね。

キヤロとエリオも問題なかつたようで合流してフュイトさんの元に向う。

ちなみにスバルにはあれから会うことはなかつた。

戦闘機人だから一般の病院ではないのかも……

まあどつかでまた会うだろ？……確実に。

自分の巻きこまれ体質のせいでな！

……切なくなってきた。

まあ会えないものは……いや会いつもりはないのだが……「ホンッ！

それはともかく！ キヤロとエリオと一緒にフェイトさんがいる

ホテルへと向かう。

そしてホテルを見て一言。

「なんですか」の高級ホテルは？」

一般人なめてんのか？

キャロとエリオも苦笑いしている。

どうやら2人とも金銭感覚は普通のようだ。

どうかそのまま育つて下さい。

「Jの規模のホテルだと直接部屋を訪ねるわけにもいかないので、フロントから連絡してもらい案内された。

部屋の内装もスゲH…… Jのブルジョア共め。

まあその分の仕事はしているんだろうが……

部屋には魔王さま、2浪さん、歩くセクハラ…… ゴメン訂正します。

なのはさん、フュイトさん、多分はやてさんがいた。

祝福の風2号機さんは寝ているのが見える。

3人ともある程度は着崩しているが、さすがにスカートは穿いてた。

別に悔しくなんてないんだから……

「うあえず、血口紹介とあの場でのことを説明した。

「おまれた顔を説明すると、なのはさんとフュイトさん苦笑い。

はやてさんウンウンと一人納得顔……なんで？

「カリムの言つた通りの子やな」

「あの人は……！」

そしてスバル救助に向かつた件は少し怒られた。

無茶はしないで、と。

「9歳から魔法少女しているあなた方にだけは言われたくないセリフだ。」

「ミッドの就労年齢が低い」ともあるが、この人たちのよつな英雄譚も子供を無茶させる要因のひとつなのではないだろうか？

まあ口には出さないが。

一通り報告も終わつたといひで、ヴァン師匠せんせいから連絡がきた。

断りを入れてから通信を繋ぐ。

3人ともあの恰好じやマズイしね。

「ふむ、無事でなによりだ。私もこれから現地入りをして調査に参加する」

「ヴァン師匠せんせいですか？ もしかして今回の件は……」

ロストロギア関連……知つてはいたが濁して尋ねる。

「そうだ。お前もくるか？ 低レベルとは言え管理主任者の資格もあるし大丈夫だろ？」

をぬコラー！

「そんな資格初耳なんですが！？」

どひゅーことだー！

「ふむ、以前に騎士カリムの依頼を受けだろ？ その実績から彼女の方で申請していたようだ」

聞いてないぞコラー！

これだから権力者は！

「 今回せやめしをあます。カリムさんご用事ができましたので

「……

「 そつか。では迎えをよいかからそれで帰りなさい

わう言ひて通信を終える。

場所も指定していないが……まあなんとかなるだろ？。

なのはせとヒュイトさんはまたもや苦笑いをしていた。

はやてさんは「カリム」とか言ひて合掌していた。

「そなんばかりだ……もう慣れたけどね。

「……しかし聖王教会が動いたんか」

はやてさんが階には聞こえない音量で呟くが、位置的に聞こえてしまった。

びつやうせやてさんは今回の件にて聖王教会が動いたことで、
ストロギア関連の災害だと感づいたようだ。
口

それに私たちがここへ来る前には六課フラグを立てているハズだから、今回の件について色々と思つてゐる所があるようだ。

しかしキャロとエリオの件を含め、六課はどうなることやら……正直見通しがつかない。

「 未来は私達が生み出していくもの……か」

不意にヴァン師匠せんせいの言葉が思い出された。

フロイトさんと笑いながら話しているキャロやエリオを見て、今まで選んできた選択肢が間違つていたとは……思いたくない。

まあ実際のこと、私は何もしていない気がする……このものこ
とですが。

「……とつあえず帰つてカリムさんを問い合わせますか」

資格取得申請の手間は省けたが絶対に善意からではない。

あの人のことだから、これからも面倒事を押しつけるためだ。

そう思い窓から外を眺める。

さすがは高級ホテル、景色も良い。

「アレルヤ」

こつぞも呟いた一言。

どうか未来も今日のよつに晴れ渡つてこますよつこ……

そんな祈りを込めて。

しかし現実は無常で、
課題提出は待つてくれませんでした……

原作序章編6～おの方に出会ひゆつです（6）（後書き）

今回で原作序章は終了です。

次回からは原作……ではなく幕間（個人サイドのお話）とフラグ回収編など。

せっかく遺跡やお宝がある世界観なのにの人たち（テイルズキャラ）が出ないのは寂しいので。

原作S+時代はしばらく先になります。

しばらくはリリカルからテイルズよりになりそうです。

興味がある方は読んでやって下さい。

主人公設定（原作序章編終了時点）（前書き）

久々に設定を更新

主人公設定（原作序章編終了時点）

主人公設定（空港火災終了時点）

名前	：アペリス・ウラノ
性別	：男
生年月日	：新暦 63 年
出身地	：ベルカ自治領 <small>ミッドチルダ</small>
容姿	：腰まで届く金髪、アメジストの瞳
家族構成	：父（父さん）と母（お母様）の3人暮らし
魔力資質	：先天的 AA ランク（現在値 AA + 程度）
才能	：器用貧乏
備考	：ハク（ハクリュー）を飼っています
原作知識	：アニメ版 Strikers まで、Vivid & Force は知らない
現在所属	：St · ヒルデ魔法学院 初等科3年
取得資格	：無限書庫司書、C級遺失物管理主任者（本人は知らなかつた）

称号（詳しい内容は各本編冒頭で）

- 【かけだしトレーナー】
- 【甲種準一級フラグ建築士】
- 【初めての弾幕ごっこ】
- 【魔法使い始めました】
- 【オリ主候補生】
- 【時を駆ける男（笑）】
- 【オリ主属性】
- 【元ラスボスの弟子】
- 【もしかして脇役？】

【略してオリ主】

技能
スキルっぽいモノ

【マルチタスク（4分割超高速思考）】

- ・読んで字の如く並列超高速思考

【なんちゃつて断罪の剣】

- ・ぶつちやけただの魔力刃

【ポーカーフェイス】

- ・ただのハッタリ

【なんちゃつてぜつたいれいど】 【アブソリュート・ゼロ】

- ・絶対零度の空間凍結魔法（やたら寒い）

【なんちゃつてインデイグネイション】 【インデイグネイション】

- ・撃つていいのは撃たれる覚悟のある人だけ、現在トラウマなため使用不能

【K-Y（偽）】

- ・場の空気を読み、（死亡フラグを）危険予知できる（回避できるわけではない）

【基礎魔法一式】

- ・治療、結界、弾幕等の基礎魔法

【なんちゃつてアストラルベルト】

- ・左右の手に魔力刃を展開させ前方に突進しながら斬りつける技

・エラーすると氣絶をせることができるシャルティエ直伝不殺の奥義

デバイス

【セイクリッド・スカイ】

種類　：ブーストデバイス（AIは搭載していない）

待機形狀：レイハさんと一緒に

戦闘形狀：なし、バリアジャケットは白い制服系統をイメージ
所有能力：大気中の『水分』と『温度』を操作できる（らしい）
使用魔法：『インディグネイション』『アブソリュート・ゼロ』『各種ブースト』

人間関係（登場順）

【ヒミリオ】　心友だと思っていたのに……

【シャルティエ】　乙

【ヒュー・ヒさん】　マジド

【カリムさん】　仲間だと想っていたのに……

【ヴァン師匠】
じじょう
師匠兼ヒゲ

【リタ】　もしかして私って実験動物？
メルモット

【ラグナ】　メル友（唯一の癒し）

【ヴァイスさん】　氣のいい兄貴分

【キャロ】

不幸な人生を歩んできた後輩

【ヒリオ】

よくエミリオと タイピング 入力を間違える……

【三人娘】

魔王、2浪、歩くセクハラ

主人公設定（原作序章編終了時点）（後書き）

人間関係はテキトーです。

そもそもシャルなんて人間じゃないし（笑）

～あなたと繋がりたい～（1）（前書き）

暑さにやられていました…熱中症には気を付けて下さい。

個人サイドの話はシリアスにしかならなかつたので封印しました（笑）

ここからはテイルズノリ的な話が続いていく予定です。

さああなたと響きあいたい…（1）

長いものには巻かれる。

なかなかの名言だとと思う。

天才や馬鹿、社会不適合者でもない限り、少なくとも凡人にとっては。

何が言いたいかと言つと……

「じゃあよろしくね 管理主任殿？」

結局カリムさんには勝てなかつたよ

しかも余計な面倒事のオンパレードだ……

あの後だが聖王教会本部に向かつた。

カリムさんに話を聞くため……

一応受付にて手続きをしようとしたら既にカリムさんが御呼びと

の」と。

IJの展開を読んでいた……？

じゅやらじゅらの方が何枚も上手のようだ……わかつていただくなー！

悲しくなんてないんだから……

「あら？ 団長と調査に向かわなかつたのですか管理主任殿？」

執務室に入つて第一声がこれだつた。

そもそも自分で受付に話を通してゐる時点でわかつてんだろー！

それよりも気になるのが……

「なんなのですかその『管理主任』といふのは？」

何勝手に決められてるのをーー？

そんなじゅらの心情を知らずにカリムさんは語る。

「ええ実は……」

そこから始まるカリムさんのサクセスストーリー。

衰退した世界を救済するため、神子が旅立つて行く物語……

「ジヤのシンフォニアだ……要約するとロストロゴニアの危険性と管理のお話だった。」

「管理主任の名前だけでも必要なのよ」

「……今までばづしてたんですか?」

「それが……その人が冒け……じやなかつた、長期出張から帰つてこないのよ。だからしばらくな代理を立てようと思つて……」

「じやあその人をさうあと探してくれば良いじやないですか!」

「さう言つて後悔した。」

カリムさんが某新世界の神のような顔に見えた気がした。

「じやあ搜索お願いね　グラシング団長に伝えておくわ。これも修行の一環といつことで」

「謀られたああああーー！」

【搜索クエスト（強制）】がヒントキーされましたー！

そんなアナウンスが聞こえた気がした……

そんなわけでやつて参りました無人世界。

なんでも前任者は休暇でここ^{ハグ}の遺跡調査に行つたまま帰つてきていないとのこと。

普通に搜索隊とか出せよ……あんまり心配されていないのかな?

ちなみに今回もエミリオとリタは来ていない。

別に休みでもなんでもないからね。

学院には一応ヴァン師匠^{せんせい}やカリムさんから話が通つていて

聖王教会の依頼だと融通は利くらしい。

もちろん単位なんてでないがな!

そんなわけで今回も例の空港事件調査を終えたヴァン師匠^{せんせい}と一緒にだ。

「キュウウウ！」

おつと忘れていたが今回は空気^{ハグ}も一緒にだ。

無人世界なら役に立つかもしれないし、制限もなさそうだし。

「では遺跡に向づけ

ヴァン師匠せきじょうがそう告げる。

飛行魔法で行くのかと思ひきや徒步でだった。

距離もそこまで離れているわけでもなく、魔力温存おんじゆんことの上うえ。

さすがに山道は辛いが……

「なに、これも修行だ」

正直まことにしどいわ……

2時間ほど歩いたりつか、よつやく目的地の遺跡に付いたのだが

「……なんですかこのお城は？」

ビニビニが遺跡だよ！

なんとも立派な古城だ。

「なに、見た目だけだ。中身はただの瓦礫の山だ」

「以前にも来ているのですか？」

「そういえば迷わずここにまで来たが……」

「最初の調査の際には、まあ何も得られなかつた調査ではあつたが、なん?」

「じゃあ何で前任者が遺跡調査なんてしてゐるのさ?..」

「そんな顔をしていたつもりはないがヴァン師匠せんせいが疑問に答へる。」

「ふむ、自分で見たものこそを信じる者でな……調査不十分だと言ひだして飛び出していつたのだ」

「自分が納得できなことをそのままにしておくよりは良いが……」

「自分勝手ですね」

「ふう、学者といつものはそういう人種だ」

ヴァン師匠せんせいが珍しく溜息をつきながら言つた。

「しかし、まあ……どんなに優れた文明であるうと滅亡を迎えるのは、世の摂理なのですかね?」

「後世に謎を残すばかりか、ロストロギアなんていう危険物すら投げっぱなしだ。」

「ふむ、断絶された歴史、後世に残される負の遺産、その影響による滅び……か。人とは愚かで救いようがない生き物なのかもしけな

いな……

あれえ？

何かネガティブモードに入っています？

もしかしてキチガイラスボスマスカ……じゃなかつた、栄光を掴むヒゲフラグが立つてます？

「いや、だからこいつか。陽の下では星の輝きはわからぬか……」

なんか自己完結しましたよこの人。

その台詞もポジティブに考えていいのかな？

なんか心配事が増えた気がするな。

そんな師匠は無視して、とりあえず古城に入らうと思つて近づいていくと……

「揺れていませんか？」

「ふむ、揺れているな」

辺り一面が揺れている。

そして古城から全速力で出てくる人影が……

「ぬおおおお…… 私としたことがああああ…… な、あああっ！」

！

その人がすごい形相で断末魔を上げ古城から脱出（？）した瞬間
……古城が吹っ飛んだ。

あるええ？

「木端微塵ですね」

「ふむ、見事消え去つたな」

自爆装置でもいじくつたのだろうか？

出てきた人をそつちのけで考えていると……

「むつ！ 淀んだ魔力が跡地に流れ込んでいるな。これは……」

なんかよくわからんが頭の中をアラートが……

【ＫＹ（偽）】がビンビン逝つてる……『ヤヴァアイ』と。

そして飽和した真っ黒な魔力が形を作つていき……

「……なんですか、このセンスの欠片もなさそうな化け物は？」

カリムさんの話がシンフォニアだつたせいか、イメージ的にはエクスフィギュアのすんごいでつかいやつに見える。

もう大抵のことには驚かないつもりだつたが……いや、むしろ呆れ気味なのだが、これはちょっとね。

「 悠長に眺めているわけにもいかないよつだな」

デバイス
大剣を構え、（割と）真剣な顔でヴァン師匠せんせいが呴く。

とりあえず……神さま、聖王さま、どっちも私のこと嫌いでしょ？

今回もいつも通りにトラブルが始まった。

～あなたと響きあいたい…（一）（後書き）

遺跡から出てきたのはあの方。

わかる人にはわかると思いますが…

次回はバトルかも…

～あなたと繋がりたいこと～（2）（前書き）

相変わらず暑い日々が続いております……

とりあえず前回の続きを……

シンフォニアのお話は次回で最後です。

～あなたと遊んでいたい…（2）

田の前にセイバ…じゃなかつた、金髪で虹彩異色なお姉さんがいました。

「あなたの望みはなんですか？」

優しくやう問ひにきた。

「平穏です」

なので迷うことなくやう答へる。

「そうですか、では頑張つて下さー」

えつそれだけ！？

平穏は頑張らなきゃいけないものですか！？

「そうですね……些か無責任でしたか。ならばそのための技能を伝授しましょすう」

おやかのサトウ！？

てゆーか結局頑張らないとダメですか！？

「いいですか、右手に魔力を、左手に……根性を」

できるかああ……

どこの感卦法だああああ！？

そもそも根性でどうにかなるかああああああ……

そんな現実逃避と云ふ名の白痴夢を見た気がした……

……意識を取り戻して現状把握。

すぐさまハクに乗つて空へ撤退した。

絶対ヤヴァイよアレ。

RPG風に言ひなうりイベントボスって感じだ。

「GYAaaa！」

凄まじい雄叫びを上げながら腕と思われる部分を地面に叩きつけ
る。

「ワーオ」

ものごとつ地面が抉れました。

だがしかし、向こうがイベントボスならこちらには（元）ラスボスがいるので……

魔を灰燼と為す激しき調べ……ジャッジメント!」

さすがに野太い声で詠わないか……ちょっと聞いてみたかった。

そんな心情を無視するより、上空から光の束が雷となって降り注ぎ、エクスフイギュア（仮）に全弾エホトした。

てゆーが全弾HITして鬼畜仕様だな

倒し……危ない。

フラグを立てるところだつた。

「ふむ、やつたか……？」

無駄な努力でした。

あなたがフラグ立ててどうする……

ああエクスファイギュア（仮）がみるみる再生してゆく……

「ふむ、中々の再生速度だな……どうしたものか」

凍らせればいけるかもしねないが、^{ターゲット}標的にされたら嫌だし、あの大きさの的だと一発で魔力がピンチなので自重する。

ヴァン師匠も一曰、上空まで避難してきた。

狙われるからひちくんなよ……

「で、アレはどうするんですか？　いえ、そもそもアレはなんな
でしょ？」

「ふむ、アレが現れる前に淀んだ魔力の流れを感じた。おそれくだ
がアレは「ぬおおおおおおおおおおおおおお！」　遺跡が跡形もないだとお
おおお！…」　…… そういえば忘れていたな」

おそれらぐ件の前任者と思わしき女性が叫んでいる。

古城から脱出と同時に吹き飛ばされていったようだ。

それにしてもよく叫ぶ人だこと。

「この遺跡の価値もわからぬ木偶の坊がああああ…　貴様もこの
遺跡のようにして
やるぞおおおお！…」

そもそもあなたが内部で何かやらかしたせいでいつなつたんじや

ないのか？

「どうやら自分のことせりに上げているみたいだ。

「生命を糧として、以下略。」セイクリッド・シャイン……」

その台詞と共に光が収束していき……大爆発しました。

凄まじい爆音と雄叫びが辺り一面に響き渡る。

正直凄くウルサイ

そして極光が直撃したエクスファイギュア（仮）から球体の何かが垣間見えた。

「あれが核だな
光龍槍！」

ヴァン師匠^{せんせい}_{デバイス}が大剣からビームを出してエクスフイギュア(仮)の内部にあるエクススフィア(仮)を破壊した。

そもそもエクスフイギュアはエクススフイアを要の紋なしに取つた場合になるんだつけ。

いくら（仮）でもいい加減過ぎたか。

まあビーでもいいが……それにしてもなんかシユールだな光龍槍

(笑)

エクスフィギュア（仮）は今度は再生しないで崩れていった。

「ハーハツハツハツハツハツハ！」　この遺跡の（以下略）相応し
い末路だ！！」

てゆーか結局この人、自分で遺跡を更地にしたよ……

「キュウウウウー！」

ん?
空気に徹していたハクが何かに気付いたようだ。

「……雪？」いやこれは光でしょうか？」

砕けたエクススフィア（仮）から雪のようになってしまったが天に向かう
ように光の粒が流れていく。

それはとても夢く、まるで

「 よつやく解放されたのだらう…… フツ、我ながら非科学的なことを語つて居るな

自嘲するかの如き、ヴァン師匠が呟く。
せんせい

「……どうせ、この古城は、誰とも口に言えないモノだったのですね」

だから滅亡したのか……今となつてはわからんが。

「人間は罪深い生き物だな……いや、だからこそ救いを求めるのか」

またネガティヴモードに入つて勝手に自己完結しましたよ……

もしかしたらこの事件よりもこの人の方が厄介かも。

「ぬおおおおおおーー！ 遺跡があああああーー！ 何も残つてない
だとおおおおーー！」

とりあえず今は自分の所業に悶絶している件の前任者くだん、銀髪美人の遺跡マニアさんをなんとかしますか。

まあ大方予想はついているが。

そんなんてんてー達を横田にもつ一度だけ空に向つて逝く光を眺める。

アレがなんなのかは想像の域を出ないが、今回の行為は正しかったのだと思いたい。

「 アーメン、せめて安らかなれ」

らしくない台詞を呴き……ふと思い返す。

「私つて今回……何もしてない？」

「キュウ～」

それもまたいつも通りだが……何か釈然としない終わり方だった。

～あなたと繋がりたい～（2）（後書き）

次回は「」の続報……とゆーかあとがき。

一緒にできればよかつたのですが暑くてダレました。

なるべく早めに次をあげたい……とは思っています

～あなたと繋がりたいこと～（3）（前書き）

前回の続き……でもシンフォニア関係ない。

迷走しております……

「あなたと響きあいたい…」（3）

とりあえず絶叫の果てに唖然と佇んでいるなんて一を連れて帰還した。

一体あの古城内部で何を見つけたのや？

それを尋ねたら超長い講義が待つていてなので自重するが……

そして聖王教会本部に着いたので、カリムさんの執務室に直行する。

「任務お疲れ様でしたグランツ团长、無事に回しゅ……見つけられたよつで何よりです」

おい、回収つて言いかけたぞこの人。

「若干トラブルはあつたがな……それは報告書に書いておこう。アペリス頼んだぞ」

「私がですか！？」

「おい」「うー

一般人（と思つてゐるのは本人だけ）にやらせるでない！

「なに、何事も経験だ。では次の仕事があるのでな、後は頼んだぞ」

そう言つてヴァン師匠せんせいは去つていった。

「せうですか、では明日までに作成しておくれとお願いね

しかも期限短つ……今日は徹夜コースか！？

まあそれはともかく、今回の発端である『管理主任』について相談しなければ。

「それで？ 前任者は連れてきましたので『管理主任』についてはやらないくて良いんですね？」

「せうねえ……『今回』は前任者の継続といつ形でいいでしょう」

やたら『今回』を強調してくるよしひ聞けたが……まあ将来的にせうてもいいんだけどね。

そして燃えぬきてこるてんてーに話しかける。

「聞いていますかアーヴィング女史？ 引き続き聖王教会の遺失物管理主任をお願いしますね」

攻略王おおおおー？
ローラン

「ああ……遺跡、遺跡が……」

しかし「この人、話を聞いたやいねえよ。

「では了承も得られたのでこの件は終了だね。これからお茶でもいかがかしら？」

絶対に聞いていないし頷いてないよね……まあいいか今日は。

しかしあ茶か……報告書の件があるから今日は遠慮しますか。

「折角ですが報告書の作成が「では用意をやるから先に中庭で待つててね」……なので今日は遠慮……」

「もういいだもなれ……」

「ふふっ、お味はいかがかしら?」

「とてもおこしいですカリムさん……」

中庭に移動してお茶会です。

こつぎせひと同じせつだな。

お茶も茶菓子も美味しいのだが……

「それで……要件はなんなのですか?」

今回まじめからストレートで尋ねることとした。

「あらあら、すっかりお見通しね

さすがにね……慣れたわ。

「ええ、実は……」

今回はサクセスストーリーではなかつた。

要約すると、なんでも今後しばらくは忙しくなり、予言解読に時間割けなくなるため、解読に協力して欲しいことのじと。

おそらく六課新設に向けた件のことだわ。

「Jの件などをオープンな場所で話して良いのだろうか？」

まあ後ろめたいことではないとのアピールかもしれないが……

Jの件だがもちろんタダではなく正式な依頼だ。

Jからとしても六課の戦力不足フラグが立っているため問題はない。

お金も入るし、翻訳の「ネもできるかも。

「実績が証明できれば予言解読の専門チームもできるかもしれませんね」

「ええ、Jの件お願いできるかじりへ。」

「わかりました。私でよければ喜...『ホンッ！』謹んで協力をさせて頂きます」

危なかつた……衝動には気をつけないと。

喜んでなんて言つたらどんな無茶を要求されるか……

「……やっぱ、じゃあお願いするわね」

微妙な沈黙があつたな……

【翻訳クエスト（任意）】がエントリーされました！

翻訳クエストってなんだ？

IJの件で少しだけカリムさんに感謝したのは秘密だ。

「そういうアーケイブスもんは？」

「彼女なら^{ロイヤル}那さんが回収していったわ」

来たのか攻略王……ちょっと見てみたかった。

「IJ結婚されていたのですね」

予想はついていたが。

まやかの^{ロイヤル}攻略王攻略……奇跡の所業だな。

「ちなんこ」……

ついつい以前にやらかしそうになつた禁句を訪ね……

空間が凍りついた。

背筋に刃物が当たつてこる（氣がする）

息ができない。

冷汗が出来まくつてこる。

少しずつ侵食されていく感じ……

ヤヴァア イヤヴァア イヤヴァア……

「？ ディレクターの

「ハッ！――」

以前より明確なデッジ・ハンドが視えた。

ＫＹとこつより、もはや未来予知レベルだな……

最後の最後でやいかしそうになるとほ……まあいつも通りだが。

何かと最近は諦めの境地に達しかけてこる氣がする。

それにしても報生蠻びつひみつ?

ヴァン師匠せきじょうもサンプルくらこ渡していけよ…

結局、徹夜で頑張るハメになりました。

ピロニー

】KY(偽)】が【直感(偽)】に更新されました!.

～あなたと繋がりたい…（3）（後書き）

「フレットさんは中の人があれですので出場前に退場しました。
むしろTOSRでは攻略王を攻略しているのは彼女なのに…」

Fへ美しいせ正義？（前書き）

今回も題名は関係ありません（笑）

しばらくゲームに集中しており執筆しておりませんでした。

とつあえずクリアしたのでまた書を始めるかと…

Fへ美しいは正義？

面倒事も厄介事も基本的に「ゴメンだ。

まあ既に相当アレだが……

チートなんでものは非日常への片道切符だと思つ。

血ひ進んで苦労はしたくない。

それは今も変わらない。

変わらないのだが……

強くてカッコイイのに憧れたりといいじゃん！

だつて男の子だもん！

カリムさんとのお茶会の帰りに、ふと最近の行動を客観的に省みてみた。

『自発的には何もしておらず基本的に巻き込まれ』

『それなのに原作ブレイクのフラグが立っている』

『助けようとしたら逆に救助された』

『訴えにいつたら何故か異世界へ』

『そこでも結局何もしていない』

『正直ひどい有り様だった……』

「…………」

これはマズイ。

主に「アイテンティティ」と言つか何というか……とにかくマズイ。

相棒の空気具合もマズイと思つんだ。

なので……

「セイクリッド・スカイの改造…フレームか……」

空港火災の時なんか爆風で吹き飛んでいつたしな。

デバイス強化とは短絡的だが未だフレームがないのは虚しいしな。

その依頼を出すとしたらヒュー「さんか……

頼む相手としては不安極まりないが……一応デバイスの製作及び

メンテナンスをしてくれているため信用はできる。

普段の言動から信頼はまったくできないがな。

うん、どうから湧いてきた？

「うむ！ついでにリミッターも何割か外すことにしてよう！」
モーマンタイ
今の君なら大丈夫・無問題だ！」

一体何が大丈夫なんだ？

選択肢というか、選択すらしてない気がする。

まだ頼んでませんよ？

今回もまた流されてしまった

ただでさえ報告書の件で頭がいっぱいなのに……

そして期限までの比較的平和だった3日間……これが嵐の前の静けさ、か。

そんなことを考えながらヒュー「」さんに呼ばれた……聖王教会本部の修練場。

なんでこりでやるのかな?

そんなにカリムさんにボコられたいのか?

ヒュー「」さんのドミ疑惑が再浮上した。

「つむ、きたか……」

修練場に行くと既にヒュー「」さんがスタンバっていた。

「それで依頼（？）していた件ですが……」

「つむ……まあ実演込みで説明するから起動させてみなさい」

実演つて……何をする気だ?

疑問は多々あるが待機状態のセイクリッド・スカイを渡される。

待機状態は以前と変わらずだ。

「では機動します。セイクリッド・スカイ、セット・アップ

【セイクリッド・スカイ・ファンダム起動します】

名前が既に「アウ…いやギリセーフ」か？

デバイスが起動しフレームが現れる。

セイクリッド・スカイの見た目が短剣になった。

美しい装飾がなされたナックル・ガダサップキヨン護拳、握に鍔。そして刀身は白い翼のよつなデザイernになつてゐる。

コア核であるセイクリッド・スカイは刀身の刃根本に組み込んである。

イメージは上記特徴のシャルティエミニチュア版だ。

「キレイです」

そう、思わずそう口にしてしまつほどだ。

だけど……

「これを振り回して使用して大丈夫なのですか？」

なんてゆーか、ヴァン師匠せんせいと正面からやりあつたら一発ポツキリな気がする。

もしかしたら儀式剣とかそーゆータイプなのかな？

補助に特化しているとか？

まあ本来はブーストデバイスなのだが。

「うむ、そこまで頑丈ではないな。直接斬りかかる等には使用しない方が良いだろ？まあ魔力刃を展開すれば使えないこともないが……」

つまりは補助特化型か。

「ちなみに機能的な追加はない。あくまで見た目だけだ

「……え、つ？」

「まあ2割ほどコンビニッターを外したから出力は上がっているが、これは次のモードへと至るために用意されたものである。一応これらは起動時デフォルトがこれになる」

まさかの見た目だけ！！

「…………そこまで言つからには次のモードには期待できるんですね？」

すんごく怪しいが……

「うむ！早速起動してみたまえ！次はモード『ガーンディーヴア』だ」

ガーンディーヴアって……

とりあえず起動してみる。

「セイクリッド・スカイ、モード『ガーンディーヴア』」

【モード『ガーンティーヴア』起動します】

短剣モードのセカイが2つに分身し、『』の形を形成する。

刃身の翼部分が伸び、『』の押付と手下を美しく形成している。アップバーコロアーツ

確かに美しいのだが……『』ってどうなんだろ？

遠距離攻撃の手段を持つていれば必要なくない？

そんなことを考えているヒュー・ITさんが回答てくれた。

「つむ。」のモード『ガーンティーヴア』の特筆すべき点は遠距離用ではないのだ

「え？ どうして？」とですか？

「本来このデバイスはエレメンタルスファイアを改造して作りあげたブーストデバイスだ」

「まあ、そうですね」

「ブーストデバイスの主な特性は魔力射出・射出魔力制御の補助だ。このフレームにはそれを最大限に引き出せるよう回路を組み込んでいるだけで』である必要はない？」

え？ なにそれ？

「つむ。『』を用いた射撃・砲撃魔法はない。まあ補助・治癒魔法なら射つてもいいかもしないな。だが特筆すべき点はそこではないのだ」

よかつた、まだあるのね。

「のままではどつかのおっさんみたく、『愛してるぜ』とかいってから治癒効果のある矢を撃つだけの存在になってしまつ。

「このフレームと回路にはエレメンタルスフィアの特性を更に引き出せるようになつてているのだ」

「特性」というと大気中の『水分』と『温度』を操れるといつ性質ですか？」

「うむ！ 今までそれを利用した魔力変換であつたが、これからはもつと直接的に大気中の『水分』と『温度』を操ることができるだろう……ハーハツハツハツハツ HAHAHAHAHAHAHAHAHAH AHA……『ゴホツ、ゴホツ！』まあ限度はあるがな」

それはすごいが……

「……『』の形状である必要はないですよね？」

「つむ！ 美しいは正義だ！」

「……そうですか。ならその正義に殉じて逝つて下さ……セイクリッド・スカイ・ファンダム起動……モード『ガーンディーウア』『

「うへ、うむ、少々待つて…」

「氷と雷のコラボレーションです。美しいものを目にしながら逝けるなんてヒュー！」さんは幸せ者ですね？」

「いやつ、その……遊び心でな、決して無駄な…」

聞く耳持たん…！」

どんだけ人をおちょくるつもりだ…！」

今までの出来事の鬱憤ストレス…！」で晴らす…！」

「絶氷と断罪！　いい加減その身に刻んで下さい！　セルシウス・キヤリバー（仮）…！」

右手に冷気を纏つた魔力刃、左手に雷を纏つた魔力刃をそれぞれ展開・合体させ、敵対象を一閃する。

こつぞやの白日夢で出会ったセイバー似のお姉さんの根性発言を参考にしたのだ。

まあ元ネタは『君と殴りあうRPG』からだが。

「ぬおおおおお…！　よさんかあああ

／＼　　.i—！　　…○…　.i1　　／
　　.*...　　／＼　1^　—／
　　^1　　—　.1　—　.i1　　／

ストレスを溜めるのはやつぱりよくないね。

「ふう、魔力はひとつ持つていかれましたが、なんだかスッキリしました」

一部人語ではなかつたが無問題だ。
モード

あああああああ

1 / * ; | ?
` < / : + , l
` < \ : . i
` < - : - i
` < " : - /
` < o べ " /
` < - : - /
` < " : - /
` < i - /
` < i - /
` < i - /
` < ! - /
` < / : - /
` < / : - /
` < / : - /
` < / : - /
` < / : - /

これからは定期的に何らかの形で息抜きもしなくては……

結果はいつも通りじょうもないが、今日は珍しく何かやり遂げた感に満ちた終わり方だった。

ピロニー！

【セイクリッド・スカイ】が【セイクリッド・スカイ・ファンダム（SDF）】に更新されました！

ピロニー！

【なんちゃつて断罪の剣】が【絶氷の剣】と【断罪の剣】に更新されました！

ピロニー！

【セルシウス・キャリバー（仮）】を留得しました！

ピロニー！

【魂のセカンドステージ】の称号を得ました！

Fへ美しいは正義？（後書き）

集中してゲームする以前に書き始めていたお話…時間を空けたときに何を考えていたのか忘れますね。

何が書きたかったのか今になつてはわからなくなつてしまつたお話です。

だいぶ迷走してまいりました…

Dへたまに近づくのを（前書き）

何のせの？ な話です。

画面をなんてありますんで、どうぞお話を..

丁たまにはほのぼのを

【魂のセカンドステージ】

説明：厨二 チューニングデバイスを手に入れた者に与えられる称号

条件…やいかしあげつけたNE

効果
：魔力
妄想力
羞恥心

備考：俺たちの黒歴史はこれからだ！　ちなみに名前に深い意味はない

ピロニー！

魔力がかなり向上したような気がします！

妄想力が・モニ・レ・シ・ル・れ!!

デバイス（正確にはフレーム）の件については現在見直し案を作成中だ。

作成から改造までヒュー・ゴさんが行つてきたものだから中身が半
ブラックボックス化しているため他には依頼できないからだ。

とりあえず短剣としても『としても使えない』ではないので取り急ぎといつわけではないが……

件のヒュー「ヤセヨシ」から別件で忙にならひしへ時間を見つけて都合つかず、とのこと。

一体こつになるやう……

そして相変わらずの日々を過げし、季節は流れた。

二つの間にか夏も終わり秋が近づいてきたこの頃、見事な晴れ空、お出かけ日和な休日。

今日は新作の甘味^{スイーツ}巡りの予定だ。

なんとカリムさんが一流パーティ新作スイーツ試食会の招待券（てゆーか賄賂？）をくれたのだ。

「私は忙しくて行けそうにないから楽しんでいい。あとお土産は忘れず」

「一度休みの日ですね、この日なら行けそうです。ありがとうございます。でも腐るのでお土産は無理です」

まあそう簡単には腐らんだろうが品質は落ちるだろからお土産なんて無理だ。

「当日に悩んで何を買つてくるのか楽しみたかっただけよ。気にしないで」

鬼畜だな!!

そんなやりとりがあつて試食会の招待券をゲットしたのだが限定30組で1組2名までと書いてあつた。

しかも注意事項で『甘味ニーウルサイ人求ム』と書いてある。

試食会というのだから意見を求める場なのだらうじ当たり前か。

最初はラグナでも誘おうと思ったのだがS·t··ヒルデ魔法学院の休日（祭日）であつて他にとつては平日なのだ。

どうしようかと悩んでいる矢先に出来たのがエミリオだった。

ヴァン師匠せんせいに用事があつたようで聖王教会本部まで來ていたそうだ。

早速スイーツの件を話すと……

「ふん、別に甘味などに興味はない……が、どうしてもと書つながら行ってやる

はいはいシン'トレッシン'トレ。

「じゃあ今週の休日に駅前14時で、昼食は取り過ぎないようにね」

そう約束して解散した。

なんかデートの約束つぽいなと思つて後悔したのは内緒だ。

今更だがなんで野郎ハリオを真っ先に選んでしまったんだ……

まあ甘味スイーツにウルサイのは確かなのが。

はあ、今回は友人と甘味スイーツを楽しむということにしますか。

閑話休題

くだん
件のお店は華やかなイメージではないが、どこか洗練された印象を持つており、ウェイトレスに招待券を渡し歩道側のテラス席に案内された。

とりあえず準備に10分ほどかかるため、先に紅茶を入れてもらい一息つく。

「ふう、こんな休日は久しぶりです」

「いつ以来だらうか、こんな穏やかな休日は？」

まあ依頼アルバイトを受けたり、無限書庫に行ったり、修行だつたり……

「ふん、自分で選んだ結果だらう。だったらウダウダ言うなうな

『じもつとも。

「あれ？ そういえばシャルは？ やけに静かなだけれど……」

「うん、一言も喋しゃべってないな。

「最近調子に乗つていてな。待機状態では喋れないよつとしてある
その分修行中じゆぎょうちゆうのところがな、とのこと。

「ひるやこひるやこのもシャルのアイデンティティだと想おもひつのだが……」

「まあ外出時だけだ。普段はそこまで律していなこさ

よかつたねシャル、まだ救うけいがあつて

シャルがいないとエミコオも基本冷静せいじやうだな。

折角の機会だし、踏み込んだ話をしてみるか。

「ねえエミコオは騎士になつてどうしたいの？ 最初は家出の理由
だつたかもしれないけれど、こつまでもそういうじゃないよね？」

「……なんだ唐突に？」

「単なる興味と参考です」

田舎すのは別にいい、だがそれを叶えてどうしたいのか、次はどうするのか。

ただそれが気になつたのだ。

「ふん、多くの人を救いたい、なんてことはない。僕の望みは「もつかい言つてみやがれゴルアアアア！」……なんだ？」

なにやら歩道の方で喧嘩騒動が……

「何度でも言つてやるよー！ てめーが『ぶわああああああつふ！』

おいおい言う前に殴つたよ今。

てかそのままこっちに突つ込んできた！？

咄嗟にテーブルから離れなんとか回避！

飛んできた人はテーブルに突つ込み、おまけで頭から紅茶（HOT）を被つて悶絶している……ちなみに顔面も痛そう。

殴つた人を見ると……なんか世紀末なヒヤッハーを連想させる人であった。

なにこれ不良？ チンピラ

「おうおうわりいなボーズ共、
廃棄物の不法投棄をしちまつたぜ、
ヒューファアー！」

いや廃棄物つてあんた

「廃棄物は『焼却処分だな』…おうおうボーズわかってんじやねえか！」

エミリオが割つて入つてそう答える。

でもエミリオが言いたいのは多分あなたがたのことです。

「シャル出番だ」

【一九三九年六月一日】 ひまわりと玉ねぎが回ってきたよ。おまけに玉ねぎが回ったよ。

エミリオがシャルを抜き……

「廃棄物は貴様だ
塵も残さん！－！　淨破滅焼闇！－！」

エミリオがシャルに黒い炎を纏わせ振りかぶり振り抜いた。

見事に周囲に被害を出さずに対象だけを燃やしているようだ。

これって炎熱変換の応用なのだろうか？

今度聞いてみようか……それはともかく実際に塵も残さないほど燃やし尽したら大変だろうが……

まあ 実際は生きているし気絶しているだけで大丈夫そうだが。

「闇の炎に抱かれて消えろ」

いや、生きているからその人。

「つ痛う、ハンッ、ざまあねえ「喧嘩両成敗です」へぶつー！」

テーブルに突っ込んできた人の第一声が腹立つたので、顎を蹴つてこちらも氣絶させておく。

「シャル^{モードリース}、待機状態」

【えつ！？ 出番これだけでええ……】

シャル乙一

「まつたく……食べている時じやなかつたからよかつたものの」

でもなんでだらうか、自分一人だつたら絶対に食べようとした瞬間に吹つ飛んできた氣がする。

結論、どつこじる食べ損ねた。

あの後事情聴取で警防署へ……

HILLIオが派手にぶつ飛ばすから……ほつといて絡まれるのは嫌だが。

そのおかげで新作スイーツを食べられなかつた。

まああのまま通常営業といつわけでもなさそうだが……

「穏やかな休日なんて幻想だつたのしようかね？」

少し血潮氣味に嘆く。

「僕にもお前の悪運がまわってきたか……」

失礼だな。

「やついえばあの時の続きは？ 僕の望みは～つてこいつの件のくだり」

「……」

ふと、あの時遮られた続きが気になつた。

「ふん、あそこで横やりが入ったのも何かの『運命』だ。続きは胸の内にしまつておくこととするよ」

あらり、せぐらかされたよ。

運命といつよりただの悪運？

「今日はアレだったが機会があれば声をかける……付き合ってやらんこともない」

はいはいシンクトレシントレー。

結局は何も食べられなかつたけど、そこまでも不満といつわけではなかつた。

これがプライスレスといつやつかな？

何がとは言わぬいが。

時刻は既に夕方、互いに悪態を付きながら帰路につく。

歩きながらふと紅く染まつた夕空を眺める。

自然が彩る美しさはまだ人も変わらず、か。

「 今日は「ふん、疲れる休日だった」……ソウテスネ」

……今日は並び前にHILLIOに締められました。

Dへたまにはほのぼのを（後書き）

そろそろリリカル（原作準備編）に戻らうか悩み中…

原作準備編1～主人公は調べものをするよいつだす（1）（前書き）

今日はギャグオチではありません。

（ほんの）少しだけSNSに向けた準備のお話。

原作準備編1～主人公は調べものをするよつだ（一）

己を知り、敵を知ればなんとやう。

まあ己はともかく……

季節は更に流れ秋から冬へと移り変わった今日この頃。

ようやく時間もそれそつなのでStasのラスボス（？）『聖王のゆりかご』について調べてみよつと思つた……のだが

「そもそも聖王について全然知らないです。」

以前、シャルの件で真正古代ベルカについて調べたことがあったが、肝心の聖王については調べたことがなく、ヴィヴィオの複製母体で『最後のゆりかご』の聖王』としか知識がなかつたのだ。

既に聖王教会にだいぶ入り浸つており、教会系列のミッションスクールに通つているのに聖王に関して知識がないのは……マズイな。

まあ聖王教自体が緩いため、学院でもあまり徹底していないのか？

まずは無限書庫でゆりかごについて調べるより、学院の図書室で聖王や教会のルーツについて調べるとこからだな。

今日は午前授業であつたため、午後から学院の初等科校舎図書室に行き、聖王について調べようと思つたのだが……

「『聖王』の頃多すがります……」

わざわざだよね。

この学院は聖王教会系列だもん。

ここでは検索魔法を使うわけにもいかないので途方に暮れている
と……

「あれ、リースさん？」

誰かに呼ばれ振り向くと、つい先日も会ったハズなのに何故か久々に会つた気がするエリオがありました。

「こんばんは。リースさんとここで会つのは珍しい……とこつより初めてですね。今日は何か調べものですか？」

相変わらず礼儀正しい子だこと。

シンデレラ共に見習わせたいね……気持ち悪いだけか。

「うふ、少し調べてみたい」とがおつてね。エリオこそ調べもの？
その言い方だと頻繁に来ているようだけれど。」

エリオは真面目だが、あまり勉強とはイメージが合わない気がするが……

「はい、放課後はよくキャロとノード面題をせつたつしているやべー

「何気に青春の一ページだな。

「今日はキャロとせー一緒にやないの？」

キャロともじめいへ……こや、つい先日会つているんだがどうね。

なんでだらつか……しづらへ会つてこない気がする。

『気のせいか？』

「今日はリタさんと一緒に行かれまして……」

リタに連れて逝かれた……だと？

リタの研究室にかー？

『極光のリタウマがああー！？』

「……研究室？」

「違いますよ、何でもこれからショッピングだとか……僕も誘われた

んですが、以前シャルティエさんに【女の子の買い物に付き合つては決戦に臨む覚悟が必要なんですよ？ 敗者に待っているのは別れのみです】って言われたことがあるんですよ。意味はよくわかりませんが今日は課題があったのでこっちを優先したんです「

シャル^{デバイス}……お前は剣なのに何を経験してきたんだ？

それにしても仲良くショッピングとは……ちょっと……いや、かなり意外だ。

「最近はよく『猫』派か『竜』派かで2人で盛り上がりしているんですよ」

なんだその一^{チヨイ}択^{イス}は？

まあきっとキヤロの髪がピンクだから気が合つのだろ？、そう思おつ。

「そつにえは何を調べているんですか？ 確か司書の資格を持つているんですから『リリ』君が無限書庫の方が調べものには向いてるんじゃない……」

「あつ、いや、たいした」とじやないんだよ。ちよつと聖王教会のルーツについてね

「の際、正直に話しておぐ。

「あつそれなら前回の課題で使ったオススメ本がありますー。よければ持つてきますよー？」

1年生の課題レベルの話だったのかー？

そーいえば入学式から1年間休学してたっけ……

そりゃあ知らないわな。

「じゃあそれお願い。他にもオススメがあつたら教えてもらひえる?」

「はいー今持つてきますのでちょっと待つてて下さー。」

元気なのはいいけど図書室では静かにね。

エリオが持つてきた本のおかげで聖王教会について基本的なことはわかつた。

なんでも次元世界最大規模の宗教組織で『聖王』と『血族』、彼らの傍にいた『騎士』たちが信仰の対象らしい。

もしかしてシャルも信仰対象の騎士なのだろうか？

……嫌過ぎる。

「そういうばどうして聖王教会のルーツを？」の内容は1年生の授業でやつたハズじやあ……？

ヒリオが痛ことじるを突いてくる。

極光のトライウマが……

「…………入学式当時から全治一年の重傷ですね、一年間休学していたんだ
」

「あー、えっと……『みんなや二ー』

「気合しないで、ただのトライウマだから

『元気なまつりでも……』トライウマ?」

おっと失言だったか……。やつれとキツアガヌ。

さて、今後はもう少しだけ歴史について調べてみますか。

それから『聖王のゆづか』について調べるとひみつ。

図書室でヒリオと別れ、借りた本を抱にしまって外に出るとチラと雪が降っていた。

それは積るような量ではなく、まるで景色を彩るグラフィーションのようだ。

それにしても雪か……。ひつで普段より暖かいハズだ。

「これでウチの自宅警備獣も活動すればいいのに……」^{ハク}

冬はトグロを巻いて暖房の傍から離れないからな。

ただでさえ空気なのに自ら活躍の場を放棄するとは。

まあ、ジーでもいいんだが。

雪景色に少しだけ浮かれながら帰路につく。

確かにこの事件は六課フラグが怪しいので不安だらけだが、幸い時間的に余裕があるので今の生活を、将来目的も含め犠牲にしてまで無理はしたくない。

自分にできる範囲で、できる限りをやつしていくしかないのだ。

「少しずつ、少しでも前へ」

そんな思いを胸に抱きながら……

何気にギャグオチ以外の終わり方は久しぶりかも……ちょっとだけホロリときた。

原作準備編1～主人公は調べものをするようですか（1）（後書き）

もう一話似たような話が続きます。

原作準備編2～主人公は調べものをするよつです（2）（前書き）

前回の続きをのよつなお話です。

まじめではないけどギャグでもない。

そんなお話。

原作準備編2～主人公は調べものをするよつです（2）

オリヴィエ・ゼーゲブレヒト

『最後のゆりかごの聖王』^{オリジナル}でヴィヴィオの複製母体にあたる人物。

古代ベルカ戦争終結後、他国を制し、ベルカ統一を図った人物：
：？

その辺の記載は本によつてバラバラで歴史研究でも諸説あるようだ。

中には後世でも有名で、物語にも出てくる英傑『霸王イングヴァルト』とも関わりがあつたとか、そういう説もある。

ちなみに霸王イングヴァルトの伝記『シクトウラ戦記』は以前に読書レポート用で読んだことがあつたが、オリヴィエの話は出てこなかつた。

歴史は正確に伝わらないからこそ、ロマンが溢れるのだろうか？

一体どの説が正史なのやら……考へても仕方がないか。

とりあえず今は『聖王のゆりかご』について調べることにしてよつ。

冬も終わりが見え始めた3月。

学年末試験を問題なくクリアし、長期休みに入ったある日のこと。
まとまった時間がとれたので無限書庫に向い、以前調べてみよう
と思っていた『聖王のゆりかご』について調べることにした。

試しに『聖王のゆりかご』の単語で検索してみたが膨大な数がヒ
ットしてしまった。

そのほとんどが歴史書であんまり役に立ちそうにない。

原作で司書長^{ヨーハ}は短時間でよくあそこまで調べられたものだ……

仕方ないので検索ワードを変更してみると上手くいかない。

検索方法が下手なのか、対象が探しづらいのか。

どうやら長期戦の覚悟で臨む必要があるようだ……

と挑み始めたのが2日前……もう既に挫けそつだ。

連日、無限書庫に来て調べているが成果は得られていない。

「聖王と霸王のキャラクターのお話はもうおなかいっぽいです……」

霸王自身の回顧録とか相当貴重な本も見つけたが、もはや感動で
きないくらい精神的に消耗していた。

もう諦めようかと真剣に考え始めていたところ、後ろから声をか
けられた。

「キミ、大丈夫？ 連田ここに来て何か調べものをしているようだ
けれど……困っているのなら僕でよければ手伝うよ？」

おお、^{ユノ}有能な司書長さんだ……もはや自分にすらツツコム氣力も
ないわ。

さすがに疲れたのでユーノさんに簡単な経緯を説明し手伝つても
いいことにした。

自分も忙しいのに見知らぬ子供の趣味（一応そういうことにして
いる）にまで手を貸してくれるとは……

ユーノさんマジ^{ユノ}有能……

うん、少しは氣力も回復してきたようだ。

自分の今まで集めた情報をユーノさんに教えキーワード及び除外項目を絞つてもらい、調べ始めて15分ほど……目的の資料が出てきた。

目的の資料が見つかった歡喜とスペック差を見せつけられた絶望感が心に響く。

「うん、これだね。しかし、この『聖王のゆづか』はずいぶん…」

ユーノさんが『聖王のゆづか』のスペックを見て驚いている。

古代ベルカにおいて既にロストロギア扱いの戦略兵器だもんね。

何か使えそうな情報はないか見てみるが、原作以上の情報は得られそうにないようだ。

ゆりかじ内の『王座の間』と『駆動炉』くらいの位置は把握しておぐか…

てゆーか、大質量の氷塊でも急襲していくわけやれば壊とせられるんじゃないかな？

まあ、周囲の環境や内部の安全、『鍵の聖王』^{ヴァイヴァイオ}+を気にしなければの話だが。

最悪はその方向も検討してみるか……そんなことを考えてみるとユーノさんがAMFの項目を真剣な表情で調べていた。

「これは……もしかして……いや、まさか……でも……」

何かブツブツと呟きながら思案している。

もしかしてガジェットの件との関係性を考えているのだろうか？

「あの～おにいさん？」

「あつこめんね！ 中々興味深い内容だつたからつい……」

「いえ、いちいちありがとうございました。おかげで知りたいことが知れました」

原作以上の情報は得られなかつたが。

「うん、役に立てたならよかつたよ。それとこの資料は僕の方で預かってもいいかな？ ちょっと調べてみたいんだ」

「ええ、かまいません。私の調べものは終わりましたので」

コーノなら情報が『敵』側に漏れないと思われるし……これはもしかしてプラス方向の原作ブレイクフラグか？

ちょっとだけ希望が見えてきたかも。

「あつそうだ。僕は無限書庫の司書長をやつてゐるコーノ・スクラニア。キミの名前も聞いていいかな？」

「なぬ？」

何か厄介事の臭いがそこはかとなくするが……手伝つてもうつて

おいて答えないわけにはいかないし、司書の資格もあるから嘘付いてもバレると思われるので正直に話しておく。

「Sht・ヒル『魔法学院3年…』といえ今度4年になるアペリス・ウラノです。一応ですがここに司書資格も持っています」

「わうなんだ。これからもうここで会つたらよろしくね」

「はい、では今日はここで失礼させていただきますね」

「うそ、またね。今日は貴重な資料をありがとうございますアペリス」
礼を盡つのはじからだが……まあいいか。

ゴーノにもう一度礼をしてから無限書庫を後にする。

未来はまだまだわからないが、少しずつは進んでいく……ような気がする。

少しだが希望も見えてきた。

「一步一步を着実に……」

そう自分に言い聞かせながら……

「キュー～」

帰宅するとウチの自宅警備獣も暖かくなってきたからか、中々活発的になつてゐる。

だからといって出番があるかは別の話であるが……

そして季節は冬から春へ

原作開始まであと3年

原作準備編2～主人公は調べものをするようですが（2）（後書き）

そこはかとなくV.i.V.idのフラグが… いずれ回収したいとは考えています。

次回はまたコメディ路線を予定。

次のキャラ（予定）は…

原作準備編③～主人公はあの人とすれ違つたようです（前書き）

当初予定の話と変わつてしましました…が連載2か月記念ということがあげることにしました。

ちなみに、すれ違い＝ニアミスでは使い方おかしいんですね。

おかげで変なタイトルになつてしましました…

原作準備編③～主人公はあの人とすれ違つたようです

無事に4年生になることができた。

昨年を振り返ると色々とあったものだ。

……うん、色々とあり過ぎたな。

振り返るのはやめておいた。……ただの自傷行為だ。

いつもやつて過去を切り捨て大人になつていくんだけな……

ミッドでは色々な資格の受験資格が10歳から『えられるようだ。

魔法世界の就労年齢が低いだけはあるわ……

とりあえず講習のみで取得できるものから受講、単位になる魔法技術関連の資格を取得し、少しだけだが授業に出る時間を減らすことに成功した。

ちなみに他の生徒はほとんど知らない方法だ。

学院側としては授業に出て欲しいもんね。

まあ私たちはヴァン師匠せんせいやカリムさんの件で授業に出られない場合もあるので、特別に裏ワザを教えてもらつたのだ。

今回はその空いた時間を利用し、遺失物管理の勉強をしてB級遺失物管理主任者の試験を受験することにして、見事合格することができた。

B級といつても結局C級に色が付いた程度といえるが……

ちなみにロストロギア専門の研究者や聖王教会の管理主任であるてんてーは基本的に皆A級だ。

いずれはひとつおきたいものである。

さて、季節は春から夏に移り変わろうとしている6月。

上記の話とはまったく関係ないが、今日はキャラ、エリオと一緒に第四陸士訓練校の見学にきている。

なんでもフェイトちゃんが西口の校長にお世話をなつたとか。

今日はその校長への挨拶と相談があるらしい。

せつかくの機会なので以前から訓練校に（ちょっとだけ）興味を抱いていたエリオに声をかけたようだ。

キャラもフロイトさんと会える機会なので一緒にきてきている。

ちなみにフリードはお留守番。

ウチのハクと遊んでもらつていい。

ドライバー（？）同士なかなかに仲が良じよつで、ある日突然タマゴでできないか心配な位だ。

さておき、フュイトさんも中学卒業したのだから、ミシドに住居を構え3人で暮らせばいいの。

まあ今の実家は地球だし、本局勤めだから簡単な話ではないのだらうが。

てゆーか家族団らんの空間は部外者にとっては居心地悪い……

なぜ私が一緒にきてているかといつと、フュイトさんからの要望だ。

なんでも2人の学院生活について聞きたいとのこと。

まあ、私自身も訓練校に少しだけ興味があつたからOKしたのだが……正直この空気は辛い。

3人の後ろで一緒に来ていたフュイトさんの副官シャリオさんと苦笑いせざるを得ない。

それにしてもこのシャリオ…改めシャーリーさん、人懐っこいと

いうか、なかなか話しやすい人だ。

なんでシャリオをなぜわざわざシャーリー（酢飯）と呼ぶのか激しく疑問ではあるが、見た目で判断して 子供扱いしないのでなかなかに会話が弾む。

（ 実際はまだ10歳の子供です）

デバイスマイスターの資格も持つておりセイクリッド・スカイにも興味津々で尋ねてきたのだが、製作者^{ヒトアゲル}のことを話すと「まさかあの伝説の……」と呟きながら田を逸らされ、謝られた。

それ以上デバイスの話題には触れてこなかつた……公式メカオタ眼鏡を黙らせるヒュー^{ヒュー}さんの伝説つて……

フロイトさんが校長と話している間にシャーリーさん引率で訓練の様子を見学する。

シャーリーさんも専攻は違うが「」の卒業生らしい。

道中懐かしみながら歩いている。

そして屋上からグラウンドで行つて いる訓練の様子を眺める。

どうやら今は障害突破の訓練のようだ。

連携して壁を突破する訓練のようだが……

「飛んでいますね……人を投げる訓練なのでしょうか？ なかなか斬新ですね」

「なるほどー 投げ方を練習する訓練なんですね！」

「ふえええ、怖そつ……」

「いやいや違うからね！？ いや、投げるのは一理あるけど…… 応連携して壁を越える訓練だから！？ 間違つて覚えないでええ！」

上から、私 エリオ キヤロ シャーリーさん。

「冗談だつたのだが……お姉さん涙目。

ツツコミニ役がいると楽だな、と思つたのは内緒だ。

障害突破の次、今度はグループで別れ射撃訓練と打撃訓練を行つらしく。

「せつかくだから近くで見てみようか？（間違つて覚えられる前に確実に説明しなきやー）」

シャーリーさんからソウ提案があり、そこに鬼気迫る何かを感じたので一同頷き、射撃訓練場の方へ足を延ばす。

「どうやら木々の奥に設置された的に誘導弾を撃てる訓練のようだ。

「すみません。見学の者ですが近くで見せていただいてもよろしいでしょうか？」

「むつ見学だと？……まあいいだろう。未来の候補生を無碍に扱うわけにもいかないからな」

興味があつただけで誰も入校するつもりはないのだが……

担当と思わしき金髪美人の女性教官の許可を貰つて近くで見学する。

「よし！ 最初に私が見本を見せる！ 皆、見学者もいる手前、情けない姿は見せるなよ」

何気にはードルを上げてしまつて申し訳ありません。

Hリオわくわく、キャロおどおど、シャーリーさん苦笑い。

「よく見ておけ……こぐぞー！」

どうやら見本が始まるとつだ……とゆーかそんなに氣合を入れるものなのか？

「光の欠片よ、的を撃てーー！」

えつ？

「プリズムバレットーー！ 終わりだーー！」

……うん、確かに的を撃つたよ。

ちょっとダイジェストに説明していこうか。

『光の欠片よ』で足元に魔法陣が出現、周囲の訓練生を発生した衝撃波で吹き飛ばす。

『的を撃て』で二丁拳銃デバイスによるバレット連射、それにより障害物となる木々を吹き飛ばす。

『プリズムバレット』で障害物の無くなつた的に向け極太レーザーを放つ。

『終わりだ』でレーザー着弾、爆発。そして的を消し飛ばす。

確かに『的』は撃つた。

「吹き飛ばしましたね……これも障害突破（+的の撃破）の訓練でしたか。弾幕の数と威力、双方を重視しているのですね」

「なるほど！ ジャブとストレートの使い分けをする訓練なんですね！」

「ふええ、スゴイです……」

「違うから！　違うから！　違うからあーーー！　ただの誘導弾で的に当てるだけの訓練だからあーー！　お願いだから間違つて覚えないでええ！？」

ヤヴァアイ、何かクセになるかも……『めんねシャーリーさん。

それにしても魔にゅ……じゃなかつた、魔弾さんがいらっしゃると
は……ヴァン師匠せんせいとフラグは立つているのだろうか？

今更だがこの世界は一体どうなつていいんだ？……？

カオスだ……

すっかり消沈してしまったシャーリーさんを連れ、フェイトさんと合流し帰路についた。

それにしても訓練で2回とも吹き飛ばされていた人に見覚えがあるよつた……

まつ氣のせいか。

さて、休日はおしまい。

明日からまた学業に励むとしますか。

原作準備編③～主人公はあの人とすれ違つたようです（後書き）

漫画版は知らなかつた主人公。

まさかのティアナさんと…すれ違い?

そしてティア繋がりでの人が登場。

ティアナ強化フラグが立ちました

ゆかなさんはツヴァイさんだが…モーマンタイ!

原作準備編4～主人公は勝負に勝つて試合に負けるようになります（前書き）

少しずつだけど原作に向け時間は流れます。

今回は一気に時間を飛ばしたかったが、飛ばせなかつたための小話。

原作準備編4～主人公は勝負に勝つて試合に負けるよつだす

夏も終わり秋といえる季節になつたこの放課後、ヴァン師匠せんせいから呼び出しの連絡が入つた。

呼び出し場所は来賓用の応接室。

ソファの座り心地がハンパない、憧れのサボタージュスポット。

指定された時間に行つたがヴァン師匠せんせいはおらず、エミリオしかいなかつた。

どうやらヴァン師匠せんせいは若干遅れている模様だ。

「ふん、呼び出しておいて遅れてくるとは……何様のつもりだあのヒゲは」

きつとあなたと同じ俺様だよ。

「ヒゲはどうせまだ来ないんだろう? 喉が渴いたからお茶を入れる」

うん、お前も俺様確定だな。

てゆーか私はお前の茶坊主でもねーんだが……まあせつかくなので高級茶葉でも使わせていただきますか。

ちやつかり高級茶菓子もいただきながらヴァン師匠を待つこと30分、ようやく件のヒゲがきた。

「つむ、遅れてすまないな。手短に話そうと思つが、なにぶん先ほどまで音楽の講師をしていてな。悪いが茶を一杯入れてもらえるか？」

ヴァン師匠せんせいは教師をやめてからも非常勤講師として音楽を担当している。

そんなに音楽が好きなのかこのヒゲは？

てゆーか私はお前の茶坊主でもねーよ。

師弟揃つてなんてゆー俺様わらわだ……まあもう一人の弟子りしも唯我独尊だが……あれ？

「師匠せんせい、今日の用事にリタは呼んでいないのですか？」

いつもは3人揃つてが多いのだが……

「つむ、リタには先に話してあるのでな。来週の休日の話なのだが

……」

要約すると来週に知人の結婚式を聖王教会本部で行つたため、来週

は稽古なしで式の準備を手伝ってくれとのこと。

「それは構いませんが具体的には何をするのですか？」

「なに、指輪を持っていく仕事だ。昨今の式ではシテ・ヒルデ魔法学院の生徒がその役をやることが多くてな」

「ああいわゆるリングボーイ……

「ああいわゆるリングガールでな……」

ヴァン師匠せんせいがそう言つた瞬間、私は屋外に飛び出でいた。

以前の研究棟消滅事件より習得していた物質透過跳躍魔法だ。

これも無限書庫でのランダム検索で見つけた戦利品だ。

スマン、エミリオ……式を挙げるカップルに幸せを届け……

「逃げ切れると思ったか！－ 隠隠ちらり－！ テモンズランス－！」

一瞬でもエミリオに謝つたことを後悔しまし……

「なにを勘違いしている？ その役は既にリタに頼んである

「なにを勘違いしている？ その役は既にリタに頼んである

要は雑用ね……無駄にダメージを受けたよ。

でもなぜだらうか、あの時は逃げた方が良いと直感（偽）で感じたのだが……？

「ふん、面倒だがまあ良いだらう」

HILLIオはOK、てゆーかりタがOK出したのだらうか？

激しく疑問だ……

そして式の当日、私たちの仕事は主に来客の案内だ。

ヒューカビッククリ！！ 今日はＫＹ……じゃなかつた、クロノさんとエイミーさんの結婚式のようだ。

着飾つてはいるがドコかで見たことある人たちばかりだもん。

聖王教というか、ミッヂの習慣というか、結婚式といえど厳密に親族だけではなく上司、友人と思われる人たちがたくさんいる。

「あれっアペリス？ 今日は手伝いなのかい？」

声のする方を向くとぱつちり礼服で決めているゴーノさんが來ていた。

ちなみに私たちの恰好は学院の制服（長ズボン×e）だ。

「ええ、ほんにちはコーノさん。今日は案内係ですが」

「コーノさんは半年前の無限書庫での出会い以来、ちよくちよく話す仲になつた。

「そつか。あつ、式を挙げるクロノなのだけど僕の友人でね。よかつたら君も式を見ていつて祝つてあげて。じゃあ、お仕事頑張つて」

そう言つて中へ入つて行つた。

来客の案内をしている途中だつたが、ヴァン師匠せんせいから呼ばれていると教会スタッフに言われたので、残りは中等科生徒の手伝いに任せ教会スタッフがいる控え室に行くと……

「うむ、来たか……少ストラブルでな」

ヴァン神父せんせいとカリムさんがありました……激しくシシ「ミ」を入れたいところだが今日はめでたい日なので自肅する。

いつものパイナッポーヘアではなく髪を下ろし、なんだかいつもよりキリッとしている。

なぜだらうか、この声この姿で某マー婆ー神父を連想した私は悪くないと思つ。

「それで……トライフルとはなんだ？」

Hミリオがそう尋ねる。

目線は微妙にヴァン神父^{せんせい}から逸らしているが……

「うむ、リタが交通事故による渋滞でこいつれなこらしこのだ」

絶対ウソだ、Hミリオと視線を交差させ頷く。

初めからくる気なんてなかつたんだろうアソーッ……本氣でくる気があるなら転移魔法とか絶対使っているハズだ。

「……それで？ 僕たちを呼んで……どうする？？」

薄々と感じてはいるが一応尋ねるHミリオ。

あの時の直感（偽）はコレのことだったか……

カリムさんがヴァン神父^{せんせい}の代わりに答える。

「最初は中等科の生徒にでも代理を頼もうと思つたのだけれど、何分用意したドレスのサイズが合わなくて……なので……」

それ以上の言葉はいらなかつた。

Hミリオと向かい合い、互いにデバイスを起動する。

そう、これは男と男のプライドを賭けた聖戦^{たたかい}だ。

「　　覚悟はできましたか？」

【覚悟はできましたか？】

「　　あなたの晴れ姿を眺めて笑いを堪える覚悟？」

【それもいいですねえ～】

「　　「……」

【誰か構つて下さい……（泣）】

一瞬の沈黙、…………そして……

「遠慮はしません！　アストラルベルト！..！」

片やデバイスを使うと見せかけ、逆の手で発生させた魔力刃による抜刀術の如く高速の薙ぎ払い。

「くつ、散れ！　月閃光！..！」

片や三日月のような軌道を描く斬り上げと魔力による衝撃波を伴つた剣技。

一瞬の交差、結果は……

「くつ、この僕がつ！」

魔力刃がシャルを吹き飛ばしエミリオの肩にヒットしていく。

デバイスと見せかけた不意打ちの分こうじの方が早かつたようだ。

「『めんなさ』Hミリオ、男には絶対に負けられない戦いがあるんだよ」

Hミリオは肩を押さえ俯いている。

スマン、恨むならリタを……

「Hミリオくん大丈夫？　ああ痛そうね、これじゃあ指輪運びは厳しいかも……」

なぬ？

「ふむ、ならばアペリス、申し訳ないが頼んだぞ？」

あれつ？

今回は勝つた……よね？

【オワタヽ(^○^)ゝ】

シャルうつさい。

勝負に勝つて試合に負けた。

ピロワーン！

【なんちゃってアストラルベルト】が【アストラルベルト】に更新されました！

結論、なんとか回避できた。

なんでも身内（？）ということでエリオが花撒き、キャロがベルガールを務める予定だったので急遽変更してもらい、キャロがリングガール、キャロの代理にアルフ（幼女）がベールガールを務めることになった。

最初からそうじるよ！ と思つた私は悪くないと思つんだ。

普通は身内とかでやるもんだろ？……カリムさんは確信犯だろうが。

無駄な聖戦たたかいを繰り広げた自分たちバカは後方の席で式の進行を眺めている。

すっかり意氣消沈……とゆーか精神的にまいった。

ヴァン神父せんせいの普通の台詞では「誓いますか？」のところ、「汝は誓つことができるか……」とかツツコミ//ビシリ満載の台詞にも反応する気がしない。

式は滞りなく進み披露宴へ、自分たちお手伝いの生徒はここでお開きだ。

はつあつ言つて今日も碌なことをしていなが……めげない。

だつて主「さつやとこタを探していぐぞ」……言えなくたつて泣かないし。

ちなみにその後の『外道なるタイダルウェイブ』と『仁義なきピーポハンマー』は別の物語……

原作準備編4～主人公は勝負に勝つて試合に負けるようだす（後書き）

実はクロノとハイミーの結婚式である必要性がないお話をした。

会ったのユーノだけですし…しかも挨拶のみ。

ちなみにヴァン神父とマー・ボーグ神父は中の人人が同じなので…

ちなみにクライド（クロノ父）も回りらしい。

そのネタを書きたかったが無理でした…

次回は原作2年ほど前のお話を予定中。

中々原作が見えてこない…

原作準備編5～主人公は超展開についていけないよ�です（前書き）

どうしてこうなった？

原作準備編5～主人公は超展開についていけないよ！

旧い結晶と無限の欲望が交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が甦る

使者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる

預言者の著書より

確かこんなんだつたつけ？

明らかに管理局がヤバイと思われる内容なのに、トップの好き嫌いで蔑ろにしていいものではないだろう……まあ今の段階では漠然とした管理局システムの崩壊程度しか読み取れないが。

大規模災害などに関しては的中率が高く、管理局や聖王教会からの信頼度はお墨付きなのにな。

新暦73年、春から夏に移り変わろうとしている季節のこと。

預言はさておき、カリムさんの紹介で文芸翻訳の仕事を少しだがやらせてもらっている。

なかなか大変だが……訂正、凄くハードだ。

正直、最初の依頼で朽ち果てかけたが、そこそここの評価を貰え、そのクライアントの紹介で別のクライアントから少量だが仕事をもらっている。

現在の仕事内容は主に古代ベルカの書物について、本質を失わない程度に面白可笑しくコメディチックな翻訳をしている……もちろんクライアントの依頼だが。

なんでも、正確な翻訳なら自分でできるが、あえて他人の意見（面白い解釈）を聞いてみたい、という考え方らしい。

なめてんのか？ そう思つたこともあつたが古代ベルカ語は正確な解釈の方が難しいので、こっちの方が性に合つている……気がする。

ちなみに評価はなぜか上々、クライアント曰く「娘たちが気に入っている、独創性があり（過ぎて）もはやマジキチ」らしい。

決して褒められてはいながらニン。

クライアント名は『オレンジ博士』……期待には全力で、か？

どーにでもなれ。

最終チェックが完了し、クライアントに送ったのが今朝方。
いわゆる完徹状態だ。

幸いにも今日の授業は午前で終った。

理由はなんだったか忘れたが……早く下校しようと叫んでいた気がする。

とりあえず図書室から借りていた本を返却して帰らうと思ったのだが、あまりの眠たれに少し仮眠をとつていいことにした。

20～30分程度でも睡眠をとるだけで大分違うのは実証済み、図書室隅っこでの立たないとこで仮眠を……おやすみなさい～～

「 そんな」とはあつませんーー。」

何か言い争うような声が聞こえて耳を覚ました。

時間を確認すると既に15時を回っていた。

「寝過ぎたしましたか……」

まあ帰つても今日は寝るつもつだつたので別にいいが……

とりあえず声がした方を見ると人影が……大人と子供?

片方は見たことがある、確か新任教師の糸田野郎だ。

確かに歴史が専門で良家の出だとかなんとか……どーでもいいが。

もう片方は……見覚えがない幼女だ。

碧銀の髪に虹彩異色オッドアイ……エリのオリ主だよー……って感じだ。

ミラジードでも虹彩異色は非常に珍しいのこ……

「 その解釈は正しくありませんよ~ まつたくこれだから子供
は……」

なんだかよくわからんが良い雰囲気ではないようだ。

てゆーか教師がそんな台詞を言つたな。

そのまま帰るのもアレなので、ついでに話を聞いてみるか……ス
ルーも辛いし。

「何をもめていらっしゃるのですか先生? それにそひうの子は?」

「ん? なんだ、まだ生徒が残つていましたか……今日は来年度入

「予定者の見学会で早く帰る予定の連絡があつたでしょ?」

「あ、やつにえはそつだつた……忘れていたのそれだつた。

「お恥ずかしい話ですが、疲れていて眠ってしまったようです。何やら喧いで争う声で田が覚めたので気になりました……」

「ならばさつと帰つなさい。本田の下校時間はいつも過ぎているのですよ」

「あらり、取り付く鳥もなこよ。

「ショーガない、じつちも切り出してみるか……

「ええ、帰りたいのは山々ですが少し気になりました……見学会といつ」とまじの子一人だけではないですね? もう時間が時間がすし、他の子は帰つているのかもしれないですが、女の子と二人きりで図書……」

「少し歴史について講義していただけです! 変な勘違いはやめていただけますか! ?」

「どうやらニュースは伝わつたりし! 」

「やつのですか? その割にはもめていたようですが……?」

「今度は幼女の方に尋ねてみる。

「やつ? 」Jの特徴的な髪と瞳の色についてどつかで見たよつた……

「……わたしが図書室を見ていきたいと頼んだんです。シクトウラの歴史について知りたかったので……」

幼女がそう答える。——「の年齢でシクトウラの歴史についてとはなかなかに深いなこの子……まあこれは聖王教会系列だから、古代ベルカ関連の本もたくさんある。

「ええ、そうです。それで案内をして少しばかり教鞭を振らせていただきましたね……まったく、この子は聖王と霸王の関係について間違った解釈していくましてね。ですから正しい歴史について教えていたのですが……」

「…………ですかから霸王と聖王は同じ時代で……」

何やら歴史うんぬんの考案でもめでているようだ。

でも確かに古代ベルカ諸王時代の話は……

「そもそも現代の歴史研究でも明確になつていらない事項では……？」

ギロリー。

2人に揃つて睨まれました……

どうやら2人には譲れない持論があるようだ。

2人の甲が『お前はどつちだ!』と語つていいる気がする。

「…………まあ私はどちらかといふと聖王と霸王の姉弟仲説ですね」

以前に回顧録を読んだことあるし……

「いいでしょ、ならば決着をつけましょう。聖王と霸王、どちらが優れた王であつたかを！」

えつ？ 何言つてゐるこの教師？

「わかりました。あなたに霸王の悲願を受け止められるかわかれませんがお相手いたします！」

ええ！？ この子も何言つてんの！？

てゆーか何この超展開！？

レッドクリム「ほら、あなたも行きますよ！ わたしたちの説が正しいと証明するんです！」 ドナドナアア～！

そう言つて幼女に引っ張られる自分……

なんだか（超展開な）厄介事に巻き込まれたようだ。

聖王マンセーな糸目教師（狂信者）VS霸王幼女（+主人公）

始まる……のか？

「ん？」

ふと目が覚め、時間を確認すると既に17時を回っていた。

「寝過ぎ」しましたか……」

まあ帰つても今日は寝るつもりだったので別にいいが……

「何か理不思議で超展開な夢を見ていたような……」

思ひ出せない……まあ夢つてよく忘れるし、気にするの」とでもないか……でもなぜだらうか? 体の節々が痛い気がする。

「ふああ~、早く帰る」とおもいますか……ん?』

よく見ると一冊の本が机の上に置いてあった。

「はあ、誰か知らないですか? ちゃんと片付けていって欲しいですね……」

そう呟きながら本棚に戻す。

「それにしてもシコトウラ戦記ですか……懐かしいですね」

背表紙を見て懐かしながら、時間が遅いのでさすと帰路について。

本に挟んでいたメモには氣づかず……

原作準備編5～主人公は超展開についていけないよ�です（後書き）

Vividまでいけたら語ります（笑）

原作準備編6～主人公は盗み聞こしてしまったようですが（前書き）

原作準備編では常に称号『時を駆ける男（笑）』が発動中！

おかげで時間が勝手に進んでおります。

原作準備編6～主人公は盗み聞こしてしまったようですが

マイナスも極端な値であれば『いつものこと』と思える。

何事も中途半端なほど扱い難く、大変だ。

いや、ホントにね……

新暦74年の春、無事に中等科に進学することができた。

これでようやく短パンからの卒業だ。

時が経つのはホントに早い……まるで時を駆けているようだ。

言ひえて妙だと思ったが気にしない。

今年に入つて聖王教会が保管するロストロゴニアが増えてきたので、
目録作成を再依頼された。

別にいいのだが……なんで他にやる人がいないんだひつ？

確かにやり甲斐はないが…… やれよ教会、 そう思つた私は悪くな
いだひつ。

今回は量が少なかつたので休日に無限書庫で徹夜し、 目録を完成
させた。

その足で聖王教会本部のカリムさんとのこりへ向かつ。

「依頼あつた目録の件ですが完了しましたので報告します……ふあ
あ……」

話している相手には申し訳ないが眠いものは仕方ない。

「あら、徹夜かしら？ 今日は午後からグラソング団長との稽古でし
ょう」

「うなのだ……どつかで仮眠をとらなければやつてられん。

「仕方ないわね、 横に仮眠室があるからそこを使いなさい。 その
調子では稽古にも身が入りませんしね」

珍しく優しいな、 と疑問に思いつつも睡眠欲には勝てず仮眠室を
借りることに……

仮眠室は執務室の隣であり、どちらかといつも執務室の付属部屋といった感じだ。

中に入ると眠気に拍車をかけるように簡易ではあるがベッドが設置してあった。

「……飛びこまん！」と思つたが、直感（偽）が警告を上げる。

なぜだかわからぬがベッドは危険といふ信号を発している。

まあベッドで眠ると時間までに起きられる自信がないので、仕方なくテスクに腕を枕代わりにして顔を伏せ眠ることにする。

「おやすみなさい……」

意識が朦朧としてきた中、そういえばここはカリムさんの執務室付属の仮眠室だと思いだした……ベッドも普段は……それをネタに……ああ意識が……

何気にカリムさんへの信頼感の強さ、眠りに落ちる寸前に思った

「……そーなんよ。お上は頭が固くてたまらんわ」

ふと、隣の執務室から話声が聞こえてきて耳を覚ます。

稽古の時間には……まだ余裕があるみつだ。

今出ていくのも躊躇われたので、どーしょーかと悩んでいると会話の続きを聞こえてきた。

「ええ、それでも試験的とはいって、新規部隊の発足を認めてくれたのだから……」

「それはわかってるんやけど……」

「Jの独特的イントネーション&l.;話し方は……もしかしてはやじさん?」

話の内容は六課のことについてだらうか?

「ゆーかこれって盗み聞きだよね……

「保有制限に関しては仕方ないわ。コマッターはあくまで裏ワザに過ぎなこもの」

「せやけどな……結局思つた通りにはいかんか……」

コマッター……六課メンバーについてか

「確かに偏り過ぎどるし、無理重つてるんはわかるんやけど……」

「……」

「 今日は相手の方が正論ですね」

「 なにが『戦力を遊ばせておいて、いざという時に全力を出せないなど言語道断！』や……正論な分辛いわあ～」

えつ？ もしかして裏ワザは認められなかつた？

「 その分、私やなのはちゃん、ヴィーダのリミッターは無いから、完全に詰んだわけではないけど……やつぱフュイトちゃんやシグナムがおらんのはな……新人もBランク程度を2人までしか獲れんし……」

ええええええ！！ 六課戦力に変更あり過ぎじやねえ！？

「 まあ、正式な事件となればロミッターのないフュイトちゃんやシグナムとも合同で調査に当たれるから、致命的なマイナスではないんやけど……」

そーなんだ……しかしながらこんな差異があるのだろうか？

「 仕方ないわ、正論は向こうにあり、しかも相手はアレクセイ・ディノイア閣下……海の英雄ですもの」

まい た け 政 権 か !?

まさかいたのか、セン＝ハラン星人……しかも海の英雄つて……

「 設立自体は賛成しているのだからポジティヴに考えないと」

「　夢の部隊が……」

「ひらり差異はロボンな鬼畜閣下のせこらしー。

コリッターといつ裏ワザが認められなかつたため、発足前にライ
トーング分隊の消滅が確定したよつだ。

「　現実は厳しいな……」

いやホントにね。

始まる前からひらじは語んでしまつてこる気がするのは私だけだ
わつか……

はやてさんが帰つた後、何食わぬ顔でカリムをここに礼をして稽古
に向ひ。

「ひらしたものでしょうか……」

正直な話、六課は原作より戦力不足だらう。

それが決定的なマイナスかといつと微妙だが……

自分にできる」と……戦力？……あり得ない。

原作時、ヒミツオやリタなら専門・得意分野でA A A～Sランクはありそだが、私は頑張つても総合でAランクくらいだろう……まあ限定期にならSランク相当の魔法も使えないことはないが……

管理局員の平均を考えると高いのだが……その程度のランクでJ-S事件に関わるには危険過ぎる。

本気で氷塊作戦でも考えようか、いつそのことロストロギアでも使って……でも調べたらアレって『限りなく黒に近いグレーな魔法なんだよね……ロストロギアも基本的にアウトだろうし……周囲の被害も甚大じやないだろ？』……

「どうあえず今日こそはヒゲを燃やしてやりますか」

考へてもすぐ口答えなど出ない。

楽観的だが、今はJ-Sヒゲに集中しよう。

……原作まであと一年。

原作準備編6～主人公は盗み聞きしてしまったようですが（後書き）

別の黒幕（と思われる人物）が出現しました。

次回もまだ原作前のお話です。

（多分原作時間まであと1～2話です）

積ゲーがハンパないのでしばらくはそつちに集中するかも…です。

原作準備編7～主人公は男同士で語り合つります（前書き）

会話がメインなお話。

割とまじめ？ と見せかけて：

原作準備編7～主人公は男同士で語り合つります

結論、様子見。

あまり悩み過ぎるとゲシュタルトがマッハだったの切り上げた。

新暦74年の8月のこと。

とうとうバイク免許を取得することができた。

12歳でOKなのかは激しく疑問だったが……

まあ転倒防止のための非常用オートジャイロや衝突時の防護フィールド発生装置が搭載されており、かなり安全な仕様らしい。

せっかく免許を取得したのにバイクがないというのは悲しいので、バイクに詳しいと思われるヴァイスさんに相談したところ……

「おっ、もう免許をとっちゃったのか……しかも自分のバイクだとガキのクセに生意気だな～おい」

そりゃあね、12歳のガキが自分のバイクなんて生意氣そのもの

だろうが……

「まつ、俺もガキのころから単車いじってるからな……いいぜ、俺の中古を格安で譲つてやるよ」

なんでもヴァイスさん新車購入予定があるようで、中古を格安で譲ってくれるとのこと。

「とりあえず走ってみてからだな。よし、今度ツーリングに行くぞ。予定空けとけよ?」

ちなみに妥当でリーズナブルな値段でした。

翻訳と田録作りで稼いだ額の半分近く持つていかれた……まつ、もう半分は免許取得の際、既に消えていたが……おかげで残高が……

次の休日の昼前、予定通りヴァイスさんとバイクの見定めを兼ねツーリングへ。

くだん
件のバイクは黒がメインのビビッドな感じでシングルなイメージだった。

個人的には見た目だけで80点以上はあげられる、といったところだ。

ちなみにヴァイスさんのバイクは赤がメインの新車だったがな……

…多分だけじゅりか！」に突入するやつだと思われる。

ヴァイスのバイクはティアナのモノ、ティアナのバイクはティアナのモノ、そんなフレーズが一瞬頭をよぎった……「うん、さつと気のせいだな。

「おう、きたか。さつさと用意しな。すぐこでるぜー。」

ヴァイスさんも新車が楽しみなのかノリノリだ。

まあ私も同じ気分なので、ヴァイスさんの言葉に従い準備する。

「これより私は風になります」

ドキがムネムネしたきたぜ！－

ヒヤツハー！　と叫びたくなる気持ちがほんの少しだけわかつた
気がした。

「少しばかりはしゃぎ過ぎたみたいですね……」

「だな、だがいいもんだろバイクは？」

1時間ほど走ったところでドライブインと思われるところがあつたため、食事も兼ね休憩に立ち寄つた。

軽食を済ませ、食後のコーヒーで一休み、ヴァイスさんがバイクの感想を求めてきた。

「どうだったアイツは？」

「気に入りました。流石はヴァイスさんがチューニングしていたバイクですね」

「当たり前だろ？ どれだけ費やした愛車だったと思つんだ？」

まあ、あなたはそれを売るつもりしているじゃないですか……

「一話で……よろしくでしようか？」

「おひ、商談成立だな」

しかも面倒な手続きせいやつてくれるとのこと。

ペロコーンー

【ヴァイスのバイク（中古）】を手に入れました！

そんなフレーズが聞こえた気がした……

そしてツーリングを再開し……時刻は夕方。

最初の場所まで戻つてきて、ヴァイスさんがバイクの調整を行つてくれている。

今日の走りのデータより私に合わせセッティングしてくれるとのこと。

何気にデバイスでデータを取つていたらしい。

やるなストームレイダー…… さすがはインテリ型。

ヴァイスさんが調整している間にバイクから離れ、朱色に染まつた空を眺める。

今日は楽しかった。

そんな日々が續けばいい…… でも

「……………そんなに樂觀視はできないんですよね」

あれから自分はどうするべきなのか考えた…… その結果は……

「……………に黄痴なんだ? 顔に悩んでますー つて書いてあるが」

おひと、調整が終わつたであろうか? ヴァイスさんが缶コーヒーを両

手に、そして片方を私に投げながら話しかけてきた。

「うーん、ポーカーフェイスには自信があつたんだけど……

「まつそれでも飲んどきな。あんまり悩んでるとおつかなくなんねーぞツルペタ?」

もともとねーよ。

「すみませんね、朝に『悩みの多い人には見えないマジック』で書いてきてしまつて……」

「なんだ皮肉か? 僕がノーテンキな奴つて

皮肉に対して皮肉で返しただけだ。

「俺にもでつかい悩みがあるつづーの。まつ、それで? 何悩んでんだ?」

「いえ……結論は出でこます。結局はしじみへ様子見です

考えた結論だ。

「なんだかわからんがえらく消極的だな。もつといつ……俺がやつてやる! つてのはないのかよ?」

「ないです。そもそも不確定要素があすきて……当事者になると最悪を招きかねないですから」

キャロの件とかは微妙だが、少なくとも六課コリッターの件につ

いて自分は関係ないだろ？

つまり、関わらなくても世界は最初から原作通りではないといふこと。

まあ変な生物^{ハグ}が出てきた時点で既にアレだったが……

「まあアレだ。やらないこで後悔するより、やつて後悔した方がいいんじゃないのか？ まつキレイゴトだとは思つがな」

「もつともだが……

「 頑張った結果がバッドエンドでは嫌ですか？」

「何事も報われるわけではない、そんな世界だから……

「はあ、好きにすればいいんじやないか？ 僕としてはラグナさえ泣かせなければ

文句は……最小限にとどめてやる」

この人、地味にシスコンだつた……まあこくら様子見とはいへ、最悪起こすつもりはないし、いやとこつ時は動く覚悟も……つて結局は文句を言つのかよ！

まつたく……文句を言われないように頑張りますか。

「 セウですね、ヴァイスさんに文句を言われない程度には頑張るとしましょうか……とにかく、ヴァイスさんの『でつかい悩み』というのはなんなのですか？」

せつかくなので切り返して尋ねておく。

「ん? ああ……いや、その……なんだ……アレだ……」

えらく歯切れが悪いな、そつ思いながら缶コーヒーを飲み……

「 実は今度……結婚するんだ」

吹き出した。

うん、この世界はなかなかに力オスだ……改めてそつ思った瞬間
だった。

原作準備編7～主人公は男同士で語り合つようですが（後書き）

世界が変わつても歩く死亡フラグ男は変わらず…

とりあえず積みゲーは準備編が終わつてから消化します。

ちなみに準備編は次がラスト…

原作準備編8～主人公は覚悟を決めるようす（前書き）

原作準備編ラスト…

最初の予定から3回は書き直して、結局別の話になりました（笑）

原作準備編8～主人公は覚悟を決めるよひです

「俺、今度の新部隊への出向任務が終わったら結婚するんだ……」

その後、彼の行方を知る者は誰もいなかつた……

……ならばいつそ先に入院させておこうか？

そう考えた私はだいぶ焦っていたんだと思つ。

新暦75年、冬も終わりを告げ、春の足音がヒタヒタと聞こえて
きそうな2月のこと。

時刻は酉過ぎ、場所は聖王教会本部中庭にある噴水前。

着崩した黒いYシャツに赤いネクタイ、黒のスラックスといつもより（ちょっぴり）決めた格好で佇んでいる自分。^{わたし}

なんでこんな恰好& amp; 場所にいるかといつと……

「お・ま・た・せ もしかして待つたあ～？」

「……イイエ、イマキタト『ロクトス』

「これだけ聞けばまるで『一ノ』の待ち合わせのようだが……

「もうっ！ この子たちあ～ ちやんと待ち合わせの常套句をわかってるじゃない～お母さん嬉しいわ～」

待ち合わせの相手はお母様だ。

「じゃあ早速行きましょう～」

「……ハイ逝キマショウカ」

そう言いながらノリノリで腕を組んできた……

唯一の救いは意外と年相応の落ち着いた恰好であったこと…… 唯一の動はアレだが。

なぜこうなったかといふと数日前に遡る……

「この事件の」とやヴァイスさんの死亡フラグ発言、カリムさんの
……まあ、色々な件で悩んでいたある日のこと。

「 リース！ 今度お母さんと一緒にデートするわよ 」

「 ……はい？」

お母様がいきなりそう宣言した。

「 だつて最近は難しい顔ばかりしているし……それに2人でお出かけなんて数えるほどしかないじゃない！！ お母さんも寂しいのよ～ハツ！！ もしかしてこれが反抗期なのかしら！？ ど～しましょ～… ウチの子がグレ……」

「別にグレでませんからー ただ色々と考え事といつか……」

「じゃあ決定ね 今度の休日にしましそうか、場所は……」

……流されました。

それよりも【検閲削除】歳で（キラッ）はやめてホシい……星
なだけ】。

さぶつー

まあ結局いつも通り流されただけなんだがな！！

「この服なんてワースに似合うかも～試着してみない？」

「しません」

現在、絶賛ウインンドウショッピングしている。

てゆーかそれレディースやん……

「もう一つ似合つたのに～

お母様とは顔立ちこそ似てはいるが、髪色も瞳の色も異なるため、ギリギリ親子として見えるようだ。

てゆーかこの世界は妙齢の婦人が多すぎるというか……お母様も未だ20代前半くらいにしか見えない……

「せっかくカツコイんだから可愛い恰好しないと損だぞ～」

その理論は変だろ？

「仕方ないか、じゃあ次行くわよ～」

はあ、先が思いやられる……

それから2時間後……

さすがに歩き疲れたので休憩を兼ね喫茶店へ。

こつぞやの新作スイーツを食べ損ねたお店だ。

あの時と同じように紅茶を飲んで一息つく。

「いっぱい見てまわったわね～ でも一着くらい買ってもよかつたのに……リースも遠慮ばかりじゃダメよ～」

全部レディースだったらうがーー！

「はあ、疲れました……」

正直な感想だ……

「あら？ そんなんじゃ『これ』という時にダメダメよ～ もつとこうつ全てを許容できる『トカイ器を持たないと、お母さんとお父さんなんてね……』

昔話といつかノロケが始まった……マジ勘弁して下さい。

「……それでね、あの人つたら……って、聞いているのリース？」

聞いていません。

「まつたく……」

注文していたパフュームがきたので一旦ノロケ話は切り上げ……

「それで？ アペリスは何を悩んでいるの？」

真剣な顔でお母様が訪ねてきた……ただし口元にクリームをつけ
て。

なんか色々と台なしだった……

「将来の不安といつか……まあ思春期なりではの漠然とした悩みで
すよ」

そうテキトーに言つておぐ。

「厨一病つてヤツね

「

そ れ は 断 じ て 違 う ！ ！

「 大丈夫 ! 黒歴史も大きくなれば笑い事よ 」

大 人 に な つ て 思 い 出 し た ら イタ 過 ぎ る わ ! !

「 は あ 、 も う い い で す …… 」

そ も ソ も 答 え な ん て な い 「 こ と 」 に 悩 ん で いる ん だ し ……

「 自 分 の 思 つ た よ う に 生 き れ ば い い …… 後 悔 し た つ て い い の …… だ つ て そ れ は あ な た 自 身 が 選 ん だ 未 来 の だ か ら 」

ふ い に お 母 様 が そ う 呟 いた。

「 た だ 、 疲 れ た ら 帰 つ て き な さい ? 抱 き し め て 話 を 聞 い て あ
げ る か ら 」

「

言 葉 が 出 な か つ た …… そ も そ も 何 て 返 せ ば い い か も わ か ら な い 。

た だ ……

「 お 母 様 …… 」

「 な ～ に ？ 」

「どうして私のパフュームまで食べているのですか？」

最後まで口なしだつた……

休憩後も引き続きショッピング。

ただし、先ほどより心なしか軽やかに感じる。

時と空を隔てた世界でも母親とこいつは……なのかな？

時刻もだいぶ遅かったので夕食も済ませ、帰路につく。

「今日は楽しかったわ～　リースも楽しめたかしら？」

「ええ、ただし少しばかり疲れましたが……」

今日は久々に母子水入らずの時間を過ごせた。

実際に問題は解決していないし、案のひとつも浮かんでいない状態だが不思議と穏やかな気分だった。

「もう～そんなんじゃダメよ～　こいつがリースの隣で歩く子のためにもね」

それまではお母さんが隣をもらうつわね、と言しながら腕を組んで

きた。

いつの間にか並んだ身長。

それだけ時間が流れたという証拠だ。

それも1年後には一気に追い抜かしているだらう。

1年か……追い抜かすのが先か、世界が滅びるのが先か。

そればかりはわからない。

事件に関わって自分のせいでバッドエンドなんて結末はもちろん嫌だ。

でも……

「せっかく、後押しをもらつたのだから……裏方、やつてやりますか」

「ん、何か言つた？」

「いいえ、ただ……今日は楽しかつたと、それだけですよ

これから先もこんな穏やかな日々を過ごせるように……もう、小さく決意をした春の日の夜のこと。

原作開始まであと僅か……

すっかり忘れ去られていた父さんとハクの夕食はカップ麺と缶詰
だったらしい……

スマン……

ピロリーン！

【脇腋下影で頑張る主人公】の称号を得ました！

ピロリーン！

【オバーリミッツ
【OVL】】を習得しました！

原作準備編8～主人公は覚悟を決めるようやす（後書き）

次回からはよつやくS+原作時間へ

しばらくは予定通り積みゲー消化に励むので遅れるかも：

主人公設定（原作開始時点）（前書き）

久々に追加しました

主人公設定（原作開始時点）

主人公設定（原作開始時点）

名前 : アペリス・ウラノ

愛称 : リース（母親命名）

性別 : 男

生年月日 : 新暦 63 年

出身地 : ベルカ自治領ミッドチルダ

容姿 : 腰まで届く金髪、アメジストの瞳、ツルペタ（笑）、身長は 150 cm 程度

家族構成：父（父さん）と母（お母様）の3人暮らし

魔力資質：先天的 A A ランク（現在値 A A A 程度）

才能 : 器用貧乏 + ふち不幸体質（魔導師ランク的には総合 A くらい）

備考 : ハク（ハクリュー）を飼っています 最近は空氣感が激しい

原作知識 : アニメ版 Strikers まで、Vivid & ; Force は知らない

現在所属 : St . ヒルデ 魔法学院 中等科 2 年

取得資格 : 無限書庫司書、B 級 遺失物管理主任者

初級魔法インストラクター、バイク免許

称号（詳しい内容は各本編冒頭で）

【かけだしトレーナー】

【甲種準一級フラグ建築士】

【初めての弾幕ごっこ】

【魔法使い始めました】

【オリ主候補生】

【時を駆ける男（笑）】

【オリ主属性】

【元ラスボスの弟子】

【もしかして脇役？】

【略してオリ主】

【魂のセカンドステージ】

【脇y…影で頑張る主人公】

技能
スキル

【マルチタスク（4分割超高速思考）】

・読んで字の如く並列超高速思考

【なんちゃつて断罪の剣】 【断罪の剣】・【絶氷の剣】

・電気と冷気を纏つた魔力刃

【ポーカーフェイス】

・ただのハッタリ……最近はサトラレ氣味

【なんちゃつてぜつたいれいど】 【アブソリュート・ゼロ】

・絶対零度の空間凍結魔法（やたら寒い）、魔力消費もやたら凄い

【なんちゃつてインディグネイション】 【インディグネイション】

・撃つていいのは撃たれる覚悟のある人だけ、現在トラウマなため
使用不能

【KYY（偽）】 【直感（偽）】

・（ヤヴィアイフラグのみ）未来予知できる（必ずしも回避できる
わけではない）

【基礎魔法一式】

- ・治療、結界、弾幕等の基礎魔法

【なんぢやつてアストラルベルト】 【アストラルベルト】
・近接用の魔力刃による屈合い、高速の薙ぎ払い

【ピコハン】

- ・ヒートすると気絶せることができるシャルティ工直伝不殺の奥義
- ・右手に断罪の剣、左手に絶氷の剣……合体！
- 対象を完全氷結させます（笑）

【セルシウスキャリバー（仮）】

- ・感情とか魔力とかストレスなどが溜まると発動する無敵状態（笑）
- おそらく秘奥義とか出せます
- 凹んだ人のポーズや土下座に見えるのは氣のせい

デバイス

【セイクリッド・スカイ・ファンダム】

種類
　：ブーストデバイス（AIは搭載していない）

待機形状：レイハさんと一緒に

戦闘形状：翼をイメージした短剣と『バリアジャケットは黒ス

ツに新調しました

所有能力：大気中の『水分』と『温度』を操作できる（らしい）

使用魔法：『インディグネイション』『アブソリュート・ゼロ』

『各種ブースト』『物質透過跳躍魔法』など

主人公設定（原作開始時点）（後書き）

さて、これで「今まで暗躍できるのやいり…

原作時間軸～protologue（前書き）

とりあえずゲーム1本だけクリア…

合間に縫つて書いていきたいと思います（笑）

原作時間軸／prologue

【脇y…影で頑張る主人公】

説明：舞台裏に徹する者に与えられる称号

条件：脇y…影で頑張ることを決意した

効果：全ステータス

影の薄さ

OVLが使用可能！

備考：OVLの「j」利用は計画的に！

ピロリーン！

以下略！

ちやんと言えよ！？

私つて意外と幸せ者なんじゃないかって時々思つんだ。

家庭環境は良好だし、学院生活も悪くない。

ちょっと（？）大変なトラブルもあるけど、それもまた経験だ。

自分の糧としてきっと将来に活きてくるだろう。

うん、なかなか贅沢者です。

それじゃあ今日も張り切つて逝きましょうか！

魔法厨＝リリカル・まじか「気は済んだ？」……始まりません。

「いつまでも現実逃避してるとんじやないわよ」

したくもなるわ……

「せつと行くわよ、はあ、日が暮れる前には寝床くらい確保したいわね」

それはともかく……

「……………」

「……………」

もつイヤ…………（ーー）

新暦75年5月、そろそろiTunes原作時間軸に入ったところだらうか？

以前にお母様より後押しをもらつたので、自分にも出来そうなこ

とを色々と考えてみた。

もちろん六課が事件を片付けてくれるのがベストだとは思つが、最悪だけはならないよう保険は欲しい。

つまり『聖王のゆりかご』だけは破壊か停止手段が欲しい、という考え方だ。

三脳はむしろ滅んでしまえ。

地上本部は……一旦再構成した方が良いのかもね。

我ながら酷いHゴだ……

だけどこの世界にとつては意外と好機なかもしれない。

「……言わば劇薬ですか……よつ良い未来のための」

「……で悩んでも仕方無い。」

事件が終わってから……たくさん悩むことにしよう。

それから、件の『聖王のゆりかご』を止める方法としていくつか検討してみた。

最悪をイメージしてこるため『聖王のゆりかご』は起動する」と

が大前提な案だが……

まあ、起動せずに終わらせられればベストなんだけどね。

以前の氷塊（案）は、周囲の環境への被害も大きく、許可も大変
……事後申請でいけるものではない。

というわけで保留。

次の案を検討し、多少内容をぼかしてリタに相談した。

なぜリタに相談したかと言うと、ヴァン師匠せんせいやヒュー君さんでは事態が大きく成りかねないからだ。

決して出番が少なかつたからというわけではない……あくまで水面化、最悪の場合を想定しているため……と思う。

「 できるんじゃない？ まあ現物があればベストだけど……」

そこは『勘弁……てゆーかそんな権限はない。

まあ、こひそり入手できれば……それも難しいな。

「……いいわ、あたしも多少思うところがあるから、この件やつて
やるわ」

別に検討した案が使えるものか相談しただけなのだが……

「べつ、別にあんたの為じゃないんだからねー、これはあたしも気になつたことであつて……」

はいはいシンデレラシンデレ（笑）

なかなかに心強い味方ができたようだ。

リタ曰く「もあれば試作機を作れるとのこと。

ただし質と安全を気にしなければ、ヒーハーり付け加えて。

そして3日後、リタから呼び出しがあった。

実験で使つたま、低レベルでいいのでロストロギアをかつぱりつてこことのこと。

ムチャ言つなよ……まあ教会から正規手段で借りる」とができたが。

さうこう時に資格とか案外役立つものだ、そんなことを考えながら

「リウマが……」

研究棟消滅事件いっぱい魔の研究室へ。

頑張るわ……

「来たわね」

ドアを開けるにはなかなか勇気が必要だつたがな。

「じゃ早速始めるわ、持ってきたロストロギアはそのケースに入れて」

指示された通りに準備を手伝つ。

「……最後、部屋全体に結界。まつ、なーとは思ひけど一応ね

部屋全体に結界まで？ リタにしては慎重だな。

「やるわよ……」

実験は対象ロストロギア（エネルギー結晶）への干渉が目的だ。

これはレリックに外部から強制的に干渉して、止めるなり破壊するなりできなか考えた結果だ。

「これができるば聖王化自体を止められるし、最悪は内部からボン！だ。

魔力ダメージで内部から取り出して破壊しているシーンを思い出して考えついた案だ。

まつ、あくまで『案』に過ぎないが……この事件はレリックから始まつたのだからレリックで終わらせてやるのが乙といつもの。

そのためには現物のレリックがあればベストなのだが……さすがに無理。

ヒューネで代替のエネルギー結晶型（極弱）のロストロギアで実験している。

「……今のところは問題なし、さて……」

なんかフラグを建てそつな台詞だな。

んつ？ なんか紅くなつてきた？ しかもかなり光を発している。

「大丈夫、それは想定の範囲内……実験自体は概ね成功よ」

モーマンタイ
無問題らしい……どうやら実験は成功……えつ？

ロストロギアが急に青白くかなりの光量で発光し出した！－

「リタ！ これは！？」

「これも実験の一部！？」 そう訊ねたら……

「……失敗ね、なんか別のロストロギアに干渉したみたい」

「……それって大丈夫……なわけないですよねええ！？」

2人揃つて青白い光に呑まれ……田を開けるとそこは……

見知らぬ森、いや山の中でした。

「…………」

「………… わあ へー」

そして冒頭に至る。

どうやら干渉した謎のロストロギアによつて異世界に飛ばされた
ようだ。

なぜ異世界かといつとリタ曰く、空氣中の魔力素が低く該当する
管理世界がないといつこと、ヒュー『さん作のキチガイ通信ができる
ない』といつ点からだ。

まあ魔力素が無いわけではないが、適正値より低いため魔力回復
は時間がかかるかも、らしい。

魔法の運用も慎重にしないといけない。

もし魔法圏の世界でなければ更に厄介だ。

「それにしても一体、何に干渉したんでしょうか?」

もしかしてレリック……？ それはヤヴァアイよね、主にガジヒツトが。

「はあ、コレね、とつあえず封印するわ」

そう言つてリタが足元にあつたロストロギア（仮）を拾つて見せて……

「えつ？ ちよ、ちよっと見て下せ」

「今封印するから待ちなさいーー！」

怒鳴られた……それよりも気になつたのはリタが持つてゐるロス
トロギア（仮）、植物の種子のような形狀の青い宝石だつた。

これって……もしかして

「封印完了、ハイビーぞ」

リタから渡された宝石には番号が書いてあつた『05』と。

「エネルギー結晶型のロストロギアね……それもかなり強力な」

「ジュエルシード?」

一体全体、何がどーなつてゐるのさ?

こうして私のリリカル・まじカオスな物語が幕を開けた。

原作時間軸／prologue（後書き）

ようやく幕開け…

ただしオリジナル展開が続きます。

原作時間軸へ神でもがこないなり、お猫さまを崇めねばいいじゃない（前書き）

Amazonでまたゲーム（2本）を買ってしまった（今日届く予定）

積みゲーばかり増えていく…

もううんプレイはしますけど

原作時間軸へ神さまがいないなり、お猶れもを禁めねばいーじゃない

100と101は大して差がないように見える。

だがそれが0と1になると明確な差が見えてくる。

『ある』か『ない』か。

『経験がない』か『経験がある』か。

失敗は成功の母、といつ言葉を聞いたことがあるだひつ。

失敗、マイナスの経験は次に活きてくる、活かすことができる。

無駄なことなんて……意味のないことなんてない。

だからこそ「もういい?」……もうちょっと時間が欲しいです。

「ハイハイ、タイムオーバー。だいたい人生における失敗なんて学んだところで大抵の場合やり直せないでしょ?」

人がポジティヴに考えてこるのでに容赦なく蹴り碎いてくれますね。

「まつ、実験における試行錯誤は価値あるけど」

何事も経験だ! とはよく耳つよ……

誰か助けて……ぐすん。

とりあえず現状確認。

リタの研究室で実験 失敗、何かに干渉・転移 どつかの異世界
そしてジュエルシード。

ジュエルシードの件は一旦保留にしておく。

まずは……

「一回、空から見ましょ？　上にいても埒あかないし」

「やつですね、一応認識阻害もしておきましょつか」

魔法圏の世界ではなぞうだし。

空に上がる……自分で……

魔力の節約、とは言っていたが高いところが苦手なのだろうか？

そうなるとT・M事件の時つて……いや、本人が言わないのなら
それはそれでいい。

ちょっと改めて感謝を……まったくシンデレなんだから。

まあそれはさておき、上から見えたものは……

「……海、それに割と近代的な都市……いえ、街かしら?」

サーチャーで見ているリタがそう呟く……てか、初めからそーすれば良かつたじゃん!?

無駄に魔力を消費してしまった……

「とりあえず文明は進んでいるように見えますし、行ってみましょうか? いきなり取つて食われることはないでしょ? ……多分」

「……にしても仕方ないし。

「はあ、めんぢくせ……仕方ないか

息のできる場所であつただけ良しとしよつ。

「……着替えた方がいいわね。制服だと補導されやすいし

確かに2人とも今はシテ・ビルデ魔法学院中等科の制服だ。

先刻までは学院にいたんだし当たり前だが。

「……何驚いた顔してんのよ?」

「いえ、リタにしては至極まともな意見だと……」

「失礼ね! まつ、以前に徹夜明けの休日朝帰りで補導されたの、そーいうとコレも経験が成せる業ね^{ワガ}」

何やつてんだか……とは言つたものの……

「着替えなんてないですよ？ 精々バリアジャケットくらいなもの
です」

その場合は常時魔力を食うので、魔力素が適正値ではない場所での長時間使用は却下だ。

何か案でもあるのか？ そう尋ねる。

「何着かデバイスに収納してるわ。いちいち着替えるの面倒だし」

リタの私服なんて今まで見たことないのだが……

「たつ、たまにキャロと買い物に行つた時に買つてるのよ……
着てないけど」

「あんたが着れそなの貸してあげる、着替えたたらさつまと行くわ
よ」

「あんたが着れそなの貸してあげる、着替えたたらさつまと行くわ
よ」

「あんたが着れそなの貸してあげる、着替えたたらさつまと行くわ
よ」

「あんたが着れそなの貸してあげる、着替えたたらさつまと行くわ
よ」

「あんたが着れそなの貸してあげる、着替えたたらさつまと行くわ
よ」

「あんたが着れそなの貸してあげる、着替えたたらさつまと行くわ
よ」

てゆーかね」みみと尻尾（+前掛け）は外しなさい。

別の意味で補導されてしまつ……

背に腹は代えられず、借りた服に着替へ下山する。

私は空を飛んで、リタは短距離転移魔法で……お前さつき魔力の節約つて言つて空飛ばなかつたクセに……転移の方が魔力を食うだろ？

さておき、無事下山できたので街に入ることにする。

「 何ここ？ 街に入った途端に魔力素が適正値になつた……」

私も同感、街に入つて最初の感想だ。

魔力素は空気中に含まれるもの……なので急激な変化はおかしい。

「あの山がおかしかつた……いえ、あたしたちの転送反応になんらかのアクションもなかつた、ここは魔法圏の世界じゃない……ならアレくらいが普通のハズ、つまり……」

「 この街がおかしいかもしれない、つてことでしょうか？」

リタの言葉にそう続ける。

「……やつね。思い過ごしてある」と祈るわ

少しコタツりしきれない台詞だ……はあ、一体どんな魔窟なんだか……

そんな思いとは裏腹に街中を探索。

見た感じはヨーロッパの都市とあまり遜色はない……てゆーか

「日本じゃないですか」

うん、どうやら日本っぽいだ。

「ヨンベー」で北海道や沖縄と書いた旅行雑誌があつたし。

見た目が外人なのでちょっとびり奇異な田で見られたが。

だが肝心の県や都市名がわからない……あんまりそういうのが書いてないのだ。

コンビニも 町店とかは書いてあるのだが……道路標識も知らない名称しか書いていなかった。

まあそれがわかつたところどうしようもないが……

時刻は既に夕方、歩き疲れたので公園のベンチで休憩中……もつ
無印のよう^ト無差別での広域念話を試してみようか?

どのみち望み薄だが……

「はあ、ロレがどこかわからな^イし、お金な^いし、ソシ出せない
し……翻訳魔法があるから言葉くら^いは通じるけど字が読めないし
……最悪ね、あんたもそー思わない?」

リタは公園で見つけた子猫に話かけてくる。

「「」や「」や「」や「」……」

「そつか、あんたも迷子なんだ[〜]」

えつ? 会話できてるの?

「「」や「」や「」……」

「ホント世知辛^ト世の中よ^ね~

ツツコ^トを入れたら負けだ……

「「」や「」や「」……」

「えつ銅^ト主^トきたの?」

シシ「//せ負け。

そんな葛藤をしてこの子猫の飼い主らしき女性が、じかんへ走つてきた。

子猫も女性に向つて走つていいく。

「一さんせん」

「こんなところに……もう心配したんだよ？」

はあ、無事に見つかってなによりです。

「えっ？あの子がかまつてくれたから寂しくなかつた？」そつか
じゃあお礼しないとね」

「へへへん。」

「えつあの子たちも迷子なの？」

……もう負けていいかな？

「……あせらぢるか？」

「ええ！？ 異世界からの迷子なの！？」

ええい！？ 一体どーなつてるんだ！？

特に最後の『みやー』はなんだ！？ なんで最後だけ『みやー』なんだ！？

「 いのちのいと、ありがとうございました……あつ言葉は通じるのかな？」

子猫との会話を終えた女性……お姉さんがこちらを向いて話しかけてきた。

「 ……そのことは特に何もしてないわ、ただちょっと話してただけよ」

そう、子猫に関しては別に何もしていないんだが……えつ？ ホントに会話してたの！？

「それでその……あなたたちは異世界からの……」

えつ？ 信じるの？ いじつて魔法圏の世界じゃないでしょ？ てゆーかお姉さんもなんで普通に猫と会話してるのー？

そんな心情を無視するようにお姉さんは続ける。

「 異世界からの……『魔導師』なんですか？」

……魔導師、魔法使いとかではなく魔導師とハッキリ言った。

つまりこの人は……

「 ええ、転送事故でここにきてしまった魔導師よ。逆に尋ねるわ、ここは魔法圏の世界じゃないハズ……どうして『魔導師』とい

「単語が出てきたわけ？」

魔法、異世界についてある程度知識がある人……！」

「えっと、友達が魔導師でミシードチルダについて……」

「え？ 日本で魔導師、ミシードチルダ、さらにジュエルシードといつ因果律を考えると……」

「いやーーー！」

そして猫……まさかこの女性は……^{ひど}

「あつそうだね。わたしは月村すずか、あなたたちのお名前を聞いてもいい？」

……「やんすと？」

とゆーことは……」「海鳴市？」

……」「都合主義万歳。

ひとつあえずはお猫さまに感謝を……」「やーメン

「みやーーー！」

原作時間軸へ神さまがいないなり、お猫さまを崇めねばいいじゃない（後書き）

海鳴市は魔窟…といひハ的に。

むしろ猫ネタが書きたかつただけ（笑）

なんとか連絡手段をゲット！

そして…サウンドステージへ

原作時間軸へ世界はいつだって…こんなハズじやないじばっかりです（前書き）

久し振りにリリカルなのは（原作）をプレイしました。

感想：泣けた（感動的な意味で）

思つたのですが『なのちゃん』と『なのはさん』は完璧に別人ですね…

ギャップが激しそぎました…

あとイデアシードって厨一な黒歴史集めれば良かつたんじゃないだろ？

多分みんな喜んで分けてくれるよ。

ヒヅクンとは比べ物にならない災害を引き起しそうだが（笑）

原作時間軸へ世界はいつだって……こんなハズじゃないことはっかりです

並列世界に来たら……まず何を確認するだろう?

歴史? 政治? それとも文化?

なんにせよ、共通して言えるのは『差異』を探すことだ。

まあ調べてみたいことは色々あるが、私が最も気になるとこりと言えば……原作知識にある場所とか『昔』の記憶にある景色……だらうか。

「の世界は「やめときなきこと」

「これは師の受け売りだけど……『個人が一生で知りうることなどたかが知れている、ならばどう行動すべきか自ずと見えて』ことよつてね」

そういうふうのことだらう。なんでも出来ると思つていた時代は。

「だから一時的にしか関わらない世界に肩入れなんてしない……思い入れが強いと後悔するだけ」

そういうふうからだらう。人間の可能性が有限だと思い知ったのは。

「目的があるけど時間は少ない。なら寄り道は不要……やつでしょ？」

「至極まともな意見だ……だからこそ訊ねたい。

「その本はなんですか？」

『ネコネコ大百科』これであなたも猫マスター！ やん（¥2,500 + 消費税）』

「…………」

……台無しだった。

世界単位の迷子になすすべもなく、とりあえず案内されたのが……

「……喫茶店？ なんて読むの？」

「あ～『翠屋』かと……」

魔王……じゃなかった、なのはやんの両親が経営している喫茶店『翠屋』。

「どうしても魔王イメージが抜けないな……『仮をつけないと』

「中止するハイミツをもつて、二人に相談してみて、先に電話で話

してあるから……」「あんな、一緒に歩いてあげたいところだけ店
内に動物はダメだから……」

「いえ、あつがとくればこました。正直、右も左もわからない状態
でしたから……」

「あなたも……もう迷子になるんじゃないかな?」

「いやいやー、いやーん……やー」

「ほこせー、気をつけろわ……じやあね

……もつまじなことひきつけ。

「うそ、この子の」とあつがとく……じやあね

「いやーん

もう重つてかわいいお猫さまが去つて行つた。

「じゃ、やつれと行くわよ

もう重つて扉を開ける……やつれ何か緊張してきた。

「こりしゃいませー あつ、可憐なごお嬢さま ……日本

語は大丈夫かな?

Can you speak Japanese?」

店内に入ると、ウエイトレスらしき『眼鏡・黒髪・おせげ』の3点が揃つたお姉さんに声をかけられた。

多分、なのはさんの姉（正確には従姉妹）の美由希さんだひつ。

日本語が大丈夫かと言われたら……微妙だな。

多分、翻訳魔法なしで話したら発音がスゴイーになりそり……あとで試してみよう。

「あつ來たね～ 美由希ちゃん～ その子～あたしのお密さんなの～」

奥の席から声がかけられた。

確か3年ぶりくらいだろうか……直接話したことないがエイミイさん本人だろ？

「エイミイの？ ふむむう、何か飲み物はいる？」

「ん～じゃあ紅茶2人分追加で～」

「かしこまりました～ じゃあ案内するね」

2人つて確かに同じ年くらいだっけ？

そんなことを思いながら案内された奥のテーブルでエイミイさんと向き合つ。

「え~と初めまして、エイミー・ハラオウンです。すずかちゃんから連絡もらってるけど2人とも『漂流者』ってことでいいのかな?」

「……やつよ、転送事故でこの街の近くの山中にね」

本当はロストロギアを使用したのだが……それを話したらややこしくなりそうなので黙つておこう、と事前にリタと相談しておいたため転送事故ということにしておる。

それにジューエルシードの件は正直きな臭い……なので管理局より先に教会側に相談する予定だ。

ついでに実験の件をもみ消してくれたら万々歳なのだが……

「なになにエイミー?」Jの子たち『魔導師』なの?」

そう言いながら紅茶を持った美由希さんが現れ、私たちに紅茶を入れてくれた。

……お金はないんだが……これが好意だつたら無下にするわけにはいかない。

そう葛藤している自分を無視してリタは飲んでいるが……少しは躊躇しないよ。

そして自分の分を入れて美由希さんもエイミーさんの隣にかける。

仕事はどうした?

不審な動きをしたら斬られるのだろうか？

「そつみたい……ああ、『めんなさい、名前しか言ってなかつたわ
ね。あたしは時空管理局に務めているの、今は育児休暇中だけだ
けどね……あなたたちの名前と出身世界を教えてもらえれば連絡するけど
……』」

渡りに船とはこのことだらう。

とりあえず一難は去つたようだ。

どーする？ 信用できる？

リタが念話でそつ話しかけてきた。

大丈夫でしょう。直接の面識はありませんが知っている人です。
まあ先に管理局より教会に連絡したいところですが……

それは同感ね、この人知つてたの？

ええ、3年ほど前に聖王教会本部で結婚式を挙げていかれた方で
す……リタがリングガールをさぼつた時のね

あつそ

こんチクシヨー！

「えつと……相談は終わつた？」

あつバレテーラ。

そして美由希さんはちょっとびり警戒している。『仮をつけよ』……

「すみませんでした……2人とも出身世界はミッドチルダです。私はアペリス・ウラノ、それでこちらが……」

「リタ・モルティオよ」

とりあえず先に警戒を解くことに専念しよう。

「そつか、2人ともSt・ヒルテ魔法学院の生徒だつたんだ」

自己紹介ついでに色々と札を切つていく。

これで警戒心は薄くなるハズ……

また、当時の結婚式の教会スタッフ（お手伝い）と辺境世界で会うなんて思つてもみなかつただろう。

ハイミヤさんは驚きと少しばかりの羞恥心がこみ上げてきているようだ。

「しかもグラント騎士団長のお弟子さんとは……世の中意外と狭いものよね~」

そういえば知人の結婚式とは言つていたが……まあ後で聞いてみ

よつ。

「それで申し訳ないのですが、管理局より先に聖王教会に連絡を入れて相談したいのですが……」

「あ～うん、わかつたよ。そもそもあたしも育児休暇で休職中の身だし、あまり強く言える立場じゃないから……」

連絡手段の確保はできた……ついでに警戒心も取り除けたと思つ。

「へえ～キャロとエリオの先輩なんだ～あの2人の学院生活つてどうなの？」

「翠屋から//シドまでそのまま通信を繋げてくれるそうなので、翠屋の閉店時間までとことめのない話を続けている……

「普通に楽しんでいると思いますよ？ キャロの生い立ちは知っていますが……それでもです。エリオは詳しい事情を知りませんが2人とも楽しいキャンパスライフを過ごしているように思えます」

まあ素直な感想だ。

放課後に友だちとショッピングに行つたり、図書室で一緒に勉強したり……なかなかの青春を送つてているじゃないか。

「……そつか。うん、それならよかつた」

さすがに2人の事情は知つていいようだ……うん、頃合いか。

「」の際なので少しばかり10年前の事件に関して聞いてみよう……

「ええ、ですが2人ともフェイトさんと頻繁に会えなかつたのは寂しかつたようです。フェイトさんも以前はこの世界に住んでいたそうですが、この世界の出身なのですか?」

「ん? 」 じつて魔法圏の世界じゃないでしょ? ……ありえない

リタの言ひ」ともわかる。

あんな高い魔力資質を持つた人が魔法の無い世界で生まれるとは考えづらいだろつ。

「あ~ちょっと違つんだ~昔にロストロギアを巡る事件でこの世界と関わつてね。それ以来、あたしたちもフェイトちゃんもこの世界で暮らしていたの……まあ10年くらい前の話なんだけど」

よし、ロストロギアといつの単語をえ出れば……

「10年前といえば……ジュエルシードといつのロストロギアによる次元断層が起きかけた事件があつたと記憶しています……もしかして?」

「そーいやあんたつて遺失物管理の資格持つてたっけ

おっ、リタがフォローしてくれるとほ……てゆーかお前、忘れてたのに実験用ロストロギアをパクッてこいつて言つてたのか？

ただの犯罪者になるだろ「うが……」

てかジュエルシードって……

ええやうです。ちよつと聞き出したいことがあるので話をさせ
て下さい

「あ～うん、知ってるなら仕方ないか……あまり公にはできないけ
どこの街で起こった事件でね。フロイトちゃんもそれに縁があつて
ここで暮らしていたの」

えん
縁ね……言い得て妙だな。

「そうだったのですか……あつ、その時はジュエルシードを無事回
収できたのですか？ 確か複数個あるロストロギアと記憶していた
のですが……」

なんか田々しいわね

ほつとつてください

「うん、ホント色々トラブルがあつたけど『21個全て』回収でき
たんだよ~」

……なんだと？

「いや～ホント大変だつたんだけどね……主にクロノくんが

確か原作では回収できたのが『12個』、プレシアと共に虚数空間に落ちて回収できなかつたのが『9個』のハズ……まあエイミーさんが一般人（？）相手にホントのことを言つてゐるかどうかまではわからないのだが……

じゃあ、あたしたちが拾つたコレって……

……管理局は一枚岩ではありませんから……まあ、それは聖王教会にも言えるかもしませんが

……はあ、頼りたくないけどヒゲを頼るしかないか……メンドくわ

……どうやら思つた以上に大きい原作との『差異』があつたようだ。

これが大きな影響を出さなければいいのだが……望み薄だらうか？

世界はいつだつて……こんなハズじゃないことばっかり、か……

名言だよね、まったく……はあ、冷めた紅茶が身に染みるや。

翠屋つてシュークリームと『ローラー』が血膿のお店じやなかつたつけ？

やつ思つたのは内緒だ
……

原作時間軸へ世界はいつだって……こんなハズじゃなことばっかりです（後書き）

みつやく原作との『差異』が…

そして書く時間ががない…

原作時間軸へこ存じですか？ ラスボスからは逃げられないのです（前書き）

早く先の話を書きたくなつたので海鳴編をひりひと終わらせるべく
…執筆頑張ります

原作時間軸へ存じですか？ ラスボスからは逃げられないのです

逃げる」とは悪い」とだらうか？

戦略的撤退と並べらるこなのだから田的のための逃走は有りなのがだらう。

未来がわかつてゐるのならば「以下略……」モノローグもどん短くなつていくな……

てがモノローグくらこ最後まで言わせてよー

「こつまでダラダラしてゐるのよ、わつわと覚悟しなさい」

そうは言つても……確実に怒られる未来しか見えないんだよ。

はあ……

「この愚か者が……」

ヴァン師匠せんせいに事の顛末と現在の状況を伝えた結果だ。

第一声がコレでした。

場所はお店を閉めた後の翠屋なので、エイミーさん、美由希さん、そして美由希さんから状況を聞いた高町夫妻が同席……とゆーか聞いていたのだが、みんな苦笑いでアチャーな顔をしている。

夜に大声は近所迷惑だろうが……

「 まつたく、無事だったから良いものを……わかつていいのか！？ 一步間違えれば無人世界の可能性もあったのだぞ！？ 管理外世界で知り合いに出会える確率など……」

はい、説教が始まりました。

これは長くなりそうだと、きつと反省文も書かれるんだ。

被害者だらうが問答無用の連帯責任だ！ だもんね……

あ～これは長くなるわ……しかも反省文付き。なんとか切り上げられない？

かつての経験よりリタもそう判断したようだ。

はあ、仕方ない……

なら協力して下さい……少しばかり話を合わせて

いいけど失敗したら洗濯するわよ？

退路はなくなつた……覚悟を決めよつ。

「そもそも、少し補足をよろしこうか?」……なんだ?」

ヴァン師匠の説教を遮ったのだが……正直怖い。

「この世界、……いえ、この場所であつたことが『偶然』ではない、としたら?」

……言つのは?

背に腹は代えられませんよ

あまつこの場では言いたくなかったが……やむを得ない。

「……どういふんだ?」

ヴァン師匠、声が低くて怖いです。

「『みんなさ』HAYAさん、実は先ほどの説明で『言つていないと』がります」

「えつ? あ~うん。そーいえば転送事故の原因とか聞いてなかつたね?」

あつ、わかつて聞いてこなかつたのね。

『言つていなこと』ね……

嘘はついていませんから……一応

詐欺みたいなもんだが……嘘はついていないもん！

「私たちはロストロギアでの干渉実験を行っていたんです」

「つ！この馬鹿者が！！」

ですよね～怒りますよね～師匠せんせいが怖くて泣きそうだ……

「勿論、ロストロギアは正式な貸出を受けましたし、実験も細心の注意を払い行いました。そして……」

「待つのだ！そもそも何故、そんな実験を行つたのだ！？」

あたしも理由聞いてなかつたわ、なんで？

それについても話します、ついでにフォローお願ひします

そして話した……カリムさんの預言に出てきた『旧い結晶』がレリックだと思われること、そのレリックが4年前の空港火災を起した原因だと知つたこと、そのための干渉実験だったこと。

「「「「」……」」

みんなの沈黙が痛い……

ちなみに美由希さんと高町夫妻は話についてこられない模様……

ただ雰囲気的に事の重さを感じており沈黙している。

「…………理由はわかった。だが何故私や騎士カリムに相談しなかつた？お前ならば個人でどうにかできる問題ではないとわかっていたであろうつへ。」

まあ普通はそつなんだが……

「信用できなかつたんですよ、師匠方ではなく『管理局』が『

そう言つて持論を述べる。

預言について対策がイマイチといふこと、信頼性は担保された能力なのに対策が成つていない、管理局の腰が重すぎるのではないか？それはつまり邪魔している者、内通者がいるのではないか？

ならばヴァン師匠^{せんせい}やカリムさん^{せんせい}が動いたら……怪しまれる、バレるのではないか？

そして……

「…………そもそも、管理局は秘密主義過ぎます。重大な事件ですら正しい内容が報道されず、偽りの情報を平然と流す…………そもそも空港火災の件ですら原因について報道されていないではないですか！！！そんな不透明な組織など信用できません！！…………ですから今回は秘密裏にリタへ相談してその実験を行いました」

うん、一呼吸も入れずに言つてることができた。

思つてもないことをよくペラペラ言えるわね？

人が頑張つて語つているのに……！

心臓バツクバクいってんぞ！

ポーカーフェイスをなめんなよ！？

この局面を乗り切るためです！ ついでに実験の件をもみ消して
もらいましょう

外で偉そうに持論を述べているが、内心は酷く打算的な2人だつ
た……

「…………」「…………」「…………」

また静寂が訪れていた。

ヴァン師匠せんせいもそうだが、管理局員のエイミイさん、家族が管理局
に務めている高町家にとつても重たい話だからだ。

「ねえヒゲ、あんたも最初に言つてたでしょ？ 管理局では望まない研究を強いられるかもしけないって……それもつまり同じことでしょ？」

静寂を切り裂いたのはリタだった。

そしてそれは弟子入りの際にヴァン師匠せんせいがリタに向けて言った言葉だった。

てゆーか第三者がいる場面で師匠せんせいをヒゲと呼ぶな……

「……そうだったな。そう言っていたハズだったが、どうやら私も年を取ったものだな……いや、そういう『上』の思考に染まつていたということか……」

ヴァン師匠せんせいが苦笑いしてくる……ようやく落ち着いたようだ。

まあ世界を混乱、不安にさせないため事件等を公表していないと推測できるし、ある程度理解もできるのだが……そう考えると管理局つてめっちゃブラックだな。

企業だったら確實にアウトだろ。

やはり三権集中は至るところと想ひ……

「ふむ、わかつた、今回の件は不問としよつ……幸いに怪我人も被害も出でていない。それにお前たちの言つたいこともわかつた」

おっ！ 説得できた？

おお、やればできるじゃない！

失礼だな！

周囲がアレ過^リれるだけで、もともと私はやれば出来る子だったんだよ？

ふふーん

ふう、一時はどうなるか……

「ただしリタは反省文を書くよつて……帰つたりすぐにだー。」

すっかり安心して油断しきつたリタに、ヴァン師匠の容赦なき口撃^{ローベキ}がきた！

「なんですよー？」

他人の前でヒゲ呼ばわるするかいつ。

ザマア

あんた後で洗濯ね

私刑宣告受けました……^{（リンク）}

「ヒカル……その場所が『偶然』ではないことはいつの意味なのだ？」

あつ、ジユノルシードの報告がれてた。

よつこもよつて難題を残してしまつたよつだ……

原作時間軸へこ存じですか？ ラスボスからは逃げられないのです（後書き）

次はジュエルシード件について…

なるべく早くあげます…

原作時間軸へさよなら脇役（じぶん）、「んにちは主人公（じぶん）（前書き

サウンドステージXとV.i.V.idって繋がりが微妙だと思つんですね。

ルーテシアの物静かな印象がS.t.Sより変わらず。

ノーゲエの印象とかも…

やつぱり最初はV.i.V.idは考えていなかつたのかな？

原作時間軸へさよなら脇役（じぶん）、「んにちは主人公（じぶん）

『偶然』と『必然』について、それは各々の考え方次第だろう。

この世に『偶然』などなく全ての事象は『必然』の重なりから成り立っている、そう考える人もいれば、自分の人生は生まれた時からの『偶然』の重なりだと言う人もいるだろう。

確かに……どんな出来事も『必然』すなわち『運命』だと、その一言で片付けられると堪つたものではない。

では自分が歩んできた過程は……？

それは『自分自身で選んできた進路』だとハッキリ言えるだろうか？

私は……「ハイハイ、厨一病乙」……今まで一番痛い一言でした。

「どうでもいいわ、そんなこと。科学者にとつては自分の選んできた結果が全てよ、くだらない」

今回のモノローグ全否定でした。

もう慣れただけどね……

ジュー・エルシードの件は……（自分たち以外の人）が驚きの連続だったと言つておこひ。

どうやら10年前に確實に『21個全て』封印していたようだつた。

一体何があつたんだろう？

10年前のこととも後で詳しい話を要求してもいいよね？

それと確かS+Sでは地方の研究施設にいくつか貸し出していた物をスカリエットに奪われたという設定だったハズ……でもそれはガジェットの動力として使つていた……だけ？

そこはあまり覚えていないが……

なんでもまたこの世界にあるのだろうか？

これが『偶然』の事故だとしたら……もの凄い確率だ。

つまりは『必然』何者かの意思が働いていると考えるのが道理か？
だとしたら……

「ふむ、早急に調査せねばな……」

ヴァン師匠せんせいもいつも以上に険しい顔をしている。

まあ、仕方ないか、対象のジュエルシードは次元断層をも引き起
こしかねないロストロギアなのだ。

正式な調査となると艦隊クラスがくるのではないだろうか？

もしくはこの世界に詳しく述べ、10年前の事件の関係者が……ん？

なんだろう少しだけ……『何か』が引っかかる。

ん~違和感の正体がわからん……

「うむ、本件は早急に管理局に問い合わせることにする。お前たちには別の任務でその世界に行つた際にジュエルシードを発見したということにしてもらへ。ちょうど騎士カリムの方に低レベルのロストロギアがその世界で発見されたとの報告が入つていてな……」

実験をもみ消してくれたのはいいけど……任務つて。

「聖王教会の騎士団が管理局の遺失物管理チームが動けるまでジュエルシードの管理と搜索を頼む……無茶は許す、だが無理だけはするな……」

緊急事態だから仕方ないが……危ないこととはしたくないのだが。

メンジケル……

リタの言つてもいるともだ。

てゆーか私たちの立場つてどつなんだりつへ。

St・ヒルデ魔法学院の生徒……民間人だよね？ 聖王教会関係者ではあるが……

ヴァン師匠に連れていかれた異世界任務などはあるが……これってOKなんだろうか？

「ひいらも明日の夕方には母さんが……リンディ総務統括官が休暇で帰宅するので事情を説明して協力を仰ぎます」

ハイリヤさんせんせいがヴァン師匠せんせいにやつ告げる。

まあ、あのリンディさんがいるといつなり……大丈夫だろう。

それにしても違和感が拭えない……一体なんなんだろうか？

うーん……何だろ？

「学院と親の方にはこちから連絡しておく。それとその世界での拠点となる場所だが……」

学院と両親に師匠せんせいから連絡してもらえば万々歳だ。

そして拠点、寝床とお金は重要だしな。

「あつ、それならウチを使つてもうれば……」

「ハイハイちゃんがそう言つてくれたが、確か子供がいるんじや……」

「その申し出はありがたいのだが、幼子がいるのであらう。ウチの馬鹿弟子共に幼子の相手が務まるとは思えなくてな……」

失礼だな！ まあ、その通りだと想つが……

幼児の世話なんて嫌よ

予想通りの回答あつがとひびきります。

ただ野宿だけは「メンなのだが……ちなみに子供だけでホテルとか無理じゃね？」

「うへん、そうなると「ウチを使つのは?」……美由希ちゃん?」

今度は美由希さんがそう言つてくれた。

「いいでしょ父さん、母さん。今は恭ちゃんもなのはもいないから部屋も余ってるし、無関係とは言こきれないでしょ?」

お、まさかの高町家か?

「んつ、了承(一秒)」

桃子さん、それはキャラが違つ!

邪夢はやめて！？
シャム

「「」こんな可愛こお密様なら〇〇よ 」

「ああ、この街で起ひつている事件なら俺たちだつて無関係じゃないだろ？こんなことでいいなら喜んで協力するさ、それに近頃ウチも寂しくなってきたからな 」

高町家は〇〇らじこ……いいのか？

「ふむ、聞きそびれていたが……この方たちは？」

あつ、説明してなかつた……

「あつ、このうちの方たちは機動六課に出向中である高町戦技教導官の「」家族で、魔法文化に関しても理解ある方々です」

エイミヤさんが補足説明してくれた。

「あのエースオブエーズの……ふむ、不肖の弟子共ですがよしとくお願いできますか？」

あれ？ 私たちの意思は？

まあ反対ではないのだが……

「はい 承りました～」

どうやら拠点は高町家で決定のようだ。

……いいのか？

ヴァン師匠との連絡終え、入れてもらつた紅茶を飲んで一息つく。

「……厄介事になつたわね、あたしにもあんたの悪運がまわつたか
Hミリオと同じことを言われた……とかお前もそつ思つていたのか！？」

なら少しばけようと……思わないなコイツ等は。

なんでこんな友人しかいないんだろう……なんか泣けてきた。

「あつ、白石紹介がまだだつたよね。あたしは高町美由希、こっち
が……」

「その母の高町桃子です　それとこひら十郎さん　」

「よろしく2人とも」

高町家にじり紹介もらいました。

みんな見た目若いよね……ウチのお母様もそうだが……いつか自分の方が老けて見えるのではないのだろうか？

……嫌過ぎる。

「あつ、私はアペリス・ウラノ、こちらはリタ・モルディオです。短い期間だと思いますがお世話になります」

「……よろしく」

「はーい よろしくね二人とも」

今更だが期間くらい指定していけばよかつたのに……ヒゲめ。

とりあえず異世界での拠点をゲットできたので良しとしよう……
厄介事には変わりないのだが……

いつもして私たちの海鳴市でのロストロギア搜索クエストがスター
トした。

ピロローン！

【勇者爆誕（笑）】の称号を得ました！

原作時間軸へようなら脇役（じぶん）、いんにちは主人公（じぶん）（後書き）

まさか六課の代わりにサウンドステージをこなすことになりました。

頑張つてちやつちやと書き上げます。

原作時間軸～海鳴クエスト（旅立ち編）（前書き）

TO DO リストをプレイ中… オート稼ぎ中に執筆してます（笑）

原作時間軸／海鳴クエスト（旅立ち編）

【勇者爆誕（笑）】

説明：爆誕してしまった勇者に与えられる称号

条件：ナニ氣ニスルコトハナイ

効果：成長率 邪氣眼

備考：勇者様は絶対正義です きっと新しいナニかが目覚めます

!!

ピロツーン！

住居不法侵入および家宅「いらんし、やらんわーー！」

海鳴クエスト／ロストロギアを求めて／

これは10年前に封印されたハズのロストロギア『ジュエルシード（不特定多数）』を集める冒険である。

そして現在はサブイベントとして謎の低レベルのロストロギア回収を「もう片付けたけど?」……えつ?

「昨日あんたが寝ていろいろうちにサーチャーに引っかかってさ、空間

「と遠距離殲滅しておいたわ。またぐ「ミ」みたいにひらがなで
増殖して……」

えへと……

「一応残骸は回収しといたから任務完了了、後任がくるまでのんびり
捜索しましょ～」

……出番なし？

異世界生活2日目の朝は某戦闘民族な高町家にて向えた。

とりあえず5時には起床し、昨晩急ピッチで作成した運動用のバリアジャケット（ジャージタイプ）に着替え日課のランニングへ。

バリアジャケットは常時魔力を食うが、この街は魔力素も適正値だし、適度な魔力消費もした方が良いと考えたため作成することにした。

ちなみにランニングは土郎さんと美由希さんは別々だ。

いや、朝からランニング30kmとか勘弁して。

夜の分を減らしたから朝に走り込むのだ、とは言っていたが……

とつあえず10kmくらいを田標に街並みを眺めながら走る。

1時間くらいかけ高町家に戻ってきた。

思いのほか色んな箇所に田移りしてしまったようだ。

既に土郎さんと美由希さんは帰宅してしまつて、道場から音が聞こえてくる。

てか1時間程度でホントに30kmを走ってきたのだらうか？

それって世界新じゃね？

そう思つた私の感性はおかしいのだらうか……？

最初は道場の方を覗いてみようかとも思つたが、見世物ではないだらうし、空いているうちにシャワーを使つた方が良いと思い、見学せやめるに至つた。

まあ、ビックリで機会があるだらう……

やはり御神の技は見てみたいものである。

先にシャワーを浴びて、一旦部屋に戻り布団を畳む。

今回備つた部屋はかつての恭也さんの部屋らしい。

ちなみにリタも一緒に問題ないと言ったため同室だ。

部屋も広いし良いのだが……まあ、気にしないことにしよう。

ついでに寝てこるリタにも声をかけて……やめとくか。

昨晚（自分が寝ている間）に（一応）任務のロストロギアを回収してくれていたようだし……そもそも実験の準備であまり寝ていなかつたのだろう。

寝かせておくか……

昨晚のうちにエイミーさんから借りたクロノさんの御下がりの服に着替えリビングへ向かう。

ちなみに着れそつたのは基本的にシャツ類、スラックスと言つたところだ。

なんてゆうか枯れ……つん、落ち着いた人だったのだろう。

リビングに向い朝食の準備をしている桃子さんに挨拶、手伝えることないかとは聞いたが……食器の準備すら他人様の家では勝手がわからないのでここでも出番なし……

さすがに居たまくなつたので、リタが昨晩封印（破壊）したロストロギアの残骸でも眺めることに……ってなにこれ？

既に原型を一切留めていなかつた。

別に無傷で回収しようと言われていなし……大丈夫だとは思つが。

うん、ロストロギアを簡単に紛失して自分で回収する氣もないよ
うな奴なんてロクでもない奴だろモーマンタイ……無問題だ。

回収できたのだから幸先は良いハズなのだが……

「はあ……」

溜息の一いつくべらい許して欲しいものだ。

朝から黄疸でこらひしき朝食の時間になつたようだ。

「はい、あ～ん【注・脳内イメージです】」

「あ～ん うん、今日も桃子のメシは最高だな【注・脳内イメージです】」

「もう、土郎をさつたら【注・脳内イメージです】」

ラブライチャイチャ……

「ふん、なんていうか……約2名ほど仲良が過ぎだらっ、

確かに原作なのはせんの疎外感が……なんとなくだがわかる。

現在は美由希さんがその役なのだろう……もしかしてウチを使えた言つたのはこのためではないだらうか？

やつと視線を美由希さんに……あつ、逸らされた。

「『毒』といつ子と『辛』といつ子は良く似ててゐるよ……ホント悲しこくらうねー。」

後に美由希さんはそつ語つてくれた……強く生きて下れ。

高町家における魔王生誕秘話の一端を垣間見た気がした……

「ところで今田せいかからビーフするんだい？」

朝食も終わり、皆それが仕事の準備に入りつつして、今田翠屋、土郎さんがそう訊ねてきた。

「そうですね、フィールドワーク、というわけではありませんが、街に出てみようと思います。一応、常時サーチ、探索魔法の類を飛ばしているので必要ないと言えればないのですが……」

他人様のお家でグータラしているのも常識的にダメかと……

「リタの方はもう少し寝ているかと……色々と疲れているみたいですし」

「ふーん、色々か……最近の子は（『』）

美由希さんがブツブツ何か呪詛のよつなものを呴いている。

ナニを想像してるんだか……

「そりか、外は十分気を付けるんだよ？ お皿には一田翠屋、昨日の喫茶店において、昼食を（）駆走しよう」

ええ人や……自分の周囲には一切いなかつたタイプだ。

ふむ、ついでにすずかさんへ昨日のお礼もしたいな。

どうせなので聞いてみると。

「あっ、そうです。もし知つておられるなら田村すずかさんの住所か連絡先を教えていただけないでしょつか？ 昨日のお礼をしていなかつたので……」

恩は返さねばな、自分の場合は返された覚えが少ないが……なんか虚しくなつてきた。

「そりが、すずかちゃんが案内してくれたんだ……うん、こっちから連絡をいれでおこひ。都合が合えばお畠にでも会えるかもしけないし」

お畠に翠屋で、か。

それなら心置きなく……はないが、海鳴を散策すること。

「こつてらつしゃいーまたお畠にね」

「はあ、若いつていいなあ……」

桃子さんにそう笑顔で（美由希さんは複雑な眼差しで）見送られ、いざ街へ。

「まあ、そもそもジュエルシードがこの世界、この街にあるとは限らないのですが……」

ぶつっちゃけ、ヴァン師匠せきじやくの連絡待ちだ。

正直な話、ないこと祈りたいのだが……

「まつ、なるようになれですね」

昨日もなんとかなつたのだから、今日もなんとかなるだろ。

そんな超樂觀的な考え方……でもないとやつてられんな。

「うして私の長い一日（冒険）が始まった。

原作時間軸～海鳴クエスト（旅立ち編）（後書き）

海鳴クエスト続きます。

原作時間軸～海鳴クエスト（遭遇？編）（前書き）

まだゲーム中…短いのでタイミングを見計りつつ書いています。
ちやつちやと続きを書きあげれるよう（一応）頑張ります。

原作時間軸／海鳴クエスト（遭遇？編）

海鳴クエスト～ロストロギアを求めて（その2）～
さあ、冒険という名の散策に飛び出した主人公！！
アペリス
彼の行く先にあるものとは…？
そしてついに本編最大の謎である…………はあ…………
虚しい…………シッ「ミ」の大切さを失つてから気付くなんて…………
いや、寝ているだけなんだけどね。
せつと散策に行け…………

いや散策と言つても実際はただの散歩に過ぎない。

常時サーチャーを飛ばしているし、反応があれば自動で結界まで張るといつ超スグレものだ。

むしろ散歩と云う名の逃げか…………

他人様の家に残っているのもいたたまれないし。

「何か異変でも感知できれば万々歳といったところでしょうが……」

ヴァン師匠せんせいに依頼された件は片付いているので実際は連絡待ちなのだが……何もしていないとなると、なんというか沽券に関わる気がする。

出番がないのは割といつものことだが……うん、なんか釈然としない。

「……はあ、少しばかり広域探査に力を入れてみますか」

オートより少しはマシ、といった感じだが他にする」ともないし……

それにリタが（一応）仕事を片付けたのに自分だけ遊んでるわけにもいかない……

「とりあえず適当に歩いてみますか」

行先は……人の多い所から行ってみるか。

「目標……大きなショッピングモールで」

「やあ……ー！」

「……人多すぎです」

忘れていたが今日は休日だったようで、家族連れのお客がわんさかいた。

……うえ、人波に酔いそうだな。

どいかに避難をしてかデパート屋上とか高いところがいいのだが……今のじ時世、屋上付きとかあるのだらつか？

とりあえず通路真中に設置してあるベンチで休憩……携帯端末を模擬したデバイス（セイクリッド・スカイ）を弄る。

まあ幻術の応用なのだが……まあ、ヒュー門さんに頼めばそんな機能も付けてくれるかもしねり……

結果は……サーチャーに異常なし、じの区域での反応もなし。

昨日に封印したジュエルシードのデータを反映し、封印状態でもヒットできるレベルのサーチャーなんだが……

「じの周辺にはなしですか……いえ、こんな所で反応がなかつただけ御の字ですか」

まつ、そもそもジュエルシードがじの街にあるかもわからないのだが……

「それにしても、『こんな世界まで来て、私は一体何をしていろんでも
しょうか……』

少しばかりの自嘲……あの時リタに相談なんてしないで、じつと
していれば良かつたのだろうか？

それとも危険を承知でヴァンせんせ師匠にでも頼ればよかつたのだろう
か？

または……いや、そんな『エフ』ばかり並べても意味はない、か

……

そんなネガティヴな思考に陥つていると……

「……『めんなさい、友達と約束……』

「……ならち、その友達も一緒に……」

「……その、困ります……」

「……いーじゃん、いーじゃん……」

なんか典型的なナンパのやりとりが聞こえてきた。

別にどうでもいいので無視することに。

そもそも出しゃばるよつた正義感があるわけでもないので、むしろナンパ君に頑張れと応援してやる……むろん犯罪者にならない程度に、だが。

「……じゃあ、その子が来るまで一緒に……」

「……あの、だから……あつ！……もつ来てたみたい……」

次はどうに向つか……

「……えつあの子？　かわい……じゃん外人さ……ぜひ紹介してよ……」

「臨海公園……は遠いか、河川敷を歩きながら適当に散策して翠屋
に……」

「……もう、だいぶ待ったんだよ？　早く行こう？」

急に声をかけられた……つて私？

顔を上げると……

「昨日約束したでしょ？　さつ、買い物に行こう？」

……昨日会つたばかりのすずかさんがありました。

……なんでも？

だがそこは空気が読める主人公、なんとか話を合わせます。
アベリス

すずかさんも困り顔で『お願い』と田で訴えていたし。

相手はチャラチャラなヤングボーイ（推定20歳前後）の野郎が
2人、顔は……普通じゃね？

よくすずかさんに声なんてかけられたものだな。

2人だと勇氣も2倍なのだろうか？

「え～買い物なら一緒に見てやるよ、そのあと一緒にカラオケ行こ
うぜ！」

常識は2人で2分の1な気がするが……午前中からカラオケって
どんだけハードなんだよ？

「そつそつ、そつちの『彼女』も一緒に、いわゆるダブルデート
！ うん、完璧！」

うん、完璧だな、お彼らの脳のイカレ具合が……

どうしても母親似の顔なので見た目は仕方ないが……まあ髪も原
因か。

以前に幻術で髪を切ったバージョンを作つて見たが……なんてい
うか想像以上に似合わなかつたのだ。

とりあえず余程な切欠でもない限り切ることはないだろう。

まあ、身長が伸びて声変わりするまでの辛抱だが。

……てゆーか見た目が中学生にナニ言つてんだコイツ!」へ。

『ハヤリ色々と』『アウト』かもしけない輩だ。

「あの、だから……」

すずかさんなら『ゆーか』輩の振り方とか心得しそうだナビ……仕
方ない。

ハツキリ言つてやりますか。

「……s o r r y…… s h o o b i n g の邪魔ナの『ト、シラテ』『
にや』『いトベリセト』『」

翻訳魔法使わないで言つたら凄い発音になつた。

いかにも日本語が苦手な外人を装つてハツキリと『拒否の言葉』
を示すつもりだったのが……

「……ふつ、つこて』『にや』『いドくらき』、だつてやー。かつわ
いい~」

神は死んだ。

いや、むしろ神さまにも聖王さまにも既に見捨てられていく氣は
するが……

すずかさんも『あちやー』といつ顔をしている、笑われていな
だけマシだが。

仕方ない、こう時は戦略的撤退だなー！

「 しじれー！」

「 えつ、ひつー。」

すずかさんの手を取り、人波の中に消えるーー。

「あつ、おーー？」

もう遅いわー！

勝手に『やが』の余韻にでも浸つてこがよい愚か者どもがーー！

異世界生活2田田の午前は、成果なしの探索結果と痛恨の発音!!
ス、そして女性の手を取り逃走することから始まりました。

原作時間軸～海鳴クエスト（遭遇？編）（後書き）

海鳴クエストまだ続きます

原作時間軸～海鳴クエスト（遭遇一編）（前書き）

モチベーションが低下気味…

原作時間軸／海鳴クエスト（遭遇！編）

人は生まれながらにして罪を背負っている。

そんなフレーズをどこかで聞いたことがあるだろう。

確かに人が、というより生き物が生きていくためには他の命が必要だろう。

そう考えると人生とは『救う』より『奪う』の方が圧倒的に多いのではないか？

まあ、だからと言つてどーしたわけでもないのだが。

ツツコミ不在のためテキトーなこと言いたい放題だが……寂しい。

……リタ早く起きて。

「ハツ、ハツ、ハツ……ちょっと止らない？」

結局、当初予定していた河川敷辺りまで走ってしまった。

ずっとすずかさんの手を引いて……

「あっ……すみません、つい……」

いくら戦略的撤退のつもりでも「れは……

それにだいぶ走らせてしまった。

まあ、私もすずかさんもほとんど息を切らしていないが……

私は体力には自信があったが、すずかさんも凄い。

色々と氣になるが……触らぬ神になんとやら、気にしない」とこ
しょ。

「すみません……確かに友人と買い物の予定があつたのでしょうか?」

そんなこと言つていたような……

「えっ? ああ、大丈夫だよ。あれは嘘だから」

……やつですか。

「でも君を探してたのはホントだよ?」

なんだと?

「なのはちゃんのお父さん……えっと、翠屋のマスターさんから連絡もりつて……」

お前に翠屋ではなかつたのか？

「ちよつと散歩気分だつたのから、居場所は……そつ、女の感だよ

」

女の感つてスゲーな。

「ちよつとお話してみたくつて……時間いいかな？」

「そつかアペリス君つていうんだ……」

ひとまず河川敷の土手らしき草の上に座りながら自己紹介を今更だが。

「……姓? 解……どうこう意味なんだら?.. プシブシ……」

「どうかしましたか?」

「えつ、つと、なんでもないよ……えつと変わつた名前だね?」

名前が、一応名づけは父をやうしいが（愛称はお母様だが）……そつこえれば由来とか聞いたことがなかつたな……今度聞いてみよ!。

といあえず今は昨日のお礼を言つのが先だ。

「昨日はありがとうございました。おかげで路頭に迷わずに済みました」

した

「ううん、わたしにできる」とはそれくらいだから……

ん？ 若干トーンが落ちたような……

「それで話したいことはなんでしょう？」

特に話題もないのでも要件を聞き出してみる。

「発音上手だね……それも魔法なのかな？ うん、聞きたい」とは
魔法……ううん、魔法世界についてなの……」

なんですか？

要約すると親友が住んでいる世界はどんな世界なのか、現地の人
に聞いてみたいらしい。

どう、と言われると……

「日常生活においては『この世界』とも大差はないかと。文化は…
まあ、差異はあれど方向性の違いといつか……

なんてゆーかもつと具体的な質問にして欲しい。

「あつ、要領を得ない質問でごめんなさー……えっと、じゃあ『魔法』を使って戦う、といつのは常識の範疇といつか……割と当たり前の考えなのかな……？」

……そーゆーことか。

親友が命を賭してまで頑張ることに心配を……いや、疑問を持つているのか？

確かに魔法圏の世界でもないのに才能が『たまたま』あつただけの普通の少女が、巻き込まれたとはいえ世界のために戦い、傷ついて、他人のためにその力を振るつて……

それは自分で選んだ進路みちであり、行動理念も立派だが……やはり周囲はそう簡単に納得しないのだろう。

現にこいつして会えない親友の心配をしている女性がいるのだ。

「……日常で使用できる魔法もたくさんありますが、やはり戦闘向けも多いと思いますね。人によってはリンクアーコアがなく……最初から魔法を使うことのできない人もいますから、才ある者にとつては割とそうなのかもしません」

リンクアーコアの有無でだいぶ選択肢が変わるのは事実だろう。

実際にとある別世界ではリンクアーコアの有無で差別もあるらしい。

「その中でも有無大小というのは人生における大きなウェイトです。

それを活かせる場となつたら必ずとそつなつてゐるのが現状でしょ
う……人は才能の奴隸ではないのに

私も魔力値だけは高いから、聖王教会側じゃなかつたら管理局に
あの手この手で勧誘されていたかもしれない。

「……そつか「ただ」……えつ？」

すずかさんが何か言いかけたようだが遮る、折角だから切りの良
いところまで話すことにして……これはそう、滅多にない『私のターン』
な気がする。

「過程があるなら結果は付きものです。魔法によつてあつた出会い、
痛み、喜び、そして救い……それらを否定はしません。それは全部
私自身の大切な経験ですから」

確かに痛みとか苦労とか『非常に多い』が、魔法によつて救うこ
とができたこともあつたし、救われたこともあつた。

まあ、元凶が魔法のせいだと言わると黙るしかないが……

それらをひつくるめて私自身を構成する一部となつてゐるのは事
実だ。

いや、ホント苦労はいっぱいなんだけどね。

「まあ、私にはそのご友人の考えまではわかりませんが……

ただの持論だが、と言つまとめゐる。

やはり魔法圏の世界はこの世界の常識と比較するに迷ふところだ
る。

だけど何が正しくて何が間違っているなんて問答をすることは
んてない。

結局は……

「結局は個人の考え方、行動次第なんだね……」

まあ、やつなるわな。

「うん、少し考えてみて……話してみるかな、じつちばかり心配す
るもの不公平だよね」

セーユーもんだらうつか？

それで納得するなりそれでいいんだが……

その他、あーだーーーだ話している内にぼどよい時間に……

「そんな翠屋に向おつか。今から抜け出しあつて時間がだし」

すずかさんがその提案し、特に異論もないでの翠屋に向つけると云。

「お手を貸せばいいや、お嬢様？」

ナツコは草むらに腰かけているすかさんに手を差し伸べる。

男子たるもの紳士であれ、ヒューマンさんが言っていた。

それを見習つたわけではないが……ヒュー・カヒューさんはカリムさんに氣を使って下さる、マジド……そのうち円形脱・パン。

「あら、なら翠屋までHスルートお願ひしようかしら 小さな騎ナ士さん？」

すみません、道がイマイチわからないのでそれは勘弁して下さい。

と、手を繋いだ瞬間……隔離用封時結界が自動発動した。

範囲広つー？ 発生源は……海だろつか？

リリからでは目視は不可、サーチャーで確認を……

「 つてテカッ！？」

場所は臨海公園だろつか？

なんかやたらでっかい海洋生物……えっとテイルズ風に言つなら
クラーケン？ らしきものが暴れている映像だった。

ちなみにこのクラーケン(仮)ってタ「ヒヤカ」を取引込んだのだろうか?

まあ、それはビールでもいいか……

とりあえず現場近くに向って確認と報告をした方がいいのだろうか?

正直、嫌だな……危なそう。

結界が持つ限りはほつといいでいいんじゃない?

生憎と戦つつもりは一切ないので……任務外、任務外。

そんなことを考えてみると……

「あの~? わたしはビアしたらいいのかな?」

「…………え? ?」

その声に振り向くと、手を繋いだままのすずかさんがいました。

あれ? もしかして巻き込んだ?

どうやら私の悪運は割と云染するようだ……

ちなみにこの結界は私の張つたものではないので脱出せねば
地味に困難だ。

……リタ早く起きて（泣）

原作時間軸～海鳴クエスト（遭遇一編）（後書き）

はじくなつてきたので、またゆづくづペースになります。

原作時間軸～海鳴クエスト（激闘？編）（前書き）

相変わらずモチベーションは低く…

なんとか週一くらいにはあげたい…

原作時間軸／海鳴クエスト（激闘？編）

ただ『生きたい』と思つこと、願つことは罪なのだひつか？

それは生物の本能そのもの……言つなれば自然の摂理、か？

逆に『死にたい』と願つことのある人間とは摂理の反逆者なのだ
ひつか？

そう考えると人間はなんて傲「えつと厨二病つて言つんだっけ？」

……海鳴クエスト始まります。

「えつと、今回のシツ」ミは月村すずかで御送りしました……コレ
次回もやるの？」

やります。

「えつと……どうしよう？」

すずかさんがそう訊ねてくるが……ホントどうしよう（汗）

まさかジユエルシードが実際にこの地にあって発動するとは……

仕方ない、こんな時こそ高速思考展開だ！！

結界からの脱出は？

内から外は難しい、てゆーかほぼ無理！！

結界を一旦解除するのは？

クラーケン（仮）が一般に見られる

ほぼタイムロスなしでは？

あの質量の相手だと物理的な損傷が現実に出る

いつそリタを起こすのは？

殺される！？

いや、半殺しだろ？

洗濯かも

むしろインデイグ？

ラウマがあああ！？

ああ、もう！ 我が思考ながら役に立たない！？

「つあえずハイハイさんに連絡してみれば？」

……

おっ、じりやう結論がでたようだ。

「」の間まかのジャスト一秒。

「とつあえずハイハイさんに相【ひかりハイハイ・ハラオウン！
ジユエルシーーーの反応あり！ アペリス君は今ビリビリのーー？】
……結界内です」

「」前に連絡がきた。

【よかつた、ジユエルシーーーなんだけど……って、なんですかち
やんがいるのーー？】

かくかくしかじかづーまつま。

「えつと偶然巻き込まれちゃつて……」

ちよつと視線を逸らしながらハイハイさんに向ひ答へるすずかさ
ん。

【偶然、ね～】

2人とも意味深な言動しないで……

「……とつあえずアレはビーするんです？」

あのクーラーケン（仮）はひとつここにいるんだりつか？

【おっと、やうだね。うそ、単刀直入に聞くよ。】

ハイハイやんがやたら真剣な表情で……

【アレ封印できる?】

もう聞ひつけた。

……正直、その方にはあるこ。

アレの封印を『できる』『できない』かと聞かれれば、おやじく
できるだの。

『じゃない』と言えば、田んぼに飛び込むもの。

『できない』と言えば、安全かもしれない選択。

正直、危なことはしたくないが……

「 できまや」

なんてゆーか……格好悪い姿は見せたくないものだ。

他にも理由を付け足すなりこぐりもあるが、たまには最後まで恰好良いきたいものである。

【……うん、お願ひ！　一いつも緊急職場復帰！　全力でサポートあるよー。】

せぬつかないか。

久々に全力で「あの～わたしはどうしたらいいんでしょつか？」

……早速出鼻を挫かれた気がしたよ。

【あつ、ずっとそこで待機してもひつのも危ないかもしね。普段だつたらいつから転送するところだけど……この結果、ずいぶんと強力みたいで干渉できないんだよね……】

リタさんマジパネエッす。

「わあ～！　すげーね！　わたしたち生身で空を飛んでるよー。」

結局、すずかさんも一緒に近くまで連れていくこと。

こぞとこづ時、すぐ連れて逃げれるよー。ヒ。

封印手段が遠距離なので、こちらとしても問題はないのだが……

「うわあ～！ 大きいね！？ あれはイカなのかな、タコなのかな
！？」

私の腕の中でずいぶんとはしゃいでいる「」様子……まつ、強張つ
ているよりはマシか。

腕の中とこいつとはじめ察しの通りの『お姫様だっこ』だ。

その状態で目的地まで飛行している。

役得かもしけないが……ある種の拷問でもある。

【あらあり、まあまあ】

外野エクワイア・エクスの視線がとつても痛い。

映像なんかは消してもらわねば……後で酒の肴になつてしまつだ
わい。

……覚悟しろよクラーケン（仮）

木端微塵にしてくれるわ――！

その後、数分程度で臨海公園上空まできたのだが……

「あの子、もしかして泣いてる……の？」

すずかさんがクラーケン（仮）の姿を見てそう呟く。

私にはそこまでの感受性がないのでわからんが、クラーケン（仮）を見ると……いたるところに傷痕が見受けられる。

もしかしてジュエルシードに願ったのは……

「……どうしてもやるのは一緒です」

アレの願いがどうであれ、ジュエルシードなんでものは封印する。

そもそもあの姿では碌な事にはならないだろう。

ならば……

「ならばこいつそ……すずかさん、今足場を作りますので」

魔法で空中に足場を作りすずかさんを下ろす。

「あの……頑張って」

「はい……せめて一瞬で決めます」

「うん、久々に全力で魔法を使つことここでいくぞー！」

「解放しますーー！」

オーバーコミック
O V L - !

魔力とか鬱憤とかストレスとか、とりあえず色々な物を放出し半無敵状態で体中に力を漲らせる。

「…………あなたはただ生きたかっただけなのかもしませんね」

冒頭で暴れ続けているクラーケン（仮）を見下ろし軽く。

そしてセイクリッド・スカイを起動させる。

「…………でも私は詫びませんよ？　だから恨んでもうつて結構です」

クラーケン（仮）に恨まれるのもなんかシユールな気がするが……そう思いながらモードを切り替え、ガーンティーヴア、弓形態へ。

「…………やようなり…………無慈悲なる白銀の抱擁」

久々の全力全壊…………！！

「　アブソリュート・ゼロ……」

瞬間、世界は白銀に包まれた。

田トには巨大な氷像アイススタチューがある。

悲鳴も雄叫びも全てを空問レと一瞬で飲み込んだ。

「のデバイスは相変わらず厨一性能だ。」

【 すいじつ、クロノくんやはやしちゃんの氷結魔法の比じやない
ねコレ!?】

「 あの巨大な体が一瞬で……これが本場の魔法……?」

「ハイリヤさんもすずかさんも相当驚いているようだ。」

ちなみにコレは場合によつて封印まつじぐらな魔法だ……威力デ
力過ぎだもんね。

そして今回は前回の失敗を踏まえ、周囲に温度調整用の結界を張
つてるので寒くはない。

さて、後は氷像を碎き、ジュエルシードの封印とこいつか。

「 続けていきます、混濁に沈め! 憤怒の擊鉄……」

「ピコハンマー」

る。
巨大なピコハン
が氷像^{アイススタチュー}に振り落とされ、氷が木端微塵に砕け散

うん、効果は抜群なんだが……なんか色々と台なしだ。

だつてこれしか思い浮かばなかつたんだもん。

あつ、ジュエルシード出てきた。

「【.....】」

2人の沈黙と視線が凄く痛いけど、なに気にするこことはない。

そして『』を構える。

あれからこのモードにも色々と追加したので……

「 シーリングアロー」

封印術式を含んだショットを撃つなんてこともできるのだ。

これでもう意味のない『』形態なんて言わせない。

一閃、剥き出しになつたジュエルシードを射抜く。

ちなみに誘導性も威力もバツチリブーストしているので無問題ハーマンタイ！

なんかようやくブーストデバイスらしくなつてきた。

そして封印付加を伴つた射撃はジュエルシードを射抜き……

「 ジュエルシード封印、シリアルナンバー 13」

無事に封印完了……しかし、よりによって1-3、なんか不吉だな。

「あつ、えつと、お疲れ様? だよね」

【あれ? ……終わったの?】

なんてゆーかピコピコハンマーが相当シユールだった模様……シリル帰つたらへる。

「一応、無事に回収完了です」

ひとまず任務……ではないんだよねコレ。

ただ『任務外作業+シユールな印象・今回の活躍=プライスレス』だろうか?

なんか締まりのない終わり方だな……結局いつも通りだが。

海鳴クエスト午前の部、無事終了。

【ユーロパニーマー】を発表しましたー。

原作時間軸～海鳴クエスト（激闘？編）（後書き）

普段目立たないキャラが急に活躍するのも死亡フラグらしいです。

主人公にまさかの死亡フラグが…

でもちょっとだけモチ上がりました\

原作時間軸～海鳴クエスト（休息？編）（前書き）

とつあえず早く新章にいへべく頑張ります。

海鳴クエストは次回が最期です。

そして今回はいつも倍です。

原作時間軸／海鳴クエスト（休息？編）

忘れない、あの涙も痛みも悲しみも……つて負の方向ばかりかよ！？

いい思い出が少ないな……

「ホン……『始まり』と『終わり』はワンセット、物理的に永遠なんてものはない、あつたらいけない。

行く川の流れはなんとやら……不变なものなんてない。

終末の時計は動き出した、もひつ誰にも……

臨海公園でのクラーケン（仮）を撃破後、道中すずかさんに魔法に関してアレコレ聞かれながら当初予定の翠屋へ。

どうやら魔法技術に大層興味があるようで……根っからの技術屋といつかなんといつか。

わかる範囲で回答しながら田的に到着した。

「さすがにお昼は混んでいますね

「あつ、予約席にしておくつて言つてたから大丈夫だよ」

至れり尽くせりだ」と。

「いらっしゃいまー　あつ、2人共きたんだね、奥へどうぞー
」

美由希さんに案内され昨日と同じ奥のテーブルへ、そこには既に先客がきていたようだ……

「お疲れー　いやーなんてゆーかシユールだつたねピコハン　」

「……良い御身分だと、待たせた挙句に……まあ、あたしには関係なわけです」

先ほどまで通信をしていたエイミーさんと、ずっと(シッコリ)待ち望んでいたリタにちょっとびり心抉られる挨拶をいただきました。

昼食…といつても喫茶店ならではの軽食を済ませ事務連絡へ。

「2人ともお勤め御苦労さま。これグラント騎士団長からなんだけ
ど……」

そう言ってエイミーさんから渡されたデータは正式な遺失物管理者の辞令と今回の任務における依頼、そして……

「 総合Aランクの証明書？ …… 特に試験を受けた覚えはないのですが？」

なんですか？

「 ああ、それに関してはグラント騎士団長から伝言があつて『私の方で申請しておいた。なに、これはまつとうな手段であり、身内顛眞のない審査に基づく考えだ。任務に就く以上は持つておきなさい。ただしそれ以上のランクは自己申請し試験を受け、資格取得をするのだな』だつてさ」

要は辻褄合わせか。

リタの方も同じく総合Aランクだが……

「 そつちにも伝言あつて『お前なりのランクはいけるだらうが、試験もなしにそのランクの申請は無理でな。段階を追つて受けてみるのだな』だつて、凄いね～グラント騎士団長にそれだけのことを言わせる実力者なんだね！」

……わかつてたことだし、面倒な柵は欲しくないから別に悔しくなんてないよ？

「 それと連絡用端末にコレをインストールしてね、これでミッション

も通信できるようになるんだよ』

『おお、それは便利な……早速インストールを実施する。

『とは言つても今日の夕方には捜査としてフロイトちゃんがくるから、この件はバトンタッチなんだけどね』

そして一瞬で割と不要な代物に……なんでそんなに上げて落とすのかな？

『ん？ 『捜査としてフロイトちゃんがくる』と言つたか？

『「」の件はフロイトさんが担当するのですか？』

『うん、すぐに動ける人材の中でジュエルシード事件に関してはフロイトちゃんが適任だからね』

……なんとなくだが繋がつてきた。

ただしそれは原作を知つているから、その差異であり、この世界が根本的に異なつていいたらアウトだが。

『……ならへんで決定打が欲しいところなのだが……

『適任ね……それって10年前の事件つてやつへ

ナイスリタ！ それとなく（真ん中ストレート）で聞いてくれた。

それがわかれれば……ある程度見えてくるのだが。

「あ～うん、『めぐね～10年前の件』みたいに話せなくてね……」

……
ダメか。

じょうがない、帰つてから何とか調べてみるか。

そうしていろいろソースで調べた結果、ソフトインストールが終了した模様……新着メール13件。

また13かよ……今日やばいんだろ？

とりあえず上から流し読みすること……

? 送信者：ラグナ

『リースへ、なんとボーアフレンドができました／＼ もつと仲良くなつたら紹介するね』

? 送信者：ヴァイスさん

『ラグナにボーアフレンドができたらいいんだがどこから狙撃すべきだら？』返答求ム』

? 送信者：ラグナ

『お兄ちゃんに話したら何故かストームレイダーを磨き始めました。今度リースと一緒に狩りに行く予定なんだって？ どこの世界まで行くのかな？ その時はお土産よろしくね』

? 送信者：ヴァイスさん

『ラグナにお前と狩りに行くと嘘付いちまつた、聞かれたら話を合

わせてくれ

? 送信者：ラグナ

『実は明日、初デートしてきます。返信がないからリースは忙しいのかもしねないけど、勝利を祈つてくれる嬉しいな。じゃあ、おやすみ～』

? 送信者：ヴァイスさん

『聞いてしまった……ラグナが明日デートらしい、事態は一刻を争う。俺は……』

? 送信者：お母様

『リースへ、グランツさんから話は聞きました。異世界とはイキナリですが、体調を崩さずには。それとナンパされてホイホイついていかないようにな?』

? 送信者：カリムさん

『管理主任殿へ、グランツ団長からあつたロストロギア回収の件ですが、できる限り無傷でと依頼がきています。このメールを見ているころには既に無事確保できているこうどうか?』

? 送信者：エリオ

『リースさんへ、お疲れ様です。どうも大変なことになつたようですね。なんて言えば良いかわかりませんが頑張つて下さい』

? 送信者：キヤロ

『リースさんへ、リタさんと一緒に事件に巻き込まれたとお聞きしました。どうかご無事で、帰つてきたら連絡して下さいね』

? 送信者：オレンジ博士

『やあ、いつも面白い作品をありがと。代金は指定の口座に振り込んでおいたよ。今後は私も娘たちも忙しくなるから申し訳ないが次回依頼は当分先になるね』

? 送信者：ユーノさん

『ここにちはアペリス、ジュエルシードの事件に巻き込まれたって聞いたよ？ アレはとても危険なモノだから扱いには慎重にね。帰つてきたら話を聞きたいから連絡もらえるかな？ お願い…そして気を付けてね』

? 送信者：ラグナ

『お兄ちゃんが入院しました』

……ってヴァイスさんに何があつたんだ！？

以前に死亡フラグよりは入院した方が良いんじゃね？ とは思つていたが……

てゆーか六課大丈夫なんだろうか？

それにしてもお母様……気にしないことにしよう。

そしてカリムさん、ロストロゴニアは既にリタが破壊済みですよ？

カリムさんだから絶対に無理だってわかっていて言つている気がするな……

ちなみにエミリオからメールがないのは、異世界では連絡が通じず、それに皆同じようなメールをしている、といった無駄なことはしないという考え方からだろう。

……わかっているから悲しくなんてないもん。

「どうで午後まだいるの？」

事務連絡後、食後のティータイムをしている最中、リタがそう訊ねてきた。

「今のところ特に予定はありませんね、もう少ししだけ街中を散策してみようかとは思いますが……」

午前中に予定していたショッピングモール 河川敷 臨海公園は終わってしまったのだが……

「あ、予定がないのならわたしと一緒に買い物にいってみない？ さつきのお礼もしたいし、まだ聞いてみたいこともあるしどうかな？」

お礼つて……むしろ巻き込んだのだが？

そう口に出しかけた瞬間……

「ひー、お姉さんに恥をかかせるんじゃないぞ！ むしろ誘う勢

いで言わなきやだめだよ！

勝手すれば？ あたしは自由にいつかせてもらひにがい

外野（てか念話なので内野？）から口撃くちげきが……

まあ、私としても予定があるわけではないので……

「私でよろしければお供致します」

男子たるもの紳士あれとな。

ん～でもその格好じやねえ、なんか地味……あつ少し破けてる！
そういうばれつきバリアジャケット展開してなかつたもんね

あの時は空間殲滅でしたし……それに自分だけ、といつのも気が引
けまして……つてこの服はクロノさんの御下がりなのですが？

それを地味つてあなた……

ふふ～ん！ こんなこともあらつかとぞひき出しで発掘して
きたのだ！

「美由希ちゃん、ちょっと奥借りるね？ すずかちゃん、リタち
ゃん、少しだけ待つてね～ アペリス君はこいつちきてね」

なんなんだ？

ハイハイさんに連れられ奥のスタッフルームへ。

セレニティーは……

「お・ま・た・せ～」

「ハイハイやんノリノリ。

「ふつ、くつ、こつ似合つてゐじやない?」

リタぬつゝ。

「ああ～懐かしい 劇でフロイトちゃんが着ていた衣装ですね?」

「コレはフロイトさんの御下がりだったのか……

「ソレの通り、ソシヤツは少し破けていたので、ハイハイさんが用意していた服に着替えることに……それが……

「……これなんて蒼 石ですか?」

一応ズボンといつかハーフなパンツといつか、その辺に救いはあつたが……

「いやあ～昨日もヒラヒラしたブラウスだったから抵抗感ないのかな～と思つてたんだけど～」

昨日の自分に黙つてやりたいわ、ヒラヒラはやめておけと。

そしてお世話になつてゐる手前、断れない自分が悲しい。

「はい、帽子も忘れずには　いや～これを見ると昔の劇を思い出すわね～え～と、確か題名は『マリサゲーム』だっけ？」

なにそれこわい。

「イイミヤさん曰く、この服を着て語尾が『なの』口調の姉役を守る鍔の騎士フロイトさん、ひたすらヤクト空容器を積み上げるすかさん、とっても真紅でバーニングなアリサさん、ひたすら出番のない地味な策士はやてさん……カオスだ。

「じゃあ騎士さん、すずかちゃんの護衛よろしくね～」

この格好で外を歩けと？

翠屋を出たら即効でバリアジャケットに着替えよつ……魔力消費なんて気にならない。

「あつ、そうだ。セイクリッド・スカイでデカイ魔法使つたでしょ？ データ欲しいから借りるわよ？」

リタにデバイスを取りあげられた……これで退路はないと。

ふと助けを求める視線を美由希さんに送るが……田線が『このリ充アガーッ』と語つていた。

高町夫妻は忙しそう。……孤立無援とは云ふことか。

「あつ、これ餞別」

そう詰つてリタに傘を渡された。……どうやら夕方から翌日らしい。

ほりほり、ひままで御膳立てしたんだから男らしくてこつちやいな
さい。

既に格好が男らしくないんですが？

……しうがない、ここにいてはからかわれるだけだ。

「では行きましょうか、お姫様？」

「じゃあお願ひね、小ちな騎士さん」

この格好で街中を歩くのはもの凄く辛いが……なに、あと数時間
後には帰るのだから……やつ思えばなんともなる。

ビーとドモなれ。

【蒼き星騎士】の称号を得ました！

原作時間軸～海鳴クエスト（休息？編）（後書き）

色々煮詰めすぎた話になってしましました。

そして主人公の行く末は：

今週中には次話投稿したいものです。

原作時間軸～海鳴クエスト（青春？編）（前書き）

何度も書き直すハメに…

どーしても主人公を格好良くするとR指定とか違和感とか出まくる…

なので報われないのはデフォで（笑）

わざと新章では良いくさがあります。

原作時間軸／海鳴クエスト（青春？編）

【蒼き星騎士】せっこきし

説明：黒歴史を恐れない物に『えられる称号

条件：蒼 石のコスプレをした

効果：バリアジャケットに蒼 石コスが登録されました

備考：鍔は別売りです

ピロツーン！

バリアジャケットにコスチュームが登録されました

……えつ？ それだけ！？

てゆーかいらぬええええーー！

「あんたって重度の厨二病？ なに『終末の時計は動き出した』って？」

えつ！？ まさか前回分のツッコミをいじりでー！？

「いや、その前の『救う』とか『奪う』とか『生きたい』だの『死

にたい』だの……」

やめてええー!?

不在回の分までツッコミを入れないでええー!?

「 廚一病院」

ぐはあつー!

外に出て激しく後悔した。

想像以上に視線を感じる……そりゃ目立つよね、外人のコスプレ
つて……

そこ!『写メどるな!!

でも得意のポーカーフェイスで表面は比較的穏やか。

心の中は涙で海ができているがな!

それはともかく

「どこまで行きますか? 街中のショッピングモールではまた絡ま
れるかもしだせませんよ?」

精神的にもだいぶ参つてるので面倒事は勘弁して欲しいのだが

……

「あら？ 小さな騎士さんは守つてくれないの？」

すずかさんは楽しそうにそつ切り返す。

正直な話、デバイスなどなくとも街のチンピラとかナンパ野郎が複数相手でも、身体強化とか魔力放出とかすればどーともなるが

……

「 私にできる」とは『逃走』か『誠心誠意の謝罪』くらいですよ？」

暴力沙汰はダメだ。

異世界の国家権力のお世話になるわけにはいかない。

「立場上、問題は起つせませんし……正当防衛すら危つに身ですか？ なにぶん身分証明が難しいですから」

だから出来るのは精々逃走と謝罪の一択だけだ。

「この格好もありますし、できればあまり人の多くないところがやりがたいです」

視線が痛い……

「そつか、そうだね。じゃあ、予定変更して散歩にしようか？」

お礼も言葉で十分、むしろ巻き込んだくらいだ。

美人さんと一緒に歩けるだけ良しとしよう。

「ねえ、異世界に…急に見知らぬ場所、勝手のわからない所に来て不安じゃなかつた？」

午前中からの引き続き、色んな質問に答えながら人通りが少ない道を歩く。

ふと、その中ですずかさんが問いついた。

「不安じゃなかつたと言えば嘘になるだろ？が……」

「色々な要素がありましたからそこまで不安ではなかつたですね。そもそも私一人ではなかつたですし……それにすずかさんに救われましたから」

ジユエルシードが関わっている時点でいざれ管理局が……そんな楽観的な考えもあつたし……まあ、自分一人ではなかつたしね。

まあ、途方には暮れていたが。

「……そつか、強いんだねアペリス君は。わたしだったら不安で泣

いらっしゃうんじやないかな?「

「そんなことはありませんよ。表情に出でないだけで内面では散々です……」

自分で言つていて悲しくなってきた……

今までを振り返るとホントそんなのばっかりだ。

「それでも、だよ……わたしには出来ないもの」

そう言つて急に黙り込んでしまつ。

何か悩み事でもあるのだらうか?

「ちらも何を言えば良いのかわからないので、2人並びながら人通りの少ない道を沈黙とともに歩く。

いや、どーしろと……気まずさのあまり視線を上に仰ぐと……

「……猫?」

「えっ? 本当……降りられなくなつたみたい」

公園通りの木々、その枝の上から降りられなくなつていると思われるお猫様が……

「いやああ……」

昨日に引き続き同じ公園でお猫様に会いつとは……

「アペリス君……あの……」

頭まで言わざるとも。

「申し訳ないですけど……」

「あつうん、やつぱり危な」後でエイミーさんに服を汚してしまった理由、説明を一緒にお願ひしますね?「…………もう一…………ありがとうねアペリス君」

1の位のことなり……

「もし枝が折れたら危ないので近づかないで下さいね?あの子は……なんとか着地できるでしょう、あつ、傘と帽子お願いします」

そう言つてすずかわんに傘と帽子を渡し、木を眺める。

はつきり言つて登れる箇所が……手足をかける場所がない。

でも畠立つ魔法を使うわけにもいかない、だつたら……

「だた一息で駆け上がらるのみ!」

魔法による身体強化を施し、助走をつけ、木に衝撃を「ええないよう根本を踏み切り……一気に枝まで駆ける!!

そして……

「……」

「 キャツチ！！」

そのまま猫をキャツチして……着地する。

その間ジャスト4秒。

「 ……ミシンコンピューターですね」

「 ハヤアア……」

「 ……えつ？ エエエエエ！？ 登るんじゃなかつたのー…？」

うん、結果オーライだ。

「 ハヤアア……」

「 そ、お猫様もそいつについている気がする。」

「 えつ？ 捨てられりやつたの？」

……全然違つたみたい。

「 ハヤアア……」

「 ……そつか、行くといひがないならウチにおこで？」

「 みやー」

「 うん」

……どーとでもなれ。

すずかさん曰く、「このお猫様は飼い猫だつたのだが、飼い主のお婆ちゃんが亡くなつて息子夫婦にポイされたらしい。」

本当がどうかはわからんが……

飼い猫に野生は厳しく、餌を求めて木の上まで登つたが降りられなくなつたらしい。

典型的なアレだな。

で、このお猫様はすずかさんが飼つたりしい。

「じやあ更に予定変更してウチに向つか?」

「みやつ?」

公園のベンチに座りお猫様を撫でながら、すずかさんがそつ提案する。

まつ、特に予定はないので異論はない。

「あれつ? エルかな?」

『さづけばもう一時を回っていたため、天気予報通りポツポツと雨が降ってきたようだ。

「リタに感謝ですね、まあ、窮屈で申し訳ありませんが……」

そう言つて傘を開きすずかさんを招ぐ。

「ふふひ、じゃあ行こましょうか?」

「みやああ」

いや月村家へ……?

ふむ、道を知らんな……

なんか情けなくなつてきた。

雨の中、傘を差し2人(+1匹)並びながら道を往く。

そして住宅街が一望できる大きな橋へとかかったといひ

「ねえ? アペリス君はフロイトちゃんがきたらすぐ元へ帰るの?』

ふと、すずかさんがそう聞いてきた。

「やつですね。本パイレギュラーといつか、事故で来ていたものですから。多少の心残りはありますが本業はあくまで学生ですからね」

御神の技を見られなかつたし……今朝のウチに見ておくれだつたな。

「やつか、もつとお詫ししてみたかつたけど仕方ないか……」

やう齒こじ再び沈黙く……

何か氣のきいたことでも言えれば良このだが……生憎とやんな言葉は出でしない。

口先だけの野郎でも「一ゆ一時は羨ましくなるな。

「こんな時」……我等がお猫様

「「やつへ……」や「やへ……」や「やへ……」

何を言つてこぬのかやつぱつわからんがな。

「やつ？ 違つよ～もへー ただ切つ掛けになればな～とせ細ひか
え……」

「「やへ……」

「やつ、酔氣を持てないわたしが新しい一歩を踏み出す切つ掛け……」

……

やつぱつわからん。

「……みやあああああ！－！」

「さやつ！－？」

えつ？ お猫様が突然すずかさんの腕から飛び出して歩道から…
車道へ！？

なんでさ！－？

そしてテンプレの如くでつかい輸送用トラック（推定80km/h）が…！－？

咄嗟に身体強化を施し、足元から魔力放出、更にデバイス制御なしの覚えてから一度も使ったことがなかったソニックムーヴ（仮）で飛びだす！

間に合ええええええええええ！－！

「 だめええええええええええええええ－！」

悲鳴だけが辺りに響き渡つた…

原作時間軸／海鳴クエスト（青春？編）（後書き）

主人公死んだー！？　いや死んでないけど。

海鳴クエストはこれで終了。

続きを書きあががつてるので確認と修正したら上げます。

原作時間軸～epilogue（前書き）

ある程度は予定通りの進み具合なのですが、ここまで50話もかかるなんて…早く本編に入りたいと連呼していた割に本当に時間がかかりました。

文章を書く難しさと言いますか…長かったです。

原作時間軸／epilogue

「ふむ、右足骨折、肋骨4本に鱗、全身打撲、急激なGによる内臓負荷etc……全治4か月といったところか……何か言い分はあるか？」

…………ありません。

リリは懐かしの聖王医療院、St・ヒルデ魔法学院初等科の入学校当日に入院して以来だ。

まあ、入院以外でもちょくちょくお世話になっていたが……

そして現在、個室でヴァン師匠せんせいのお叱りを受けております。

「まさかジュエルシード関連ではなく、猫を助けようとして重傷を負つは思わなかつたぞ？」

自分も同感です。

「しかも、トラックに撥ねられたのではなく、『飛び出した勢いで橋から落ちる』とは……」

まさか最後の最後でやうかすとは……

確かにお猫様は無事救出できた。

ただ飛び出した勢いが不味かった。

ダイジョブに説明していくと……

? 身体強化、魔力放出、ソニッシュクムーヴ（制御なし）の急激な飛び出し

? お猫様救出

? 歩道の段差に躊躇のを避けるためほんの少しだけジャンプ
? 勢い余つて飛び過ぎ&飛び過ぎで橋の欄干に右足の脛
が激突（この際に骨折）

? その際にお猫様を手放し、お猫様は『なぜか』無事歩道に着地
? 慣性の法則というか見事に空中何回転もしながら橋の外へ
? そして20m以上下の川に落水（この際に水面強打、全身打撲
と肋骨に鱗）

? そこで気絶、ようやくソニッシュクムーヴ状態が解除（過負荷による内臓ダメージ）

? 雨で勢いの増した川に流される（～～？まで10秒もかからなかつた）

? なんとか海まで流される前にすずかさんに救出された（らしい）

ちなみにすずかさん自ら川に飛び込んで救出してくれたみたいで、
病院ではなく個人の医者を呼んで診てもらつたらしい（すずかさん
スゲー）

そして気付いたら懐かしの聖王医療院でした、つと。

「とりあえずジュノルシード等の件はリタから報告を受けるから安静にしている、もう言つて、ヴァン師匠せんせいは病室を出ていった。

そして入れ違いでお母様が病室にきた。

「もうリースつたらおつちよこちよいね？ 入院セットは持つてきましたから他にも必要なものがあつたら言つてね？」

「おつちよこちよこつて……」

「お医者様の話だと入院2か月と半分、通院1か月と少しみたいね

なんかもう『ゆりかご』とか無理っぽくね？」

途方に暮れていると「ンンン」とノックの音が部屋に響き渡った。

「はあーい、開けても大丈夫ですよー？」

色々とアレな私に代わりお母様が返答する。

「よう！ お前も入院したつて聞いてな。なんだ？ 可愛い女の子かと思ったか？ それは残念、同じく入院中のヴァイスお兄さんでしたつと」

H A H A H A H Aと笑うヴァイスさん……なんだろう今のフレーズに何か殺意を抱いた気がする。

「おひとー。これから診断でな、じゅあなー。」

えつ？ それだけ？

そして再び締まるドア。

「 ファッ ン……」

とうとう心の声が表に出たようになつた。

そしてまたノックの音が……

「はーはー、空いていますよ？ 冷やかしならじ免ですかいらねー」

超投げやり（なんかヤケクソ）でせつ返答する。

「あー、えつと、月村すずかですけど……こんなにほほアペリス君……その、タイミング悪かったかな？」

……とつあえず確信した、私には神さまや聖母さまの加護なんかない。

「じゃあ、お母さんは荷物の整理をしておくから、2人で散歩でもしてらっしゃい」

そう言つて車椅子を渡され、すずかさんと一緒に隣接している聖王教会本部の中庭までいく。

「アペリス君はお母さん似なんだね？ そつくりでびっくりしたよ」

「やうですね、見た目が若いままですと、こいつか自分が老けて見えるのではないかと結構不安なものですよ~。」

「ああ……うん、それわかるなあ……」

そんな他愛もない会話しながら噴水の前まで行く。

「 話は聞きました、川に飛び込んでまで助けていたいた、と」

2人揃つて噴水を眺めながら、そう切り出す。

「お礼……言わせて下さい。危険を省みず私を助けていたいたこと感謝致します、ありがとうございました」

「ううん、元々わたしのせいである子が飛び出しちゃったから……わたしからも言わせて？あの子のこと助けてくれてありがとう」

「そんなこと……ない……です、わっ私が、勝手に……ウッ……クッ

……」

……今日は最後まで言い切れなかつた。

なんか涙が止まらない。

いい加減自分が本当に情けなくて……

「私にも……あつた、みたいで、す。悔しい、とか、情けない、とか……人並みの……」

仕方が無い、運が悪い、いつもそうだった。

『諦め』という呪いをずっとその身に刻み続け……

「何が、^{ナイト}騎士ですかね？ 結局……助けられて、ばかりで……それで浮れて……さぞ滑稽だった、でしょうな……」

もう自嘲する……今までの分も含め本当に自分が情けなくて……

「そんなことないよ？ あなたはわたしに一步を踏み込む勇気、そして新たな道へ進む切っ掛けをくれたもの」

「……えつ？」

顔を上げずかさんを見上げる。

その顔はとても穢やかで、決して嘘を付いてこようのうな表情には見えない。

「あのね、アペリス君、どうしてわたしがここにいると思つ？」

「……………」

「わざわざお見舞い？ な、わけない、よね……？」

「わたしは、今度ミッドチルダに移住することにしたの、今日はお見舞い兼ミッドチルダの下見なんだよ」

「……………」

「ええええええええええええええええええ！」

「どう、どうしてですかー！」

「技術者として未知の分野は夢がいっぱいなんだよ。今まで中々その一步が踏み出せなかつたけど……これを期に、ね？」

いや、確かに魔法技術関連に並々ならぬ関心はあったのは感じとれていたが……

「あら、アペリス君は嫌なの？ わたしとは顔も会わせたくない？」

……まじカオス。

「ふふっ、これからもよろしくね?
『マイ・リトルナイト』?」

—わたしの小さな騎士さん

原作時間軸／epilogue（後書き）

次回より新章です。

これまでと一変します。

だつて　自主規制　なので（笑）

次回更新は11/4予定で…

本編／偉大なる獅子（前書き）

新章開始、この章から正式に本編です。
(今回はじつもよりやたら長いです)

ここまでくるのに4か月もかかるなんて思っていませんでした…

文章書きはとても難しいです。

ちなみに新章タイトルの「・」はディレクターズカットではあります…

本編／偉大なる獅子

幼い頃

見上げるといつも彼女は優しく微笑んでくれていた
時が過ぎ、成長するにつれ

その笑顔を見上げる必要はなくなつていった

だが、同じ目線になるにはまだまだ足りないようだ

両親は常に暴走状態な人たちだった

だから僕は早く一人前になりたいと……騎士になると黙つて家を
出た

僕の望むものはただふたつ

すべては……

新暦75年5月下旬、いつもの目覚ましより早く目が覚めた休日の朝、天気は快晴ではないが曇りでもない……普通の晴れの日のこと。

少しだけダルイ体を一喝し意識を覚醒、寝巻きから着替え、庭へと向かう。

軽く準備運動とストレッチをこなし、待機状態が剣の形をしたキー・ホルダー・デバイス（シャルティエ）を起動、美しい装飾剣を構える。

【 おはようございました坊ちゃん】

本当にデバイスなのか疑わしいこと極まりないが、いつものことなので無視し、黙々と日課の素振りと型の練習をする。

【あれっ？ スルーですか？】

今までこそ庭先で行えるが、昔は聖王教会本部の訓練場をよく使っていた……わざわざ僕のためにリフォームしてくれた叔父夫婦には頭が上がらないものだ。

【あの～放置プレイは趣味じゃないんですか……】

いや、それ以前の話か……叔父夫婦には家出をしてからずっと世話になつていてる状態だ。

【……ぐすん】

小一時間ほど経過し、一通りの型が終了したころ、どこからともなく拍手をする音が聞こえてきた。

いつの間にか庭先にはお客様がきていたようだ……いや、気づいてはいたが彼女なら警戒する必要などない。

逆に違ひ意味で少しだけ緊張してしまつが……

「どうやら今日は僕の方が早く用意めたようだね？ 暖かくなつて
きたから2度寝でもしてしまつたのかい？」

少しだけ意地悪な口調で……だが表情も心情も笑顔で客人に尋ね
る。

「もう……！ いじめないでエミリオ、この時期のお布団の魔力つ
つても凄いのよ？」

彼女も笑顔でそう返してくれた。

「ふふつ、君の場合は年中そういうやないのかい？ ああ、言ひ忘れ
ていたね、おはようマリアン」

そう微笑みながら叔父夫婦の一人娘 徒姉のマリアンに挨拶す
る。

「おはようエミリオ、明日は絶対に私が先に起きて、エミリオを起
こしてあげるんだからー！」

それならば期待して熟睡することにしようか。

そして彼女は朝食の準備のため家中へ、僕も朝練を切り上げシ
ヤワーへ。

【マリアンと話すときの一割でいいから僕にも優しくして下さいよ
】

「黙れ」

【。・。・（つゝ、）・。・。】

わあ、朝食に向ひとこよへ。

「父さんと母さんは昨日から泊まり込みで仕事みたい……」「このと
うの毎日忙しきのね」

朝食時にマリアンがそう呟く。

ちなみに叔父夫婦は聖王教会の騎士団に所属している。

「やうだね、近頃は各方面に騎士団が派遣されているようだじ」

師であつ、聖王教会騎士団の長を務めているヴァンもやう呟いて
いた。

色々な世界にて騎士団を派遣せざるを得ない様々なトラブルが続
いていると。いふ。

おかげで修行の時間が減つてゐる分、僕にもそれなりには弊害が
出でてゐると言えよう。

だが……」「うじてマリアンと2人で食事できる」と云ふ感謝を。

叔父上たちには申し訳なことだが……

【あの～僕の存在は……】

「なにか良いことの前触れじゃなければいいんだけど……」

それは少し大袈裟かもしれないが、用心するに越したことはないだろう。

違和感はある、でも確信は向一つない。

「もじかしいな……」

田に見えない陰謀でも渦巻いているのだろうか……？

まあ、それでも僕の目的のぞみは変わりないだろう。

「？　どうしたのヒミリオ……はつ！？　もしかして味付けがおかしかったとか！？」

僕の呟きを勘違いしたのだろう、あわあわと取り乱すマリアン。

「ふふっ、マリアンの料理はこつも通りおこしよ、ひとつと考え事をしていくね

そんな姿が愛おしく、ついつい笑みが零れてしまつ。

「まひ…。びっくりしたやつたじやなー。」

メツ！ と指を立て注意された。

うん、僕の望みは変わらない。

僕が望むもの、それは【ああ！！ 坊ちゃんもつすぐ占いの時間ですよ！ 早くテレビの電源を入れてええって窓から久しぶりのお空へええええええええええええええ！？】

はあ、さつあと朝食を済ませ外出の準備をするか……シャルのせいで氣乗りはイマイチだが今日は出かける予定がある。

「あつ！ 昨晩に下準備しておいたお菓子がもう少しで焼きあがるからお見舞いに持つていってあげてね」

手ぶらでお見舞いはマナー違反よーとマコアンは言つ。

「まさかそれで寝坊してしまったのかい？ アイツにそんな気遣いはいらないよマコアン」

それで寝坊させてしまつなんて……

「あらあら、そんなことを言つてはダメよ？ 大切なお友達でしょ？」

「ただの腐れ縁さ……」

そんなやりとりをしながらお菓子が焼きあがるまでの間に朝食を終え、出かける準備をする。

「はい、コレ。私も今日は一日、学院の方に顔を出してくるから帰

りは夕方になるわ

「もう言つてマリアンに渡された紙袋からほんの少しだけ甘い匂いがしてきた。

「僕も夕方までには帰つてくれるよ、そつだ！ 今日も叔父上たちが帰宅できないうちだったら外食にしようか？」

「ふふつ、やうじましょつか。じゃあ、気を付けていつてらっしゃいマリオ」

「…………こつでくるよマリアン」

マリアンに見送られ、向う先は聖王教会本部に隣接する聖王医療院……1週間前からアイツが入院している場所だ。

アイツとの腐れ縁の始まりは6歳の時……いや、思て出すのはやめよう。

僕も随分と幼稚だったものだ。

それからは共に『色々』と腕を磨き、父の暴走に騎士カリムを含めた3人で苦労し……その後はシテ・ヒルデ魔法学院に入学し……トランブル様々な経験の末、今に至る。

決して平穏な日々ではなかつた。

だが、退屈する日々でもなかつた。

そんなことを考へてゐる内に聖王医療院に着いたようだ。

アイツが入院している病室の前まできたのだが……

【入らないんですか坊ちゃん?】

病室に入るのに躊躇しているとシャルがそう訊ねてきた。

「……これは経験上から来る『カン』なんだが、今開けると後悔しそうなんだ」

何が、とは言わない。

【……もう少しじだけ寄り道していきましようか?】

「……そうだな、確かヴァイスも入院していたな? そちらにでも顔を出してくださいか」

【そうですね……ヒューかアレはむしろ坊ちゃんが……なんでもあります】

アレは勝手に自滅…むしろ自爆か？ 僕は何一つ手を出してない。
い。

とりあえず「アイツの見舞いは後回し、先に、ヴァイスをからかいに行く」としよう。

ヴァイスのことなので診察の時間以外はあまり病室にいないだろうと考え（本々たいした怪我ではないので）最初から喫煙できるスペースから探すことにして。

「喫煙室にはいなかつた……となると、だ

【屋上でしょうか？】

なんとかは高い所が好きといつしな。

そうして屋上へ向かい、扉を開けると……

「んっ？ わお、お前かよ……看護師かと思ったじゃねえか……」

空を見上げながら煙草を吹かしているヴァイスがいた。

「……屋上も今や禁煙だ、大人しく喫煙室で吸うんだな。それか禁煙しろ」

「

「「いや また厳しい…… 最近は喫煙者に厳しい世の中になつた」と
で……」

【商売的には良い金になるでしょうけど、人体には百害あって一利
もないですからね】

まあ、僕の知ったことではない。

「それにしてもどうしたんだ？ 僕を笑いにきたのか？」

「それもあるが「おーこらーーー！」……（半分は）冗談だ。まあ、そ
れでも自業自得だろ？……」

僕はあの時、後ろから声をかけただけだ。

「……忘れよづば過去のことなんぞ？ 僕たちは未来といつ希望に
向つて生きてこきやあここんだよ」

【なんかキレイにまとめようとしていますよ？】

気が済むまで放つておけ。

「ところどよ？ アイツんとこは見舞いに行つたのか？」

我に返つたヴァイスがそう訊ねてきた。

「いや、病室の前で悪寒がしてな。後回してした

そろそろ良い時間だらうか?

「ああ～そうだな……行けばわかるか……よし逝つていい

おい……

「あと俺さ、明後日で退院だからその祝いを……」

早足で立ち去りドアを勢いよく閉める。

ヴァイスが何か言いかけていたが気にしない。

アイツの病室に向つこうとする。

そして再びアイツの病室前にきた。

今回は先ほどのような悪寒はしない。

あまり良い気分もしないが……

【あつ、一応ノックしてから入りましまじょうね坊ちやんー】

失礼極まりないデバイスだな?

最近またうるわしくなつてきた。

再度、待機状態では話せないようじよつか?

まつたく……きちんとノックぐらいですね。

パソコン、とハックしたところ「…………」と返事が聞こえ
てきた。

かれこれ一週間以上は聞いていなかつたがアイツの声だつた。

若干疲れている声色だつたが気にせず入室、そして第一声。

「……失礼した、どうやら病室を間違え「いえ、合つてますから
……そうか」

ふむ、確かにアイツの声だ……どうやら間違えてほいりしてい。

だからひたすら聞くな。

「 なんだその格好は?」

「 ……スリーパー（パジャマ）と認識して欲しい……かな」

どう見てもネグリジェだ……しかもピンクでフロフリな……

そして髪にもリボンが……

【わーお、可愛こと思こますよ~ ウチの坊ちゃんには敵いません

少しだけ空いていた窓の隙間からシャルを旅立たせた。

今度からやつぱり黙らせておけ。

「……ナニがあつた？」

問わずにはいられなかつた

お母様に強力な味方が付いた

僕も気を付けるとします。

そもそも個室だから良いものを……その姿で出歩くのか?」

「それも込みでお世話をされている状態……でもお嬢に行けません」

娘を貰えはいしんじやなしのか?

ひゅるるーっと、窓からはなんとも言えない春と夏に挟まれた風が吹いていた……

「……それはそうと、かれこれ10日ぶりくらいでしううか？」

少しさは立ち直つた……とこりよりも開き直つた……むしろヤケクソなのだらうか？

「イツの場合は表情おもてにあまり感情を出せないからわかりづらい。

ついでに妙ちくりんな丁寧言葉も相変わらずだ。

「まあ、正確には9日だな」

「そつか、9日も顔を合わせていなかつたのもけっこつ珍しいですね？」

そういうえば……学院では同じクラスが多かつたし、休日も同じ師の元で修行していた……長期休暇ですらよく聖王教会で顔を合わせていたものだ。

腐れ縁もここまで続くと……

「……キモチ悪いな」

「失礼ですよね？」

「イツとの関係はこれくらいで丁度いいものだ。

ふん、百歩譲つて『友人』とは認めんこともない、苦難も共に乗り越えてきたものだ。

そういう意味では『戦友』、『共犯者』とも言えないことはないが……

だが、『親友』ではないだらう。

そう、僕たちは互いに深く詮索せず、多くを語り合わない。

だからこそ、それなりに長い付き合いができるのかもしれない。

僕は図々しくて能天氣で馴れ馴れしい奴が大嫌いだから……

「世話になつてゐる叔父夫婦の家の従姉が焼いてくれた菓子だ、味わつて食べるんだな」

そう言つてマリアンが用意してくれた菓子袋を渡す。

「えつ？ ありがとうございます」

ちなみにゴイツにマリアンのこととは話していない。

「ゴイツに限つてはないと思つたが色々と茶化されるのはゴメンだからだ。

リタや騎士カリムなんかは要注意だな。

「折角だからお茶を入れましょつか、少し待つて……」

「いらっしゃん、長居はしない。そもそも足折れているんだらう？」

「ポートなどを遠隔操作すればできますよ？まあ、それは次の機会にでも……お菓子は後でいただくことになります」

「コイツは相変わらず無駄に幅広い魔法技術&知識を持つているな……戦闘関連はイマイチだが。

用件、といつまでもないのだが、それだけ済まして退室する」とにしよう。

「最近になって聖王教会が忙しい……いや、騎士団を派遣するような任務続きだというのは知っているな？」

「……お母様から聞いています。ウチも父さんが騎士ですか？なぜ『お母様』と『父さん』なのだろうか？

「コイツも存外、父親の扱いがひどいのか？

「ふん、わかっているならいい。それでヴァンも忙しくて僕たちの相手をできないそうだ」

あのヒゲは『一応』騎士団のトップだしな。

「そもそも私はこんな状態なのでアレですが……」

まあ、それもそうだな。

せいぜいリハビリと自主鍊に励むんだな。

「さて、じつちが本題だ。今話した通り聖王教会騎士団は人手不足だ」

「この流れならある程度わかるだろ?」

「僕も騎士見習いとして任務にあたることにした」

「当初は中等科卒業後にと考えていたのが……」

少しの沈黙……そして感情の読めない表情で尋ねてきた。

「……そうですか、学院の方は?」

「聖王教会関係のことなら融通がきく、何日も連續で休むわけではないしな」

今までだつて割とそうしてきた。

そもそも学院での成績と素行も問題ない。

「……危険な任務ですか?」

「僕もヴァンから総合Aランクの証明書をもらつていい、それ相応の任務だろ?」

すぐにCランクまでがつてやるつもりだが。

「参考までにどんな任務なのですか？」

「明後日から行われるオークション会場の警護だ、本来なら騎士力リムが後見人を務めている管理局部隊が警護にあたるのだがそちらも人手不足でな、確か場所は……」

「ホテル・アグスター……？」

ほう、知っていたのか。

まあ、オークション自体が極秘というわけでもないしな。

「そうだ、そここの会場警護にあたる。もちろん複数人での任務だがな」

そして続ける、むしろこれからが本題だ。

「見習いとはいえ騎士を目指す身だ。これを機に騎士としての名を持とうと思っている」

それは両親との決別ではない。

常に暴走状態な両親でも心底嫌っているわけではないのだから。

そう、これは僕の決意だ。

一步でも先へと進む足がかり、切つ掛け、一人の男として存在の証明をしたがためのワガママ……

「リオン・マグナス、騎士としてはそう名乗るつもりだ」

古き言葉で『偉大なる獅子』といふ。

まあ、マグナスの姓 자체はそう珍しいものではないが。

数年前、コイツに話そつとして結局は話さなかつた僕の望み。

そう、すべては……

マリアン
彼女と対等な目線で交わせる一人前の男となるために

その時は少しばかり気が昂つていたのだろうか気が付かなかつた。

コイツが普段のポーカーフェイスを崩して驚いていることに……

本編／偉大なる獅子（後書き）

まさかのリオンサイドでＳｔｅＳ本編が始まります。

主人公の座から降板したわけではないです（笑）

ちゃんと戻ります！

そしてリオンサイドでも一応、出番はあります、活躍はともかく。

これからも妄想の限り頑張っていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6126u/>

私のリリカル・まじカオスな転生記

2011年11月4日07時12分発行